
ピノキオのあし

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピノキオのあし

【Nコード】

N7663B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

高校生の陽彦^{はるひこ}は、アルバイト先でピアノの弾き語りをする榛菜^{はるな}と知り合う。榛菜は初めて見た時から左脚を引きずっていた。何時までも引きずる彼女の脚は何時治るのか？しかし、彼女の左脚は治らない：それ自体が既に無かったのだ。そんな中、クラスメイトの恭子に興味を持ち、勢いで関係を持つ陽彦だが、彼には恭子と付き合う気は無かった。陽彦は変貌していく恭子の姿に困惑し、榛菜に心惹かれながらも義足を着ける彼女と付き合う事に戸惑いを感じる。

プロローグ◆第1話◆

広いとは言えない国道沿いに小さな神社がある。鳥居はやけに立派だが、神社の建物は小さい。

小さな神社の敷地は、空き地などほとんど無いこの町では、子供たちの格好の遊び場だった。

一番に来た連中が真ん中をどうと使うことが出来る。女の子などは、何時も端のほうで小さく固まって何かをしているのが普通だ。

敷地の端にはブランコとスベリ台もあるので、真ん中を使えないからといって、遊べないわけではない。

僕は友達十人ほどと一緒にカン蹴りをしていた。全国的に呼び名は一緒だと思うが、まあ、かくれんぼと鬼ごっこを合わせたようなものだ。

神社の建物の周囲は小さな林になっているが、他は道路に面していて住宅が広がっている。だから、何処までを隠れる場所の範囲とするか、あらかじめ決めておかないと、ある者は果てしなく逃げてしまい永遠に見つけられなくなる。

いつまでも誰も捕まらないかくれんぼは、それはそれでつまらないものだ。

かくれんぼとカン蹴りの一番の違いは、鬼の居ぬ間に陣地であるカンを、捕まっていけない誰かが蹴り飛ばせば、捕まっていた連中は解放されて再び逃げられる事にある。

他の連中はあらかた捕まってしまい、見つからないのは僕と、ケンイチだけになった。

鬼の聡史は周囲を警戒しながらも、残った僕とケンイチを捕まえようと、やっきになっている。

ブロック塀の影からケンイチが顔をだしたので、僕はびくりと身体を一瞬硬直させてから、思わず息をついた。

「なんだ、ケンイチかあ」

「どうするハル。どっちが行く？」

ケンイチが僕に小声で言った。

この状況だと、どちらかが仲間を解放するためにカンを蹴らなければならぬし、捕まった連中もそれを期待して待っている。

「ケンイチはここで様子を見てろ。俺、反対側から回り込む」

ケンイチがOKのサインをして無言で頷いたのを見て、僕は民家の裏庭を通り抜けて神社の反対側へ抜けた。

裏庭はひんやりとじめじめしていて、土の上に緑のコケなどが生えていた。粘土質の湿った土の上で、一瞬足が滑って転びそうになる。

神社の反対側へ無事に抜けた僕は、狭い路地を挟んで神社の敷地をこっそりと見渡した。

その時、鬼の聡史が途端に走り出した。ケンイチの姿を見つけたのだ。

僕は聡史がカンから離れたのを見て、迷わずダッシュした。

僕に気がついた捕虜たちが、声を上げないようにして一斉に手招きしていた。

僕がいた神社の側道沿いには桜の木が何本か植えてあり、左側の視界を妨げていた。視界が悪いため、聡史からも見えにくかったのだが…… そこから女の子二人が出てきたのだ。

「どけよ！」

僕は大声で怒鳴って、それでもかわそうと精一杯身体をよじったが、一人の女の子と身体が触れてしまった。

その時のぼくは小学校六年生。女の子は4年生くらいだろうか……

……

そんなに激しくぶつかったわけでは無かったが、その娘はよろける間も無いくらいにいきなり地べたに倒れた。

僕はほとんど影響なく走り抜けて、そのままカンを蹴り飛ばした。そして振り返ると、女の子がべったりと地面に倒れていた。

捕まっていた連中は我先にと、神社の敷地から消えていった。

「俺、タイムな」

慌てて駆けつけ、カンを拾う聡史に僕は言った。

そんなに強く当たった覚えも無いので、僕にはたいした罪悪感は無かったが、一応倒れた女の子が心配だった。

「大丈夫？」

そう言って、笑いながら女の子に駆け寄る僕に、一緒にいた娘が冷たい視線を送った。

「なんだよ。軽くぶつかったただけだろ。大げさなんだよ」

そういうながら、立ち上がるとする女の子を見て、僕の身体は凍りついた。

一緒に居た女の子が肩を貸すが、お互いに身体を支え合うほど二人ともガッチリしてはいない。

立ち上がろうとして、思うように足が動かない女の子。

長ズボンの裾から見えたのは、肌色と言うよりむしろ材木のような無機質な足首…… いや、何処が足首なのかはよくわからなかった。

それはまるで、ピノキオの足だった。

「足……」

僕が思わずそう呟くと、再び連れの女の子は僕をキッと睨んだ。転んだ当人は、起き上がるのに必死でそれどころでは無いのだらう。

片足で踏ん張りながら、もう片方の足は思うようには動かない。

いや、あの足を動かせと言う方が無理だろう。

僕は、彼女が起き上がるのを黙って見つめていた。

その後、きちんと謝ったのかは覚えていない。

ただ、見てはいけなそうだと思うながらも、無機質なピノキオの足から視線が離れなかった記憶だけが、はっきりと残っている。

しかし、それさえも何時の間にか忘れ去って、僕は健常者に囲まれながら健常者として生きてきた。

それが今の僕だ。

【第1話】

五体満足。よく言われる言葉だが、普通の人はそのを受け流す事の方が多だろう。

生まれた時から今の健康な身体、物心ついた時からずっと五体満足の人は、僕も含めそれを特別意識したりない。

両手があって掴みたいものが何でも掴めて、両足で走り、跳び回り自由自在に動く身体が当たり前なのだ。

それらは動かそうと言う意識すらしないまま自由に動く。だから、それに対して特別感謝する者など皆無に近い。

しかし、もしも突然足が無くなったら。

誰もが自分は五体満足なだけで幸せだったのだと思う事だろう。

そして両親は、勉強が出来ようが出来まいが、タバコを吸おうが、悪態をつこうが、五体満足であった子供の健康だった日々を思い起こして嘆くだろう。

僕が健常者と言う言葉を耳にしたのはつい最近で、最初はその意味すら判らなかった。

身障者とか健常者とか、そんな事考えた事も無かったし、時々テレビで見かける障害を持った人たちには同情はするが、それはあくまでも自分の知らない世界の遠い場所での出来事でしかないと思っていた。

もちろん、街で車椅子を見かける事もあるが、何となく風景の一部として捉えるだけで、それに対して何かを感じる事は殆ど無かった。

僕は高校3年生になったばかりの春、今までに拍車をかけていい加減な毎日を過ごしていた。

とりあえず学校には行くが、勉強なんて全く興味が無い。

毎時間、机に座ってただひたすら授業時間が終わるのを待つだけだ。

自習や僕らに関心の無い教師の時間は、隣近所と適当に遊んで過ごせるが、やたら気合の入った教師の授業ではそれも出来ない。

何もしない五十分間は、とてつもなく長くて永遠だ。

この学校は区立の普通高校で、可もなく不可もなく、勉強の出来る奴、運動の得意な奴、そして、何も出来ない奴が一緒くたになって授業を受ける。

共学だから女子もいるのだが、どうもレベルがイマイチだ。

レベルとは、つまり容姿の事で、そのレベルの高い娘はみんな私立へ行くという噂だ。

「ちょっと、陽彦。掃除ちゃんとしていきなさいよ。あんた今週当番でしょ」

帰りのホームルームが終わって直ぐ、鞆に手をかけて立ち上がった僕に声をかけてきたのは、橘恭子。

「わかってるよ。荷物の整理してただけだろ」

「そんな事いって、今週ぜんぜん掃除して無いじゃん」

恭子は一年の時もクラスが一緒に、二年では違っていたのに再び三年になって一緒になった。

何だか知らないが、僕に対してズケズケと何でも言うてくる。

「おい、ハル。帰んねえの」

友人の聡史が声をかけた。

僕は、彼を振り返って、そして再び恭子を見る。

今時、みんなコンタクトを使用してるというのに、彼女は目に異

物を入れたくないという理由で眼鏡をかけている。

黒いセルフフレームに縁取られた長方形のレンズ越しに僕を見つめる目は、何処か母親のようで、コイツには逆らえない。

アキバではメガネっ娘などというモノが流行っているらしいが、彼女の年季の入った眼鏡姿には誰も振り向かない。

「判ったよ」

僕は、溜息混じりで鞆を机の上に置くと

「悪りい、俺掃除当番だ」

聡史にそう告げた。

◆第2話◆

東上線で池袋へ出ると、バイトの無い日は陽が暮れるまでぶらつく。

サンシャイン通りのゲーセンに入るとたいてい誰かしら顔見知りがあるが、誰も見つからない時は、ハンズの中をぶらつく。

公園にたむろする連中も多いが、僕はあまり好きではない。

ハンズの階段のベンチの方がまだ。

まあ、大勢でいると、それはそれでかなり迷惑だが……

西武池袋線に乘ろうとホームを歩いていると、目の前に橘恭子の姿を見つけた。

以前にも何度か見かけた事があるが、彼女は僕と同じ方向に家があるというだけではなく、同じ駅で降りるのだ。

僕は以前もそうしたように、彼女に気づかれないうちにさっさと手短なドアから車両に乗り込んだ。

彼女は確か文化部のはずだから、どうしてこんな時間に帰るのか僕にはわからない。

練馬の駅で降りて、豊島園行きに乗り換える。

「あっ、陽彦」

……ちっ、見つけた。

「おお、何だ一緒の電車だったのか」

僕は、白々しくそう言って笑った。

「今、帰り？」

「ああ、お前は？ 何でこんな遅いの？」

僕はとりあえず、どうでもいい事を訊いていた。

「塾よ」

恭子はそう言って、少し笑みを見せると

「来月には予備校へ替わるけど」

「大学行くの？」

「うん。陽彦は？」

そうだ、もう3年だ。みんな来年から先の事も考えているのだろうか。

「いや、俺は行かないと思う」

「そう」

静かに笑う恭子の顔は、駅の街灯に照らされて、教室で見るとは違う優しいものだった。

到着した電車に乗り込むと、隣合わせに座ったものの、豊島園の駅へ着くまで僕達は言葉を交わさなかった。

「じゃあ、バイバイ」

駅を出て通りを渡る時、恭子を見たことも無い無邪気な笑顔で僕に手を振った。

「ああ」

僕は何だか恥ずかしくて、はにかみながら軽く手を上げた。

緩い下り坂の歩道を歩く彼女の背中を見つめながら、僕は住宅街に足を踏み出した。

僕は、練馬駅近くの線路沿いに在るベルリネッタと言うイタリア風カフェレストランで、夕方からバイトをしている。

週に一度の定休日意外は、殆ど毎日、夕方六時から夜の十時まで入っていて、週末の忙しい時には十二時までいる場合もある。

個人オーナーが経営する小じんまりとした所だが、レンガ作りの小さな洋風の建物が僕は気に入っている。

お客はみんな酒を飲みながらパスタやラザニアなどを食べたりする。

カウンター席の奥には、アップライトピアノが置いて在るが、今は引く者がいない。

アップライトピアノとは、グランドピアノと違って縦に長いタイ

プのもので、小さなスペースにも置く事が出来るのが特徴だ。

以前ここで弾き語りをしていた女性は、突然ロサンゼルスへ行くと言って消えてしまった。

ちょうど去年の暮れの事だ。

お客のオーダーを取って厨房へ伝え、出来上がった料理をテーブルへ運ぶ。そして、厨房では食器を洗う。

つまり、僕はウェイター兼皿洗いと言うわけだ。

大学生のバイトがもう一人いるのだが、何だかんだと用事の多い奴で、一週間に三度くらいしか入らない。

「明日から、弾き語りの娘来るから」

「えっ、マジですか？」

皿を洗う僕にマスターが行ったので、一応驚いて見せる。

僕にとって、ピアノを弾く人がいようがいまいが、実際あまり関係ないのだ。

◆第3話◆

翌日教室で見た恭子は、何だか何時もと違う気がした。

肩に着く黒髪に、黒縁の眼鏡。肌はキレイだが、頬にある少しのニキビ。何処が何時もと違うのか……もしかしてもともと、他の娘よりは幾分マシなのだろうか。

僕はそんな事を思ってしまう自分に、思わず頭を振った。

「おいハル。恭子見たか」

サンドイッチをほお張りながら聡史が言った。

昼休みは屋上で過ごす事が多い。校庭が狭い為、昼休みだけ屋上が開放されるのだ。

高いフェンスに囲まれているが、ちょうど南側のビルの谷間には、東京タワーが小指ほどの大きさに見る事ができる。

「何が？」

恭子の話題が出た事で、僕は少しだけ動揺しながら、それでも何食わぬ顔で応えた。

「アイツ、今日色つきのリップか何か着けてたぞ」

何て目ざとい奴だ。そうか、だから何時もと少し違って見えたのか。

「お前、よくそんなの見てるな」

「恭子は、少し化粧すれば意外と可愛いと思うんだよ」

「理奈の方が可愛いだろ」

理奈とは、聡史が今年に入ってから付き合いだした他校の彼女だ。

「あいつは、容姿はいいんだけど、バカだからな」

「何だよ、お前、外見重視って何時も言ってたろ」

「そうなんだけど、あまりにも常識無いのも考えもんだぜ」

聡史はそう言いながら、四角いパックのコーヒー牛乳を飲んで笑った。

バイトのある日は忙しい。と言ってもそれが殆ど毎日なのだが。だから、僕は勉強している暇なんか無い。自分には、よくそう言い聞かせているが、一種の逃避でも在る。

バイトを始めたきっかけは、バイクが欲しくなった為だ。

映画ローマの休日を見た僕は、彼女を後ろに乗せて街を走りたいと思った。

しかし、原付では当然二人乗りできない。仕方なく自動二輪を取得したが、教習バイクに乗っているうちに、スクーターではなく、スポーツバイクが欲しくなってしまった。

まあ、どうせ彼女がいるわけでもない僕は、バイクに跨って走る楽しさを純粹に感じるようになったわけだ。

しかし、結局はバイクのローンの為に毎日バイトに明け暮れて、イタ飯屋と自宅の往復が、唯一ティンダフTWを走らせる時間となる。

だから僕は、わざわざ一度家に戻って、バイクに乗ってバイト先へ向かう。

オーナー兼マスターの高峰さんもバイクに乗っているらしいが、イタリア党らしくドカティを所有している。

ベルリネッタに来るのは、会社帰りの独り者からカップルまで様々で、中には写真家を名乗る者や、漫画家までいる。

七時を過ぎた頃、マスターが僕に声をかけた。

促されて視線を向けたスタッフルームの出入り口には、一人の女性立っていた。

小柄で、黒い髪を後ろで束ねている。白いブラウスとエンジのロングスカートが何処と無く昔のカントリー風に見えた。

化粧をしているが、かなり若そうだ。潤んだような大きな瞳が、店の間接照明の明かりを取り込んで淡く輝いていた。

「里見、今日から弾き語りをしてもらおう七倉榛菜さんだ」
マスターに紹介された女性は、深々と頭を下げた。

「里見陽彦です」

僕は、彼女に釣られるように頭を下げた。

「あれ、そう言えば里見の名前は陽彦か。ハルが二つになったな。縁起いいかも」

マスターはそう言って一人で納得して笑った。

マスターに促されて、榛菜はゆっくりとピアノに向かって歩いた。その姿を見て、僕は彼女の片足が悪い事がわかった。

心の隅で、気の毒な思いと少し残念な気持ち^{こころ}が沸き起こった。

何故なら、彼女の黒々とした丸い瞳と白い肌が、僕の心を確かに捉えたからだった。

それなのに、身体が悪いのか…… 何故そこでガツカリした気持ちになってしまうのか。身体が不自由だとガツカリなのか。

たまたま、怪我をしているだけだろう。

左脚を少し引きずるように歩く彼女の姿は、その華奢な容姿も相まって何だかとても痛々しく僕の目には映った。

クラシックの聞き覚えのある曲が次々に奏でられ、それが店内の空気を優しく包み込んだ。

アップライトタイプの中では一番大きなサイズのここのピアノは、グランドピアノに近い音色が出るのだと、以前マスターから聞いたことがある。

僕は、仕事の合間に何度も彼女を横目で盗み見た。

ピアノを弾く彼女は力強く、活き活きとしていた。

脚を引きずる痛々しい姿は何処にも無い。

一組のカップルから、歌謡曲のリクエストがあつた。

彼女はいとも簡単にそれを弾き熟す^{こな}。

鍵盤の上を流れるように動く彼女の小さな手を、僕は不思議な気持ちで何度も眺めた。

前にいた女性は、もっと手のひらも指も長くて、いかにもピアノを弾きますという手^てをしていた。

彼女の小さな手が鍵盤の上で踊る姿は、まるで小さな子供が公園

で跳ね回る様子に似ている。

そう、彼女の指はピアノと戯れているのだ。

「里見、こっち上がったぞ」

マスターの声で、僕は意識をフロアへ切り替えた。

◆第4話◆

「お疲れさん。あんなにぶつ通しで弾かなくていいんだよ」

閉店一時間前、榛菜が帰る間際にマスターが言った。

土曜日の今日は、僕も十二時まで入っていたが、さすがにこの時間になるとお客は少なくなる。店は一時までだが、ラストの一時間は週末でも大抵はマスターが一人で切り盛りする。

「はい。今日は自分を覚えて欲しかったので、かなり飛ばしました」
榛菜はそう言って笑った。白目が無くなって、黒い瞳の輝きが一層目立つ。

「おう、里見ももう上がっていいぞ」

「はい」

一応、マスターが声をかけるまで、食器を洗ったりテーブルを拭いたりする。

僕は、黒い大きなエプロンを取りながら、スタッフルームへ入った。

「あら、あなたも上がり？」

榛菜が楽譜を整理してバックへ詰め込んでいた。

「ああ。いま終わり」

僕は彼女の小さな手に思わず視線を落した。

この時、脚に視線が向かなくて良かったと自分で気がついた。

「スゴイ、ピアノ上手なんだね」

「一応、取り得だから」

彼女は脚を引きずりながら、笑った。

「帰りは？」

「うん。お母さんが迎えに来る」

「そう」

何だか話しているうちに、僕らは一緒に店の外へ出た。

彼女の歩くペースはとてももどかしく、そしてやっぱり痛々しい。

僕は手を貸した方がいいのか、そ知らぬ顔でいいのか、こういう人と歩くのが初めてだったから、異常な戸惑いを感じた。

「ごめんね、歩くの遅くて」

彼女は僕の戸惑いに気づいたのか、そう言って笑った。

僕の戸惑う素振りは、逆に彼女に気を使わせていたらしい。

「あ、いや……脚、どうしたの？」

「うん。ちよつとね」

彼女はそう言って、小さな笑みを返すだけだったから、僕はそれ以上訊こうとはしなかった。

外に出ると、軽自動車が一台路肩に止まっていた。ほの暗い運転席の中から、誰かが手を振っていた。

それが榛菜に向けられたものだと思っただけで、僕は小さく会釈をした。

「じゃあ、またね」

小さく手を振りながら榛菜はぎこちなく車に乗り込んだ。

全く手を差し伸べない母親の姿を見て、僕は何だか不思議な感じがした。

「ああ」

僕が軽く手を上げると、彼女はドアを閉める直前に

「おやすみ」と言った。

榛菜の足は、いったいどうしたのだろう。大きな怪我でもしたのだろうか。それとも、何か病気だろうか。

その晩、僕はテレビを観ていても、風呂に入っても彼女の事が頭から離れなかった。

「おやすみ」という言葉が何時までも耳に残っている。

ありふれた言葉だが、親以外であんなセリフを言われたのは初めてかもしれない。

いや、誰かには言われた事があるのだろうが、彼女から発せられた「おやすみ」と言う言葉が、僕には何だかとても特別なものに聞こえた。

そして、思い出す度にキュッと息苦しくなる。

翌日曜日でも何時も通り夕方六時からバイトに入る。

お客の引きが早いから、榛菜は十時で、僕は十時半に仕事を切り上げた。

役割が違うから、榛菜とはなかなか雑談を交わす時間は無い。

途中、簡単なまかないが出されて食事を取るが、何だか客が混みあっていて十分しか時間が取れなかった僕は、休憩に入った彼女と殆ど入れ違いでフロアに戻った。

僕は何だかもんもんとした気持ちのまま、バイクに跨って目白通りから環七を走りまわって、充分に夜風で気持ちを冷やしてから帰宅した。

別に秘密でも何でもないのだろうが、脚を引きずる彼女の姿と、それに相違したあの笑顔が僕にとってとはとてつもなくミステリアスなのだ。

彼女の何かをもっと知りたい。

僕が知っているのは七倉榛菜と言う名前と、ピアノが上手だと言う事。そして、左足を少し引きずって歩く姿。それだけだ。

◆第5話◆

翌日はバイクで学校へ行った。正確に言うと、学校の近くまでだが。

当然のように高校はバイク通学どころか、本来二輪免許自体が禁止されている。

毎日バイクで登校する連中もいるが、皆、近くの路地裏に止めている。

今日は教師たちの都合で授業が午前中で終わりなのだ。僕は久しぶりに上野にでも行ってバイクのパーツを見ようと思っていた。

「ハル、今日これからどうすんの」

放課後、聡史が声をかけてきた。

「俺、上野のバイク屋行く」

「メットある？」

聡史が訊いた。タンデム用の予備のヘルメットの事だ。

「あるけど、行く？」

「ああ」

「理奈と会わないの？」

「ああ、最近めんどい」

聡史はそう言って笑った。

コイツは何時もそうだ。彼女をコロコロ替えて、半年と持ちやしない。

僕たちは学校から駅へ向かう途中の雑居ビルの裏まで歩いて、バイクで走り出した。

上野と言えばアメ横が有名だが、大通りに面して中古のバイク街が連なっている。

車体の値段は少し割高感があるものの、ここを一回りするとだいたい欲しいバイクに巡りあえる。

パーツショップも多いから、買い物には困る事が無い。小さいシ

ヨップでは取り寄せになるパーツもこの辺では在庫が在ったりする。
「おお、結構女子高生いるね」

僕がシヨップから出てくると、付き合うのに飽きた聡史は、歩道の柵に寄りかかってコーラを飲みながら下校する何処かの女子高生の集団を眺めていた。

この辺りは大通りだけではなく、路地を入ってもバイク屋が軒を連ねて、大きな展示スペースにずらりと中古バイクが並んでいる。

僕たちは路地裏に置いたバイクの所まで歩いていった。その間も、僕は連なるバイクを眺めているが、聡史は周囲を歩く女子高生を眺めていた。

「ああいうのって、痛々しいよな」

聡史が不意に言った。

「何が？」

僕は並んだ中古バイクから視線を離して通りを見た。

二人の女子高生がゆっくりと歩いている。そして、その一人は松葉杖を着きながら片脚を庇って、短いスカートから生えたその左足には、ぐるぐるとしつこいくらいの包帯が巻かれていた。

しかし、その光景とは裏腹に明るい笑い声が聞こえる。

あの声……

僕はその声に聞き覚えがあった。

まさか…… でも、あれは高校生だ。

僕たちは普通に歩いても、次第に前の二人の女の子に近づいていた。

僕は、追い越し際にその二人を盗み見た。

二人の女子高生は、笑いながら人の気配に反射したのか、何となくこちらに視線を注いだ。

その時松葉杖の娘と視線が交わった。

「ああっ」

僕は思わず声を出して立ち止まった。

「あっ……」

彼女も立ち止まる。

隣の娘は何が何だか判らずに、笑顔が途端に怪訝な表情に変わった。

僕の横にいた聡史も、おそらくは同じような顔をしただろう。

「き、キミって、高校生なの？」

そこにいたのは、七倉榛菜だった。

彼女は小さく舌を出すような表情で、笑いながら頷いた。

「誰？ 知ってる人？」

榛菜の隣の娘が彼女に訊いている。

「うん。バイトで一緒の人」

「ああ、ウルサイバイクの人ね」

う、ウルサイバイクの人？ 僕はそんな認識のされ方に少しショックを受けた。

「ナニナニ、バイト一緒に、イタ飯屋のか？」

聡史が訊いてきたから、僕は

「ああ」

とだけ、簡単に返事をした。

◆第6話◆

聡史の促しで僕たちは駅前のファーストフードの店に入った。

「えっ、二年生？」

僕は思わず声を上げてしまった。

七倉榛菜は高校二年生だった。

確かに、店に来るのとは違い、殆ど顔に何も塗っていない彼女は幼く見え、夜の店で弾き語りをするのには不釣り合いだった。

「マスターってお母さんの従兄なの」

「従兄？」

「そうじゃなかったら、あたしなんか雇わないよ」

「ピアノが弾けるなんて、それだけで尊敬しちゃうよ」

ハンバーガーを口の中でモゴモゴさせながら聡史が言った。

「あなた達って、この辺で何してたの？」

西岡亜貴と紹介された榛菜の友達が、ケーキをホークで突きながら訊いてきた。

「何って、買い物」

聡史の答えに、亜貴は笑いながら

「本当は、ナンパでしょ」

榛菜の事が少しだけ判った。

彼女は高峰さんの、つまりベルリネットのマスターの従兄妹の娘。そして、バリバリの高校二年生。

化粧をしない彼女は、まるで中学生のように無垢でキラキラした目で笑いかける。

二つに束ねたお下げが、余計に幼さをも少し出していたのだろうか。

僕たちに手を振った彼女達二人は、ゆっくりと歩きながら駅の構内へと入って行った。

西岡亜貴という娘は、ごく自然に彼女のペースに合わせて歩いていた。おそらく、付き合いが長いのだろう。

再び何かを話しながら笑い合う二人の後ろ姿は、麗らかな春の風に吹かれながらちよっぴり切ない香りを漂わせて、僕のこころをくすぐった。

「おはようございます」

裏口から入った榛菜は、笑顔でマスターに声をかけると

「おはようございます」

何時もと同じように、僕の方にも声をかける。

「おはようございます」

僕も軽く挨拶をする。

「新しい人？」

大学生の小嶋祐介が、テーブルを拭きながら僕に訊いて来た。五日ぶりに来た彼は榛菜と会うのが初めてなのだ。

「弾き語りの娘だよ」

「足、悪いの？」

「そうらしいけど、俺もよくは判らない」

祐介は僕と話をしながら、榛菜が入って行ったスタッフルームの扉の方を覗き込んでいる。

祐介は、自分を意外とカッコイイと思っているらしく、時折ナルシストぶりを見せる。

少し長めの髪は、今流行り風に毛先が外側に跳ねて踊っている。僕よりも背は高く、ここの黒いエプロンも確かに様になっている。弾き語りの合間の榛菜に、やたらと話しかけて何やら楽しそうでもある。

僕は、そんな二人を横目で見ながら、料理を運び、食器を洗う。祐介が特に仕事をサボっているわけではないのだが、手の空いた隙の時間の使い方が上手いのもかもしれない。

「里見、ちよろっと休憩いいぞ」

祐介がいる事もあって、八時半頃に僕は休憩を貰って、厨房から自分でコーヒーを注いだカップを持ってスタッフルームに入った。

「あら、休憩？」

「ああ、今日は祐介さんがいるからね」

そこには、ちょうど休憩中の榛菜がいた。

「あの人、大学生？ 何か面白いね」

榛菜はそう言って笑っていた。

化粧を施した榛菜の顔は、もうお下げの高校生ではない。後ろで纏ねた髪を止める緋色のバレツタが、何故か妙に大人っぽい。

ふと僕は、聡史が言った「恭子も化粧をすれば……」という言葉を考えて出した。

女性化粧でこんなに変わるものなのだ。

「里見さんは、どうしてこのバイトに？」

榛菜は紅茶を飲みながら訊いた。

「ハルでいいよ。みんなそう呼ぶから」

僕がそう言うと、フツと彼女は笑った。

「あたしも、ハルって呼ばれてる」

「えっ…… そ、そうか。じゃあ、ややこしいな」

僕は苦笑しながら

「あ、ここで働いてるのは、家が近いのと、建物の外観が気に入ったから。かな」

「何だか、この建物だけ外国みたいだもんね。何時から？」

「去年の夏から。そっちは？」

「あたしはほら、こんな足だから普通のバイトは出来ないし。でも、

バイトしたくて。そしたらマスターがちょうど弾き語りを探してる
ってお母さんが聞いてきて、それで」

彼女はカップの紅茶を飲み干すと

「じゃあ、もうひとがんばりしようかな」

そう言っただけでスタツフルムを出て行った。

僕はまかないのパスタをほお張りながらコーヒーを啜った。

こんな脚って、どういう事なんだろう。当分、あの脚は治らない
のだろうか。

フロアからは再び、流れる水音のような澄んだ音色が聞こえてき
た。

◆第7話◆

厨房に僕が戻ると、客席は満員で祐介が忙しく動いていた。これなら榛葉に話しかける暇も無いだろう。

「里見、向こうのテーブルオーダー頼む」

食器を洗おうとした僕に祐介が言ったので、急いで手を拭いてフロアにでた。

祐介が示した奥のテーブルには家族連れらしい客がメニューを眺めていた。

「お待たせしました。ご注文お決まりですか」

僕はそう言いながら、一瞬石のように固まった。

そのテーブルにいたのは、橘恭子だった。

「陽彦？」

彼女の言葉に、両親と妹らしき少女が振り向いて僕を眺めた。

学校ではバイトは禁止ではないものの、申告制になっているし、酒を出す店でのアルバイトはもちろん認められない。

「知り合い？」

母親が彼女に訊いた。

「えっ？ ああ、そう。ちょっと知り合い」

彼女は、僕がクラスメイトだとは言わなかった。僕は額を伝う汗を気にしながら微笑み続けて無事にオーダーを取ってきた。

厨房に戻る僕の背中には、恭子の視線が注がれているのが判った。

* * *

「ちょっと、何時からあそこで働いてるの？」

翌日学校へ行くと、当たり前のように恭子に捕まった。

「いいだろ、何時からだって」

「何言ってるの、あそこお酒も出すでしょ。学校にばれたらどうするの」

「担任が来ない限りばれないだろ」

「もし来たら？」

「アイツの家、赤羽だろ。何で練馬に来るんだよ」

「あそこの店、時々雑誌に載るんだよ」

僕は知らなかった。そんなにメジャーな店だと言う事を……

確かに、個人で小さくやっている割には来店客が異常に多くて、意外とサボる暇もない。それに、わざわざピアノの弾き語りを置けるくらいなのだから、確かに儲かっているのだろう。

「そんなの、その時考えるよ」

僕は、そう言って彼女が掴んだままの腕を振り払った。

立ち去る僕の背中に、彼女は溜息を投げつけた。

夕方バイトに入ると、今日は榛菜が休みだとマスターから聞かされた。

「車のドアに手を挟んだらしい」

「手を？」

「ああ。大した怪我では無いみたいだけど、しばらく鍵盤は弾けないそうだ」

ピアノ演奏の無い店内は、少し前と同じく静かな音楽をオーディオから奏でる。

気がつかなかったが、生で弾くピアノの音色は特別なのだ。人の温もりが直接音に乗って空間に広がるのだ。

だから彼女の弾くピアノは心地良かったのだ。

その心地よさは、B o s s のスピーカーを持ってしも再現できない。

「あれ、今日ピアノの娘いないの？」

その日僕は五人のお客に同じ質問を受けた。

ひっそりと佇むアップライトピアノだけが、店の隅で細いライトを浴びていた。

翌日僕は午後の授業を抜け出して、朝乗ってきたバイクで上野へ向かった。彼女に会えるかは判らなかったが、今はこれ以外に方法が見当たらない。

榛菜の家の住所は判らないし、もちろん電話番号だって知らない。さっき、やたらと携帯電話が鳴っていたが、液晶を見ると聡史だったのではらくシカトをしていた。

バイク通りにバイクを止めた時、再び聡史からの着信コールが鳴った。

「何だよさっきから」

鬱陶しそうに出た電話の向こうから聞こえたのは恭子の声だった。

「あんた、何考えてんの？ 今日5時間目古文の小テストでしょ」

「ああ、忘れてた」

「あんた、バカじゃないの」

「うるさいな。何で聡史の携帯からかけてんだよ」

「だって、着信者不明のコールはどうせ取らなかったでしょ」

「今、忙しいから」

「ちょっと、陽彦……」

僕は途中で電話を切ると、携帯電話の電源をOFFにした。

通りのあちこちでは、ぼちぼち榛菜の学校の制服が目につく。もう下校が始まっているのだろう。

大体帰る道と言うのは、殆ど毎日同じ路地を通るはずだ。僕は、この前会った通りでコーラを飲みながら、榛菜が通るのを待っていた。

蟻が巢穴からあふれ出るように、同じ方角から同じ制服が次々に現れて、時には甲高い笑い声と共に通り過ぎてゆく。

時々違う制服も混じっているが、明らかに違う方向から交差するように通り過ぎて行った。

三時半を過ぎた頃、通りに見覚えのある姿が見えた。

榛菜だ。今日は、一人のようだった。

一人で松葉杖を着いて歩く彼女は、この前にも増して痛々しく、儂げだった。

僕が近づいて行くと、彼女は気がついて右手を大きく振った。

「どうしたの？」

「手を怪我したって」

「ああ、これね」

榛菜は松葉杖を抱える左手を上げて見せた。

人差し指と、中指に包帯が巻かれている。

「あたしドンくさいから」

彼女はそう言って笑った。

「今日は一人？」

「うん。亜貴は歯医者で早退したの」

彼女はキョロキョロと辺りを見回して

「あたしを待ってたの？」

「あ、ああ。いちお」

「あたしがいないと寂しい？」

榛菜は悪戯っぽい笑顔でそう言うと、自分で言っ、自分で照れていた。

「うん。寂しい……」

僕の口からは、ついそんな言葉が零れ落ちてしまった。

「えっ？」

彼女は、僕が邪険に返すと思って言ったのだろう。榛菜は一瞬困ったような表情を浮かべた。

「じよ、冗談だよ」

榛菜はそう言って、再び歩き出した。

今気づいたが、松葉杖を使うと、使わない時よりも幾分か歩くペースは早い。

僕自身、どうして咄嗟にあんな返しをしたのかわからない。

もしかして、本当に寂しいのかもしれない。まだ数日間しか聞いていない彼女の引く音色が僕の心に染み込んでしまったのだろうか。だからこそ、こうして彼女に会いに来たのか。

「俺、バイクなんだけど、乗ってく？」

「えっ、バイク？」

「ああ」

彼女の瞳は好奇心に満ちていた。

◆第8話◆

「あたし、乗れるかな」

「乗れるよ。誰でも」

僕は榛菜が右側から乗り易いように、バイクを立てた。

「やっぱり駄目。パンツ見えちゃうよ」

「先に、ステップに右足をかけるんだ」

僕の肩を借りて、彼女はタンDEM用のステップに右足をかけると「よいしょ」と言いながら、そのまま左足を振り上げてシートに跨った。

「うわあ、結構高いね」

榛菜にヘルメットを被せて、僕もバイクに跨る。

エンジンをかけてスタートすると、下校中の女子高生たちの横を通り抜けて大通りまで出る。

「あ、ハル」

僕は思わず振り向いたが、声をかけられたのは榛菜だった。彼女は歩道にいた友達に笑顔で手を振っている。ていうか、松葉杖を振っていた。

バイクの後ろに乗る彼女の姿に、キャーキャーと冷やかしの声が飛んで、僕はちよっぴりヒーロー気分だったが、気持ちの大半は恥ずかしさに埋め尽くされていた。

信号で一端減速したバイクを、再び加速させた。

「松葉杖落すなよ」

「うわああ、気持ちイイ」

僕の腰に回された彼女の手に、キュツと力が入った。

広葉樹の並木の葉が舞い散る中を、まるで陽射しに追い立てられるように僕たちは乾いた風を切った。

「ねえ、バイトまで時間ある？」

「少しなら。なんで？」

「うん。やっぱいい。バイト遅れると大変だもんね」

彼女はそう言ったまま黙って僕の身体にしがみついていた。

彼女の家は西落合の、新目白通りからほんの少しだけ入った場所だった。

榛菜は器用に松葉杖を使って体重を支えながらバイクを降りた。

「ありがとう。バイクの方が電車より早いんだね」

「ああ」

僕は彼女の手に見線を落して

「どのくらいで指は良くなるって？」

「うん。腫れ引いた後も痛みは当分残るから、鍵盤が弾けるようになるのは少し先かも……」

「そう……」

「でも、したらさ、お客さんで行くよ」

彼女はそう言って、笑顔で応えたが、何だか陰りが見えたのは気のせいだろうか。

「何処か寄りたい所、あったんじゃないの？」

「うん。また今度、乗せてくれる？」

「バイク？」

「ウン」

「こんなのでよかったら何時でも」

僕はそう言って、手のひらで燃料タンクを叩いた。

「じゃあ、今度でいい」

彼女は大きな目を細めて笑うと

「バイト、頑張ってるね」

「ああ、じゃあ、また」

「うん。またね」

榛菜は自分の顔の前で小さく手を振った。

バイトが終わって店を出ると、僕のバイクの所に人影があった。
一瞬榛菜だと思った。彼女が、僕に会いにここまで来たのかと思
った。

「陽彦」

恭子は、僕のバイクに寄りかかったまま声を出した。

「なんだよ、恭子か」

「何よ、誰だと思ったの？」

「いや、別に」

恭子は僕のバイクから身体を離すと、指先でシートを突きながら
「バイクは乗り回すし、授業はサボるし。ほんつとに：何処に惹か
れるんだろ」

「はあ？」

「ハイ」

恭子はそう言って、ノートを差し出した。

「今日の古文のテストで出た問題。全部じゃないけど、記憶の限り
書いておいたから」

「何で？」

「おそらく、明日は職員室に呼ばれて、放課後は補習でテストだよ」

「いや、そうじゃなくて。どうして……」

「じゃあ、あたし行くから」

恭子は僕に差し出したノートをバイクのシートに乗せると、自分
の自転車に乗って去って行った。

僕は、何だか訳が判らず、とりあえず彼女のノートをディパック
にしまいこんだ。

◆第9話◆

翌日学校へ行くと、やっぱり職員室へ呼び出されて、恭子が言った通り、放課後には古文の小テストの補習があった。

何時もは半分も埋まらない答案用紙が今日は六割がた埋まっている。

もう少しはじめに恭子のノートを見ておけば完璧に答案を埋める事が出来ただろうが、そんな事をしたら逆に、問題、回答を事前に知っていた事を疑われるだろう。

僕は知っている分の答案を埋めると、窓の外に広がる青い空を眺めて時間を潰した。

榛菜はどうしているだろう。

漠然と彼女の事ばかりが、頭を過る。

あの引きずる足は、いずれは治るのだろうか。そしたら、ディズニールランドにでも誘ってみようか。

僕は、まだ何も起きていない現実を無視して、そんな事を空想してしまう。

ガラリと音をたてて、教室のドアが開いた。

「ようし、時間だから帰っていいぞ。答案だけ置いていけ」

僕が担任に答案用紙を渡すと

「授業サボんなよ」そう言って、彼は教室から出て行った。

僕は、溜息混じりで鞆に筆記用具をしまい込むと、テストの問題用紙は丸めてゴミ箱へ投げ入れようとした。

「それ、明日使うてよ」

僕は振りかぶった腕を止めて、声のした方に目を向けた。

「明日の古文で答え合わせだって」

「何だ、恭子か。帰らないのか」

僕は仕方なく、一度丸めた紙を手で伸ばして、机の中にしまい込んだ。

「う、うん。ちょっと図書室に用事あったから」

「何で教室に戻ってきたの？ 忘れ物？」

「えっ、そ、そう。忘れ物、忘れ物」

彼女は何だか顔を紅潮させながら自分の席に来ると、机の中をこそこそやっている。

僕は何となくそれを見ていたが、彼女の机の中は何時もきれいだ。僕たちのように教科書全てを置きっ放しにしていないから。

「あ、いけない。鞆に入ってた。なああんだ」

彼女は一人でぶつぶつ言っ、僕の方をチラ見していた。

「じゃあな」

僕は、そのまま帰ろうとして、思い出した。

「これ、助かったよ。サンキュウな」

昨日借りた彼女のノートを鞆から取り出して、恭子に返す。

「う、うん」

彼女は眼鏡の奥から、少し上目使いで僕を見つめる。

「じゃあ」

「あ、あのさ」

恭子は、きびずを返した僕に再び声をかけてきた。

「あのさ、一緒に帰っていい？」

「はあ？」

「だから…あたしも、今帰るところだから」

「あ、ああ。別に」

特に断る理由も見つからない。

僕がそう言っ、歩き出すと、恭子は小走りに僕の背中に着いて歩いた。

「ねえ、昨日は何で午後の授業サボったの」

大通りを渡っ、駅までの道を歩いていた。

「えっ？」

「だって、抜け出すなんて、よっぽど何か用事があったのかなって」
「別に、何となくタルかっただけ」

僕はそう言ってごまかした。

駅のホームには同じ制服がまばらに立っている意外は、くたびれたサラリーマンが数人。

ベンチに腰掛けたお婆さんが二人。

僕は何となく間が持たずに辺りの景色をなめる様に見渡していた。
二人は沈黙したまま電車に乗り込んで、池袋には直ぐに到着する。
池袋の構内は、次元が変わったように混み合って、地下道を行き交う異様な人の波が、二人を取り巻く。

僕は、恭子が離れないか一応確認の意味で、時々視線を向けた。

「一緒に」と言ったからには、一緒に歩かなければと、何だか判らない義務感みたいなものが沸き起こる。

「塾、池袋なのか？」

「えっ」

「塾だよ。お前の通ってる」

「ああ。うん、そうだよ」

「何時から？」

「今日は無いよ」

「そうか」

雑踏の中で、時々聞き取れない言葉をお互いに訊き返しながら、短い会話が飛び交う。

「じゃあ、どっかでお茶でもする？」

「えっ？」

「いや、時間無かったらいいけど。俺、今日バイト休みなんだ」

彼女は僕との距離をギリギリまで詰め寄って、僕の制服の肘の部分を摘む様に掴むと

「うん。いいよ」

そう言いながら、俯き加減で僕を見つめた。

何だか学校で見る恭子とは違う人物みたいにしおらしい。

思わず僕自身も、何時ものペースを乱されてしまつて、優しい言葉なんかを掛けてしまいそうだ。

僕は、彼女に服の肘を摘まれたまま歩いた。

◆第10話◆

うかつだった。恭子と二人で池袋を歩いてしまうとは……

ただでさえ、この界限にはウチの学校の連中がたくさんウロついている。それでも、この溢れんばかりの人の波と喧騒が、大丈夫だろうと高をくくらせた。

「ハル」

後ろから声を掛けてきたのは聡史だった。反射的に、恭子は僕の制服を掴んだ手を離した。

「どうしたんだよ、二人で」

聡史は、少し含んだ笑いを浮かべながら「デートか？」

「そんなわけ無いじゃん」

僕が答える前に、恭子が慌てて言った。

「だって、今手を……」

聡史はそう言いかけて、言葉を吞み込んだ。

いい加減な奴だが、思いやりはある。恭子の紅潮して困ったような顔を見て、多くは訊かない事にしたのだろう。

そして、聡史が彼女である理奈を連れていたのも幸いした。

「聡史、映画遅れるよ」

「あ、ああ。じゃあな」

聡史はそう言って、手を上げると僕たちとは反対方向へサンシャイン通りを歩いていった。

相変わらず含み笑いを浮かべていた。

「聡史の彼女って、かわいいんだね」

人混みに消える二人を眺めながら、恭子が言った。

「それだけが、とりえらしいけど」

「とりえ？」

彼女は少し怪訝な顔で微笑んでいたが、僕たちも歩き出した。

豊島園の駅を降りて通りへ出ると、街灯の明かりが辺りを照らし出していた。

「じゃあな」

僕は、そのまま立ち止まらずに恭子に言った。

「ねえ、バレンタイン」

彼女はそんな僕を呼び止めるかのように言った。

「バレンタイン？」

「チョコレート入ってたでしょ。机の中に」

「えっ？ ああ。でも何で」

僕はそこまで言って、自分で気がついた。

「えっ？ あれって、恭子なの？」

「そうだよ」

彼女はそれだけ言うのと走り出した。

少し離れたところで立ち止まると、呆然と立ち尽くす僕に振り返って

「バイバイ」

と、手を大きく振った。

周囲にいた帰宅途中のサラリーマンたちが、一斉に振り返った。

今年のバレンタインの日、僕は学校でチョコレートを5つ貰った。二つは後輩からだった。そして、二つは義理と言うか、まあ教室でもよく喋る女子二人。

そして、もう一つ……

これは、学校へ行って、一時間目の授業が始まってから気がついた。

教科書を取り出そうと机の中に手を入れたら、指先に何かが当た

った。教科書でもノートでもない事は、手触りでわかった。

誰かに恨みを買われる覚えは無いが、一応警戒しながら静かにそれを周りから見えないように取り出してみる。

白地に赤い英文字が総柄にプリントされ、金色のリボンが掛けているそれが何なのかは直ぐに判った。

しかし、誰が入れたのか判らなかった。

放課後、後輩二人にチョコレートを買った僕は、机の中に入れたのも誰か後輩かも知れないと勝手に納得していた。

それがまさか、橘恭子だったとは。二月はまだ二年生で、彼女とは別のクラスだった。

いったい、どれだけ朝早く来て、違うクラスの僕の机の中に入れて入れたのだろう。

それ以前に、僕の机の位置を知っていた事自体が驚かされた。

それを意味するものは……

そういう事なのか。でも、何で僕なのだろう。

いったい、何時から彼女は……

◆第11話◆（前書き）

健全なお話と安心していた方すみません。若干の濡れ場があります
…逆に何もない恋愛って、何だか展開が繋がらなくて…ご了承下さい。
い。

◆第11話◆

「おいハル、お前一緒の約束してるんじゃないのか？」

学校帰りの駅で、聡史がそう言いながら視線を向けた先には、恭子がいた。

「いや、そんな約束ないし。それに、アイツ塾だろ」

「ふうん」

聡史は、再び含み笑いを見せた。

「何だよ」

「俺、おかしいと思ってたんだよな。恭子って、やたらハルに絡むじゃん」

「しらねえよ」

僕はそう言って、恭子の方は見ないようにした。

その夜僕は、バイト中に再び驚愕してしまった。

恭子が一人で店にやってきたのだ。

「おい、何やってんだよ」

オーダーを取りに行った僕は、思わず小声で彼女に言った。

「両親が旅行に行ったのよ」

「飯食う所なんて、他にいくらでもあるだろう。お前ん家の近くにロイホあるじゃん」

「いいじゃない。ここおいしいし。そんな高いわけでもないし。それに、女一人でロイホなんて寂しいじゃん」

「そうだけどさ……」

僕は、彼女が何を考えているのか判らなかった。

「カルボラーナと海老のサラダ。あと、赤ワイン」

「いや、ワインは駄目だろう」

「何で？」

恭子は普段見せないような、少しわがままな笑みを浮かべた。

「判ったよ」

僕はそう言いながら、アップルジュースにチェックを入れる。

「どうした、お前の女か？」

オーダーを届けに厨房へ行くと、マスターが興味津々の笑顔で言った。

「違いますよ」

今日は、本当は入るはずだった祐介が、急用との事で休んでいる。金曜日という事もあり、遅い時間にも関わらず、店内の席は埋まっ
つてゆく。

「ちよっと、ワインは？」

僕が恭子のテーブルにアップルジュースを運ぶと、彼女は不服そうに言った。

「これにしとけて」

「今夜暇？」

「はあ？」

「ここ終わってから、遊ぼうよ」

「どうしたんだよ、おまえ」

恭子は少しムッとしたかと思うと

「ここ客のオーダー無視して…」

彼女は急に大きな声を出したので

「判ったよ。ここ終わったら。な」

僕が宥めるようにそう言うと、彼女は眼鏡の奥で目を細めて笑った。

よく見ると、マスカラを着けているのか、何時もより睫毛が多いような気がした。

いったいどういう事なのだろう。

ここに来るのはいいとして、あの妙なわがままぶり。

何かあったのだろうか。

結局彼女は僕が帰る時間まで店内にいて、おかげでこっちは終始落ち着かない中で、週末の混みあう店内を動き回った。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

店を出ると恭子が僕のバイクの所にいた。

仕方なくバイクの後ろに乗せると、彼女は必要以上に僕の身体にしがみついた。

僕はバイクを走らせ、光が丘の公園へ向かった。バイクを買ったばかりの頃、よく一人でぶらっと走ると、光が丘を抜けて環八へ出たものだ。

高層団地の光りの丘が暗闇に立ち並ぶ中を走ると、大通りは殆ど誰もいない。

公園沿いにバイクを止めた。

既に眠りに着いたようなこの一帯の空気は静まり返って、辺りには人の気配はまったく無かった。

「光が丘に来たのは初めて」

恭子はそう言いながらバイクを降りて

「よく来るの？」

「いや、最近来ないな」

僕たちは街灯に照らされたベンチに座って、夜更けの団地を眺めていた。

「ねえ、キスした事ある？」

「はあ？」

「二回も言わせないで。あるの？ 無いの？」

「そりゃ、あるけど」

「そう……」

恭子は少し俯いて

「やっぱ、みんなあるのかな」

「どうしたの、急に」

「あたしは無い…… まだ一度も」

彼女は俯いていた顔を、夜空に向けたかと思うと、今度は僕を見つめて

「ねえ、この前のテスト、あたし教えたよね」

「はあ？ あ、ああ」

「助かったって言ったよね」

「ああ、助かった」

なんだ？ 恭子は何がしたいんだ。

「じゃあ、今度はあたしに教えて」

「な、何を」

彼女は黙って瞳を閉じた。

そんなのありか？ なんて、急にこんな積極的になったんだ？

僕はそんな事を思いながらも、今日はちよっぴり可愛く見える恭子の唇に自分の唇を重ねた。

誰でもいいと言うわけでもないが、青春真っ盛り。チャンスは貰っておこう。

「ん、んん」

恭子は僕の顔を押しつけて

「ちよっと、舌入れないでよ」

「そういうもんだって」

「うそ」

「ほんとだよ」

彼女は一瞬戸惑いの表情を見せたが、不安な顔をしたまま再び目を閉じると

「ゆっくりね」

彼女の唇は柔らかかった。そして、温かい舌は唾液を充分に含んで滑らかだった。

彼女は どうして いいのか 判らない ようで、舌先が口の中で さ迷っ
ていた。

長いキスの後に出た彼女の吐息は、教室にいる時には 考えられな
いほど 色っぽく、可愛らしいものだった。

◆第12話◆

勉強机のスタンドに灯る小さな蛍光灯だけが、部屋の中をほの暗く照らしていた。

微かに見える見慣れない景色は、女の子の部屋にしては殺風景だと思った。

机の上は整理整頓されて、本棚には参考書がたくさん並んでいる。ただ、やっぱり女の匂いと言うか、淡い化粧品品の匂いと言うか、とにかく自分の部屋には無い、何処か甘ったるい香りがこの部屋を取り巻いている。

それともこれは、恭子の匂いなのだろうか。

眼鏡を外した彼女の素顔を初めて見た。

それはまるで別人のようで、恭子は確かに女だった。

呼吸を荒げた彼女は、肩で息をしながらタオルケットに包まるように蹲っていた。

「大丈夫？」

向こう側を向いて目を閉じる彼女に、覗き込むようにして僕が問いかけると、恭子は小さく頷いた。

頬には細く伝った涙の跡が見える。

途中で痛くないかと訊いたら、彼女は「大丈夫」と言って首を振った。もしかして、本当は痛かったのかもしれない。それとも、女になった喜びで流した涙なのだろうか。

それほど経験豊富ではない僕には、初めての時に時折流す女性の涙が、何だか未だに不可解だ

僕は彼女の横で、黒い髪をそっと撫でる事ぐらいしか今は出来ない。

「妹さんは？」

僕は急に、彼女には妹がいた事を思い出した。いくら両親が旅行で留守だと言っても、隣の部屋とかに妹がいた

としたら、取り返しはつかないが、何だか気が咎める。

「友達のところに泊まりにいった」

「そうか」

少しホッと息をつく僕に恭子は

「妹の方が、全然進んでる」

「そんなの、人それぞれだろ」

「うん。今はそう思う」

恭子は壁に顔を向けたままそう言った。

彼女は、妹を見ていると、勉強ばかりしている自分が虚しくなる時があるのだと言う。

自由に生きている感じの妹が羨ましくなる事があるそうだ。

僕への気持ちも、もしかしたらそんなストレスの捌け口だったのかもしれない。

僕は、恭子の家を出ると、寝静まった暗闇の中を、しばらくバイクを押して歩いた。

住宅街を出る頃ようやくバイクに火をいれると、その音は夜気を震わせて何処までも轟く気がした。

出来るだけエンジンを吹かさずに走り出して、家路へ向かった。

朝の満員電車ははっきり言って苦痛だ。

オッサンの着けるオーデコロンと女性の着ける香水、フレグランスが混ざった臭いは、悪臭以外の何モノでもない。

練馬、池袋と駅へ着いて電車を降りる度に大きく息を吸う。

月曜日の朝は、気のせいか何時もより人混みが慌しい。

下板橋の駅を降りて何時ものように学校まで足早に歩く。僕と同じようにギリギリの電車を使う連中が、同じように足を速めて、中には駆けている者もいる。

ふと僕は前方に恭子を見つけた。

珍しい事もあるものだ。こんなギリギリの時間に登校するなんて。彼女は小走りと早足を繰り返しながら、どんどん僕から離れて行く。

僕はあえて足を速めずに彼女が遠のいて行くのを静かに見つめていた。

週末の出来事が頭を過る。

教室へ入れば同じ空間で今日を過ごすのだ。

彼女の狂おしく髪を乱した顔が、まだ鮮明に僕の頭に焼き付いている。そこには、強気で少し澄ました彼女はいない。

まるで時々聡史が買ってくる成人雑誌のグラビアカットのような、悩ましげに顔を歪めながら息を荒げ、苦痛か快楽かが見分けられない表情を浮かべるのだ。

僕は、何だか足取りが遅くなってホームルームのチャイムが鳴り終えてから教室のドアを開けた。

「あらら。里見、遅刻1な」

担任がそう言って笑うのがチラリと見えたが、それ以外は何も目に映らなかった。

教室を視界に捉えれば、自然に恭子が入り込んでくる。

彼女の傍げで悩ましげな表情が頭から離れず、彼女を見る事が出来なかった。

彼女の押し殺した吐息が今にも聞こえてきそうで、僕は、自分の席に座りながら窓の外ばかりを見ていた。

休み時間に聡史や他の仲間と雑談で盛り上がる。しかし、僕の視線は彼らを越えて、橘恭子を見ていた。

向こうも何人かの女子と話しながら笑い声を出したりする。

制服ではあまり目立たない胸や、他の女子と同じように少し短めのスカートに収まった腰。僕は彼女の顔を見れなくて、自然に視線が下へ向く。

それは逆効果で、彼女の白い下着や、何も着けない白い肌を思い

出してしまう。

痩せ型の彼女は、アバラの跡が薄っすらと胸の下に浮き上がっていた。

「なあ、ハル」

「はあ？」

聡史に話を振られて、僕は慌てて頭の中に浮かぶモノをかき消した。

一日中そんな事の繰り返しだった。

同じクラスの娘とセックスをしたのは初めてだった。

それは、思いの外僕に弊害を与えた。

◆第13話◆

榛菜が指を怪我してから一週間で過ぎた頃の夕方、彼女がベルリネッタにひよつこりと顔を出した。

「怪我、どうだい？」

「ええ、何とか」

マスターの問いに、榛菜は明るく応えていた。

フロアでテーブルを片付ける僕を見つけると、彼女は小さく手を振って見せた。

何だか今は、彼女がすごく遠くに感じる。

それは、彼女が遠ざかったわけではない。きっと、僕が彼女から遠ざかったんだ。

少しすると、オーディオの音が絞り込まれて、ピアノの音が流れ始めた。

最初は気にならなかった。いや、初めはそうでも無かったのか、今は明らかに音の滑らかさが無い。

僕は、背の高い観葉植物越しに見える彼女の姿を盗み見た。

鍵盤の上を動く指は、何処か力なく頼りないように見えた。

今日の榛菜は、2曲毎に休憩を取っていた。

遅い時間になって祐介が来たので、僕は休憩に入る事ができた。

スタッフルームへ入ると、榛菜は水に濡らしたハンカチで指を冷やしていた。

「指、大丈夫なの？」

「うん。ちょっと痛い」

「無理しなくてもいいんじゃない」

彼女は、再び小さな流しでハンカチを濡らす。

「無理………するよ」

彼女がそう言って見せた笑顔は、何処かいじらしいものだった。僕は口に運んだコーヒークップの手を止めて、彼女を見つめてい

た。

「なんで？」

見つめる僕を、彼女も見つめ返した。

「だって、せっかく必要としてくれる場所があるから」

「でも、完治してからでも大丈夫だろ」

彼女の唇が、途端に震えるのが見えた。

榛菜は僕から視線を逸らすと

「これ以上、誰かに迷惑かけたくないの。自分の身体的な欠陥で迷惑かけたくないんだよ」

彼女の声は震えていた。

その声は、僕の心も振るわせた。

「いや、誰も迷惑には感じてないぜ」

僕は彼女がどうしてそんなにムキになるのかが判らなかった。

「ご、ごめんなさい……あたし……」

「大丈夫だよ」

僕はこの時、彼女はただ生真面目なだけなのだと思っていた。

ただ、責任感が強いだけなのだと思っていた。

「そろそろ、弾くわ」

「まだ休んでいいじゃん」

そう言った僕に、彼女は黙って微笑んだ。

その時、僕の座っていたパイプ椅子に彼女の右足が引っかかった。

「危ない」

僕は横向きに腰掛けていたので、彼女の身体を支えようと慌てて手を差し出したが、それでも間に合わなかった。

僕の手を彼女の腕がすり抜けて、ダンッという音と共に、榛菜は床にひっくり返った。

「大丈夫か？」

慌てて立ち上がった僕は、その時見た。

少しまくれ上がったロングスカートとショートブーツの間に見えた彼女の左脚。

それは生身の色をしていなかった。

金属チックな、いや金属のそのものだ。

体温のない、銀色をしたアルミ合金の脚。

僕の視線を感じてか、彼女は起き上がるより先に、少しまぐれたスカート裾を直した。

僕は、何の言葉も出なかった。

彼女を助け起こす事すら忘れてしまった。

「だから、あたしはこれ以上人に迷惑をかけたくないし、自分の出来る事をまっとうしたいの」

彼女は自分で起き上がると、出口を向いたままそう言った。

そして、ゆっくりとフロアへ出て行った。

彼女の脚は治らない…… 直るべきモノが、最初からそこには無いのだ。

脚が無い…… 片脚が。

彼女はどんな生活の中で生きて来たのだろう。

まだ十六歳だというのに、片脚が無いなんて。

それでもあんなに明るく生きれるものなのだろうか。

いったい何時からなのだろう。

榛菜は、何時から片脚だけになってしまったのか。

普通の人が軽々とこなす事に困難を覚えて、誰かの手を借りなければならぬ事は多いだろう。

彼女が、これ以上誰かに迷惑をかけたくなかったのは、あの片脚以上と言う事なのだ。

あの脚に関する事意外で。という事だ。

そして、あの脚は、これからも確実に誰かの助けを必要とする。

僕は、初めて会ったあの日に訊いてから、脚の事は訊いていない。何度か訊こうと思いつながら結局脚の事を訊かなかった。普通の

怪我として再び尋ねなかった事に、僕はホッとしていた。
それだけが、今の僕の救いだった。

彼女は上がりの時間になると「お疲れ様でした」とだけ言って、先に帰っていった。

僕と祐介が少し後に上がって外へ出た時、ちょうど彼女の母親の車が走り出すところだった。

「ハルちゃん、大丈夫かな」

祐介がポツリと言った。

「なんで？」

「なんか、元気なかったよ」

「ゆ、指が、まだ完全じゃないみたいだよ」

「そうか」

祐介は直ぐに納得した顔をして「じゃあな」

そう言って駅の方へ歩き出した。

僕は、一端跨ったバイクを降りると、再び店の通用口のドアを開けて

「すみません、マスター」

◆第14話◆

僕は、榛菜に頼まれ事をしているが、連絡先を訊くのを忘れた。そう言っマスターから榛菜の携帯番号を聞き出した。

携帯番号はすなりと教えてくれた。

仕事仲間なのだから、考えてみれば連絡先を訊くぐらいと言う事は無いのかもしれない。

やたらにおどおどしていた自分が、バカみたいだ。しかし、僕は今、自分の部屋で携帯電話を見つめたまま、かれこれ三十分もベッドにもたれかかっている。

毎週観ている深夜のバラエティーも、点いたままのテレビの中で何時の間にか勝手に終わっていた。

彼女に何て電話したらいいのか判らない。

もともと僕は電話をかけるのが苦手だ。

彼女は、脚が無い事を僕に見られて怒ったのだろうか。知られた事でショックを受けただろうか。

脚を引きずっているだけで気の毒に思えたのに、それが義足だったなんて。

明らかに、ショックを受けたのは僕の方だった。

いったいあの左脚は、どの部分からなのだろうか。

確か制服の時、包帯は膝下に巻かれていた。スカートからのぞいた太ももは生脚だったと記憶している。と言う事は、あの脚は膝下が義足なのだ。

ギソク……義足…… 僕の頭の中には、その言葉が何度も何度も勝手に繰り返されて、どうしても消し去る事が出来なかった。

彼女はいままでどんな思いで生活してきたのだろうか。再び僕は考えた。

彼女は何時から、飛んだり跳ねたり走ったり出来ないで過ごしているのだろうか。

時計の針は深夜一時を過ぎて、両親はとくに眠っている。
テレビから流れる通販ショッピングの番組がこっけいに映し出されているのを、僕は無関心なまま眺めていた。

空に浮かぶ雲がどんどん広がって、朝見えていた青空はいつの間にか重く沈んだそれに呑み込まれていた。

僕は相変わらずぼんやりと窓の外を眺めて授業時間を過ごす。

風が出てきたのか、校庭の隅に植えられた草木が、バサバサと大きく横に揺らめいていた。

窓ガラスに水滴の細い線が着き出したかと思うと、あつという間に見えていた外の景色は降り注ぐ雨に呑み込まれていった。

僕は窓を叩きながら流れる雨水を眺めていた。

今日、橘恭子は風邪で休んでいる。

少しだけホッとして、少しだけ物足りない気持ちだ。

「ねえねえ、里見って恭子と付き合ってるの？」

昼休みにモナミが声をかけてきた。

今日は雨が降り出したから、屋上へは行けない。

「はあ？　なんで？」

「この前、一緒に歩いてんの見たから」

おそろく、池袋を歩いていた時の事だろう。

「用事に付き合っただけさ」

「そうなんだ。でも、何だか恭子が男と歩いてるのって、不思議に見えた」

「どうして？」

「だってあの娘、男に興味なさそうじゃん」

そうか、彼女は女同士でいても、男の話はしないのだ。

僕は、彼女の白く浮き出たアバラを思い出しながら

「へえ、そうなの」と言って受け流す。

この女こそ、自分は男に興味津々かも知れないが、肝心の男から興味の対象にされていない事を知らないのか。

抜いたか剃ったか知らないが、描かないと殆ど無い青白い眉を何とかしろ。

椅子に腰掛けた僕の前に立つモナミの下っ腹が、ポツコリと少し出ている。

僕はそれを指で軽く突いた。

「きゃあ。やだ、もう」

彼女は後ろに半歩下がりながら、僕の腕を叩いた。

じゃれたいわけじゃない。早くどっか行け。腹筋でもしろ。

「里見エロいよ」

モナミは、まるで自分が性の対象にされたような、それを恰も喜んでいのかのように笑いながらそう言って、僕の前から離れた。

僕が視線を動かすと、すぐ横にいた聡史が笑いを堪えながらこっちを見ていた。

付き合いの長い彼は、僕がウザくてとった行動だと見抜いているのだろう。

それを勘違いしているモナミを笑っていたのだ。

僕は聡史に肩をすくめてみせると、雨に煙る外の景色を眺めた。

◆第15話◆

放課後も雨は続いていた。横殴りの雨に打たれながら駅まで走った。

「うわあ、びしょ濡れだよ」

一緒に駆けて来て、駅へ入り込んだ聡史が言った。

今日の天気予報ははずれたのか、そこかしこに濡れ鼠と化した人たちが、ハンカチやタオルで頭や顔を拭いている。

それでも、東上線に揺られながら窓の外を眺めていると、西の空に陽が差してきて、池袋に着く頃には雨は上がっていた。

「ちきしょう、もう少し後に出てくれば濡れなくて済んだな」

「まったくだ」

僕と聡史はぶつくさ言いながら地下道を抜けた。

聡史と別れて西武線へ抜ける階段の手前まで来た時、松葉杖を手にした娘が目に残った。

榛菜だった。

僕は、何となく気まずい気持ちで、それでも軽く手を上げて見せる。

僕は包帯を巻いた左脚を見ないように気をつけながら

「今帰り？」

「うん」

「里見くんも西武線？」

隣にいた亜貴が言った。

「ああ、豊島園なんだ」

「うわあ、マジ？」

僕たちは榛菜のペースに合わせながら歩いた。雑踏はいつも簡単に僕たちを追い抜いて行く。

そんな中で、亜貴の肩に誰かがぶつかった。

「痛ったい。気をつけろバカ」

彼女は相手に聞こえる声でそう言った。

「何だよ。タラタラ歩ってるからだろ」

スーツを着た若いサラリーマン風の男が振り返り、そして戻って来た。

「おい、やめろって」

僕は亜貴の肩を叩いた。

「何だよ、両手に花で浮かれてんのか」

その男は、何故か僕に突っかかって来た。

「何だそりゃ」

「タラタラしてんなっつんだよ」

僕は男がそれ以上近づいて来たら、怖くて先に手を出してしまいたいそうだった。

しかし、その男は本当に急いでいるのか、直ぐにきびずを返して歩き去っていった。

「……おい、勘弁しろよ」

僕は亜貴の肩を掴んで言った。

彼女はフンツと軽く鼻を鳴らすようにして

「いいのよ、道徳に欠けた大人なんて」

確かに、僕らが松葉杖を着いた娘と一緒に事は一目で判りそうなものだ。その連中の足取りが遅いからと言って、誰に文句を言われる筋合いもない。

誤って肩がぶつかったのなら、「すまん」の一言で済むのに。

あの男は、追い越し際にわざとぶつかって行ったのは明らかだった。足取りの遅い僕らにイライラしていた腹いせだろうか。

彼女は、榛菜と一緒に歩く事によって、頻繁にこんな仕打ちを受けるのだろうか。

榛菜は、ただ黙って黙々と改札口へ向かって歩いていた。

「ねえねえ、定期見せて」

亜貴はさっきの事など既に気にしていない様子で、自動改札を抜けた僕の定期を見たがった。

「ほんとだ。豊島園から下板橋だって」

亜貴はそう言いながら、榛菜に見せている。

「何だか遊園地に住んでるみたいだね」

榛菜が言った。

「しょうがないだろ。駅名がそうなんだから」

「ねえねえ、豊島園で、なんで豊島園って言うか知ってる？」

亜貴が急に切り出した。

「豊島区に在るから…… いや、あそこは練馬区か……」

「何で練馬区にあるのに豊島園なんだろ。昔は豊島区に在ったとか？」

榛菜が少し上を見つめて、口元に指を当てながら言った。

「二人共、ブー」

亜貴が楽しそうな声で言うと、少し勝ち誇った笑みをして

「創業者の名前が豊島なのよ」

「へえ」

榛菜は素直に感心してる。

「本当かよ」

僕は半信半疑で言った。

「あんた、木馬の会に入ってるじゃないの」

「しらねえよそんなの」

そんな話をしているうちに走り出した電車は、間もなく椎名町に着いて、榛菜と亜貴は電車を降りていった。

亜貴は何だかとても賑やかな娘だ。そして、彼女と一緒に時の榛菜も、何時もより明るく感じるのは気のせいなのか。

きつと、それだけ榛菜にとって、亜貴は心強い存在なのかもしれない。

◆第16話◆

恭子は今日も学校を休んだ。もう三日来ていない。

風邪が酷いのだろうか。僕は頭の隅でそんな事を考えながら、心のどこかでホッとしている。

しばらく顔を合わせない方が、気が楽だ。

今でも彼女の裸体が記憶に残って離れないが、彼女を好きかと言われてもそれは何ともいえない。

僕は、半年振りで女性を抱きたかっただけなのかもしれない。

それが彼女に知れてしまうのが怖いのだ。

まるで彼女の気持ちを玩んでしまったような気がして後ろめたさだけが募る。

榛菜の指は日に日に良くなって、それに伴いピアノの音色は透明感を取り戻し、再び鍵盤の上で飛び跳ねる。

あの左脚が自分の本当の脚でない事など微塵も感じさせない。

制服姿の榛菜は明らかに年下の女の子と言う感じで、その笑顔は時に幼ささえ感じる。

しかし、ここでピアノを弾く彼女は、あくまでも僕と対等だ。

僕には出来ない事を軽々とこなす榛菜の姿を見て、それを認めないわけにはいかない。

彼女はここへ来るときにはロングスカートを履いて来る事が多い。時にはタイト、時にはフレアー。そしてこの前は、裾口にレースの飾りのついているものを着てきた。ショートブーツと合わせる事で、容易に脚全体を隠せるからだろう。

時々パンツルックの時もあるが、どうやって履くのか少しだけ疑問に思う。

髪は必ずアップにして、バレッタで止めたり、複雑に編みながら団子を作ったりとその日によって様々だ。

ただ、彼女の首筋は白く清楚で、跳ねる産毛がライトに照らされて、少しだけ色っぽい。

「ねえ、ゴールデンウィークって何処か出かけるの？」

僕が、夜のまかないを食していると、後からスタッフルームに入ってきた榛菜が声を掛けてきた。

「連休中も、殆どここだよ」

「昼間は無いじゃん」

「そうだな。でも、特に予定なんてないよ」

僕は、前に彼女が学校帰りに何処かへ立ち寄りたそうにしていた事を思い出した。

榛菜は椅子に腰掛けると、小さな皿に持って来たパスタにホークを刺した。

「そういえば、この前何処かへ行きたいって」

「うん。でもいいや」

「どうして？」

「だって、面倒でしょ。あたし歩くの遅いし」

彼女はパスタを口に運びながら、あっけらかんと言った。

それがわざとなのか、それとも思った以上に彼女はサバサバした性格なのか、僕には判断できない。

「別に、そんなの……」

彼女は、黙々とパスタを口に運んでいた。そして

「サンシャインに昇ってみたかったの」

「サンシャイン？ って、サンシャイン60？」

彼女は僕をチラリと見て、パスタを噛む口を動かしながら頷いた。
「昇った事無いの？」

「昔、亜貴と昇った事ある。中一の時かな」

彼女はティーパックで作った緑茶を飲みながら言った。

「サンシャインかあ」

僕は、椅子にもたれ掛かるようにしながら、頭の後ろで手を組んだ。

「ハルくん昇った事ある？」

榛菜は、何時の間にか僕をハル君と呼ぶ事に落ち着いたようだ。

「ああ、何度かね。でも、窓に奥行きがあって何だかパツとしないんだよな。あそこ」

「ああ、そういえばそうだったかも」

「じゃあさ、他行こうか」

「他？」

「東京には他にも展望台あるじゃん」

＊ ＊ ＊ ＊

ゴールデンウィークに入って直ぐの中日、学校帰りの駅で亜貴に出くわした。

出くわしたと言うよりは、僕を待っていたらしい。

池袋へ出てから、ファーストフードの店に入った。

「どうしたの？ わざわざ。よく俺の学校が判ったね」

「ハルに聞いてたし、場所は友達に制服の特長で訊いたら、直ぐに判る娘がいて」

彼女はそう言って、少し遠慮気味に笑った。

「今日は、榛菜は？」

「親戚の法事だって」

「そっか」

「だから、来たの。ちょうどいいし」

彼女はいったい何の用事で来たのか、僕は心の中でずっと詮索していた。

マンゴーシェイクを口にした僕に、亜貴は言った。

「榛菜の事、好き？」

「はあ？」

……何と直球な質問だろう。

僕の答えは決まっている。しかし、二つ返事で答えられる質問ではない。

「いや……それはまだ」

「彼女、左脚無いよ」

彼女は、いきなりそう切り出した。

◆第17話◆

「ずいぶん、いきなり言うんだな」

「最初に知っておいた方がいいと思って」

彼女は、少し俯いたままアイスティーのグラスを指で撫でていた。

「彼女の欠点をバラしてどうすんの」

彼女は僕の言葉に素早く反応すると、視線を起こして僕を見つめた。

「欠点なんかじゃないよ……」

亜貴の視線は真剣だった。

「ハルの脚は欠点じゃない。そう思うのは、何時も男の方だよ」

僕は、欠点という言葉を出した事を、一瞬で後悔した。

しかし、彼女が脚を引きずっていたのを初めて見たとき、そして彼女の左脚が無い事を知ったとき、確かに僕はガッカリした。

そして、そんな彼女を哀れに思った。

「知ってるよ」

「えっ？」

「榛菜の左脚が義足なのは、もう知ってる」

「そうなんだ」

彼女は、少し気の抜けた表情で僕を見つめると、再び視線を下へ向けた。

「そんな事をわざわざ俺に言うために待ってたの？」

「そんな事って……」

亜貴は唇をかみ締めるように僕を見つめると

「ハルは、ちっちゃくてカワイイから、結構男が声をかけるんだ。でも、彼女の左脚が無いって判ると、みんな急用を思い出すのよ」

中三の時だって、自分から言い寄ってきたくせにその男、榛菜は

ただ脚を骨折でもしてると思ってたらしくて。

彼女の片脚が無いって判ったら

『キミもいろいろ大変だろうから、もう会うのよそう』って言った。
大変なのは、そいつの都合。自分の都合だけよ。

あたしは、ハルと一緒にいて大変だなんて思った事ないし、そんな風に考えた事も無い。

言い寄る男がみんな勝手に思って、勝手に面倒くさがって……

亜貴は、溢れ出る気持ちを抑えられないかのように一気に喋った。
「だから、里見くんはどうなのかなって。早いうちに確かめておきたかったの」

亜貴はそう言って、再び俯くと

「ごめんなさい。こんな事いきなり」

彼女は、僕が榛菜を気に掛けていると感じ取ったのか、それとも明日、彼女と出かける事を知っているのかもしれない。

そして、僕が榛菜の脚の事をいろいろ考えていると思ったのか。でも僕は、今のところ彼女の身体に対して面倒だなんて思っていない。

それとも、これからそんな気持ちになるのだろうか……

小学校からの付き合いだと言う亜貴は、今まで榛菜の世知辛い姿を何度も見て来たに違いない。

そして、その度に立ち直る彼女の姿も、亜貴は目の当たりにしてきたのだ。

「亜貴ちゃんは、彼氏はいないの？」

「えっ？」

窓の外に視線を向けていた彼女は、僕の不意な質問に驚いた表情でこちらを見た。

「彼氏だよ」

「いない……」

「どうして？ 好みがうるさいとか」

僕は冗談交じりで言った。

榛菜よりはずっと短い茶色い髪と睫毛の長い目、そして一見無邪気だが真っ直ぐ相手を見つめる瞳は、他から声がかからないわけがないだろう。

「あたしだけ、彼氏作れないよ」

彼女はそう言って視線を落した。

「そっか」

亜貴にだって彼氏を作って遊ぶ権利がある。

彼女が榛菜の為にずっとそうしていれば、きっと榛菜自身が責任を感じる事になるだろう。

榛菜はおそらくそう言う性格だ。

亜貴は亜貴で自由にするべきだ。

「でもそれじゃあ、俺がもし榛菜と付き合ったら、キミあぶれちゃうジャン」

僕は少し照れながら、わざとそんなセリフを言った。

「脚の事知ってて、ハルと付き合う気あるの？」

亜貴は、見開いた瞳で僕を見つめた。

確信はない。でも僕の中にそう言う気持ちがあるのは本当だ。

「俺はね。でも、俺が彼女のタイプじゃないかもな。どうなるかは、彼女次第だな……」

僕はそう言って笑うと、アイスティーのグラスを空にした。

「榛菜は里見君のこと好きだよ。きっと」

「おいおい、適当な事言うなよ」

「本当だって、あたしには判るよ」

亜貴は少しだけ安堵の笑顔を浮かべると

「あたしの心配はいらないよ。キープがいっぱいいるからさ」

◆第18話◆

「こうして見ると、やっぱり大きいね」

榛菜はそう言って、空を仰いだ。

下ろしたままの背中に着く黒髪が、風にそよいでいた。

僕は彼女をバイクに乗せて、芝浦へやってきた。

そう、ここに聳える333メートルの東京タワーへ昇るため。

「あたし、東京タワーって初めて来た」

「俺も昇った事ないよ」

「何かおかしいね。東京に住んでるのに」

「パリに住んでると、一生エッフェル塔には昇らないもんなんだって」

僕の言葉に、彼女は一瞬小首を傾げると

「ああ、なるほど」

一階部分にあるお土産売り場は、やたらと混雑していた。直通エレベーターで、大展望台まで行く。

展望台に着くと、連休中の為か、家族連れと外人の姿が多い。

「なんか、外人多いね」

榛菜が小声でいった。

彼女は窓の傍まで歩いていくと

「凄い、窓大っきいね」

窓の手前にある手すりに寄りかかりながら、身体を乗り出すようにして景色を眺めた。

「あ、ほら。大きな玉ねぎがある」

僕は武道館の屋根を指差した。

「なんで玉ねぎ？」

「ほら、あの飾り」

「あ、ほんとだ。玉ねぎだ」

彼女は手すりに身体を預けながら、右足でピョンピョン跳ねて笑った。

「爆風スランプって知らない？」

「爆風？ ドクタースランプなら知ってるけど……」

僕は苦笑しながら「そりゃ漫画だろ」

「サンプラザ中野は？」

「中野はあまり行かないから……」

「いや、その中野じゃなくて……」

学年一つしか歳が違わないのに、こんなに知っている事に差があるのだろうか。いや、僕はたまたま聡史が聴いていた古い曲で爆風スランプを知っただけだ。

僕の世代でも知らない連中の方が多いかも知れない。

僕は、そう考えて自分を納得させると、榛菜にそのバンドと曲の事を話して聞かせた。

「ああ、あのツルツルにサングラスの」

榛菜は、容姿の説明で、何かで見たことあると言って笑っていた。

「もっと上の、第一展望台に行ってみる？」

「上もあるの？」

「うん。そこに案内がある」

僕は、中央の専用エレベーターを指差して言った。

ゆっくりとエレベーターに乗り込むと、他は外人が五人。一瞬異国の空間と化して、僕たちは異常な緊張に呑み込まれた。

唯一の仲間は、エレベーターガールだけだ。

榛菜が僕の手を握ってきた。

僕は彼女の顔を見ずにわざと素知らぬ顔で、彼女が掴んだ手をそのままにした。

本当は掴み返したかったけど、何だかがつついているように思われたくない。

泳いだ視線が、うっかり隣の外人とかち合った……

真っ白というより、少し頬と鼻の頭に赤みがある本物の白人男性は、青い瞳でニコリと僕に微笑みかけた。

僕は慌てて笑顔を返しながら視線を逸らす。

「びっくりしたね。外人ばかりだったよ」

ゆっくりとエレベーターから離れると、榛菜は小声で言った。

第一展望台は、第二に比べるとかなり小さくて、直ぐに一回りしてしまう。

それでも別料金のせいかな、人がまばらで空いていた。

隣にいた外人が、望遠鏡にコインをいれて覗き出した。仲間たちがそれに群がっている。

僕は隣で窓の景色に食い入る榛菜の手を掴んだ。

彼女は、僕と違ってハツとした表情で僕を見上げた。

僕は彼女と同じように手すりに寄りかかって、榛菜と視線を並べた。

大きな窓から入り込む五月の陽射しは暖かく、僕たちは光りに包まれていた。

彼女の大きな黒い瞳には、僕が映り込んでいた。

彼女の唇に、僕の唇がそっと触れた瞬間、僕が掴んだ彼女の手には微かに力が入るのが判った。

その時、反対側で楽しそうに望遠鏡を覗く外人たちの存在は完全に消えていた。

この空間で淡い光りに照らされているのは、僕たち二人だけなのだと思った。

彼女の少し乾いた唇は柔らかく、僕の唇に包まれて、そして僕を包み込んだ。

◆第19話◆

「ねえ、ここ階段で下りられるんだね」

第二展望台に戻って、ウロウロしていると、榛菜が指を指して言った。

「階段かあ」

僕は、もっと二人の時間を、二人の空間を堪能したくて彼女を階段へ誘った。

「無理だよ。あたしと歩いたら陽がくれちゃうよ」

「別にいいよ。バイトの時間にさえ間に合えば」

僕はそう言いながら榛菜の手を引いて、階段の扉を開けた。

そこは静まり返った空間が、下に向かって果てしなく続いていた。ゴーツと吹く風の音だけが聞こえた。

階段を一步ずつゆっくりと歩く。

「下まで行けるかな」

榛菜は四角いらせん状に何処までも続く階段を見下ろして呟いた。

「疲れたら、俺がおぶってやるよ」

僕は、彼女の左脚を重荷に思っていない事を証明したかったのかもしれない。

榛菜の脚が、僕には何の負担にもなっていない事、それを感じていない事を彼女に伝えたかったのかも……

いや、きっとそれは、自分自身に伝えたかったのだ。

ゴールデンウィークが終わって学校へ行くと、教室には久しぶりに恭子の姿があった。

しかし、何だか様子がおかしい。

連休明けで誰もがダルい授業を、嫌々ながら何となく時が過ぎて

いくのを待っている。

そんな連中でも、休み時間は元気がいい。

しかし、恭子は自分の席から全く動こうとはしなかった。何だか酷く痩せこけて疲れたような表情をしている。

「恭子、まだ風邪良くなってるんじゃないの？」

他の女子がそんな声を掛けているが、彼女は何となく薄っすらと笑うだけだった。

翌日、恭子はかなり元氣を取り戻したように見えて、他の娘とも普通にお喋りなどをしているが、何だかやつれた顔は相変わらずだった。

「なあ、恭子おかしくないか？」

昼飯を食べる屋上で、聡史が言った。

「身体の具合が悪いのかな」

「なんか、ヤバそうなのやつれ方してない？」

聡史は何氣に僕よりも恭子を観察していたりする。

ただ、単に洞察力に優れているのだろうか。

「ヤバそうって？」

「なんか、薬でもやってんじゃねえの」

「まさか。恭子だぞ」

「そうだよな……」

聡史はそう言って笑うと、売店で買ったカレーパンを頬張った。放課後、僕は帰りの駅で恭子を見つけたので、声を掛けた。

聡史の言った言葉が何処か引っかかっていたのかもしれない。

「お前、何処か身体でも悪いのか？」

「何で？」

「いや…… 何か、前より痩せたような」

「そう？ 調子いいよ」

「ならいいんだけど」

「ねえ、またしようよ」

恭子は、眼鏡の奥の窪んだ瞳で虚ろに僕を見つめた。

「いや…… ごめん」

僕はと言っているのか判らずに、俯いた。

「彼女いるんだもんね」

「えっ？」

「知ってるよ。上野学園の娘でしょ」

「どうして、そんな事」

「前に、池袋で見かけた。あたしと違ってめっちゃカワイイ娘」

恭子は、それだけ言うと、到着した電車に乗り込んだ。

池袋に到着すると、彼女は何時も通り塾に向かって駅の構内を出ていった。

その後姿は、何だか風に吹かれたら飛んでいきそうなほど頼りないものだった。

カワイイ娘。榛菜は確かにカワイイ。

だから僕は、彼女の片脚が義足でも許せるのだろうか。

もし、恭子の脚が片方無かったら。同じように接する事が出来るだろうか。

いや、そんな事を考えても意味が無い。

二人は全く別の人間なのだから、同じ症状であっても感じ方は違うはずだ。

僕は、恭子が嫌いではなかった。現に一時期心を引かれて優しくしてしまった。

彼女は知ってしまったのだろうか。

僕が、もしかして女を抱きたいだけで彼女の無垢な身体に手を出してしまった事を。

僕はそこまで考えた時、ふと気がついた。

いままで榛菜の脚の事に気をとられて、それを自分の中でどう処理するかばかりを考えていた。

そして今気づいた。

彼女とはセックスできるのだろうか。

いや、身体は健康なのだから出来ないわけは無い。しかし、彼女は他人に裸を見せるだろうか。

脚はどうする？ あの脚は重いのだろうか……

その行為の時には、やっぱり義足は取り外すのだろうか。

片脚のない女性を前に、性的興奮を感じる事が出来るのだろうか。僕は途端に頭の中が暗雲に包まれて不安でいっぱいになった。

彼女と付き合う問題は、歩き回るだけではない。彼女彼女としての関係。その先にあるものが、果てしなく遠い気がするのは何故だろう。

◆第20話◆

金曜日は暑かった。

街には半袖姿も多く、中にはタンクトップ姿もいる。

僕は学校帰り、聡史と一緒に池袋のLOFTの中をぶらついていた。

階段を下りて、PARCOに入る通路の所で、後ろから声が聞こえた。

「万引きだ」

振り返ると一人の少年が物凄い勢いでこちらに向かって走って来た。

僕は思わず身体を避けたが、聡史は横から思い切りその少年に飛びついた。

二人は床に倒れて、Pタイルの上を滑った。

「有難う御座います」

後ろから走って来た中年の男が、息を切らしながら言った。

聡史が掴みかかった少年は、それでも暴れて逃げようとする。

見かねた僕も少年を抑えようとしたが、がむしゃらに振り回す少年の拳が僕の顔面をヒットした。

「痛ってえ」

中年の店員が加わって、三人でようやく少年を押さえ込んだ。

間も無く警備が来て、少年を確保する。

僕は唇を切って、デパートの保安室と一緒に連れて行かれた。

「ありがとう御座いました」

中年の店員は再び僕と聡史に礼を言うと、冷たいコーラを出してくれた。

「いやあ、助かりました。最近万引きが多くて、会社から言われているんですよ」

その中年店員は、テナントには入っている大手画材ショップの

店長だと言う。

僕と聡史は何となく顔を見合わせて、同時に肩をすくめた。

「あの人は、どうするんですか？」

聡史が訊いた。

「彼は、可愛そうだけど、一応警察に来てもらうよ」

僕は、再び聡史と顔を見合わせた。

中年店長は僕にバンソウコウをくれたが、唇には貼りにくい……

「本当に有難うございました」

保安室を出るとき、再び中年の男は言った。

僕たちが通路に出たその時、女性がエレベーターを降りてやって来るのが見えた。

店内フロアと違って、少し暗い通路だったが、松葉杖を着いて歩く女性が榛菜だと言う事は直ぐに判った。

「ハル、どうしたんだ？」

「あ、ハルくん。何でいるの？」

「いや、ちょっと。ハルは？」

「うん……ちょっと。夜、店に行けたら話す」

榛菜はそう言って、保安室のドアを開けると

「七倉秋夫の姉ですけど」

声が聞こえて来た。

「おい、さっきのガキって、彼女の弟じゃねの」

聡史の言葉に、僕は閉められたドアを見つめたまま

「ああ、そうらしい」

その夜、榛菜は何時もより二時間遅れて店に入った。

マスターは僕と祐介に、彼女が遅れる事だけ伝えたが、僕にはその理由が判っていた。

あの時、彼女がどうしてあんなに早く秋夫を迎えに来れたのか。

それは簡単な事で、彼女は学校帰りの山手線の駅で、母親に連絡を貰ったのだ。

そして、自分が行けば早いからと彼女が秋夫の保護者として迎えに来たのだ。

最初は彼女が未成年だから保護者としては認められないと、あの中年店長は言った。

そこで僕たちはドアを開けて再び保安室へ入ったのだ。

榛菜が僕の知り合いだと言うと、特別に寛大な処置と言う事で、警察への連絡も取り止めにくれたのだ。

「また、怪我でもしたのかな」

仕事中、祐介のそんな言葉にも僕は「さあ？」とだけ応えた。

榛菜の弟秋夫は、彼女が脚をなくして以来、彼女中心にまわる七倉家の中で常にストレスを感じながら育ってしまったそうだ。

「でも、ストレスはハルにだってあったろう。一番苦悩したのはお前だろ」

店が終わると、榛菜は迎えに来る予定の母親に電話を掛けて、僕と話す時間を作った。

僕たちは大通りのファミレスに入って、ドリンクバーを片手に話した。

「でも、秋夫はまだ幼稚園だったから……」

僕は彼女がどうして足を無くしてしまったのか訊こうと思ったが、どうしても訊き出せなかった。

しかし、彼女はしばらくすると自分から話し出した。

「あたし、秋夫を死なせるところだったの」

「えっ」

「死なないまでも、秋夫が今のあたしみたいになってたかもしれないの」

◆第21話◆（前書き）

（中間あらすじ）

陽彦は、榛菜に心惹かれながら恭子と関係を持ってしまった。恭子の事を気に掛けながらも榛菜との付き合いを深めていく陽彦だったが、彼自身、義足を着ける彼女との付き合いに戸惑ってばかり。恭子の方は次第に学校へ来なくなって、何だか表情もどんどん暗くなってゆく◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ある日、デパートで万引き犯の確保に協力した陽彦は、それが榛菜の弟である事を知る。ろくに学校へも行かず街をぶらつく秋夫。そして、陽彦はついに榛菜の口から、彼女が脚を無くした時の真相を聞くことになる。

◆第21話◆

小学二年生になったばかりの榛菜は、弟の秋夫を連れて買い物へ出かけた。

夕飯のサラダに使うマヨネーズが切れている事に気づいた母親から、急遽お使いを頼まれたのだ。

榛菜は一人で行こうとしたが、まだ五歳の弟と一緒に行くと言っ
てきかなかったので、榛菜はその手をとって一緒に出かけたのだ。
陽はもう直ぐ沈もうとしていて、空を淡いオレンジ色に焼いてい
た。その夕日を受けて辺りの景色もほの暗く黄昏色に染まっていた。
当時住んでいた都営団地は、通りの向こうに新しい棟が建つら
しく、最近はダンブカーや大型トレーラーが行き来する事が多くな
っていた。

「ほら、秋夫。おネエちゃんから離れないでよ」

聞こえているのかいないのか、秋夫は榛菜の手を掴んでいたなど
思うと、急に離れて歩道の隅へ掛けて行ったり、そうかと思うと、
再び彼女に駆け寄って手を掴んだりしていた。

団地の敷地は広く、その中には買い物出来る場所はない。

敷地から出て、通りを渡って少し行った信号を渡って、そこにあ
るコンビニが一番近かった。

西日がほとんど見えなくなると、辺りはかなり暗くなって、それ
でも街灯の数が多いので歩くのに不便と言うほどでは無かった。

「ほら、秋夫。ちゃんと歩きなさい」

秋夫は相変わらず榛菜の手を引っ張ってみたり、身体ごと寄りか
かってきたりと終始忙しなく動いていた。

団地の敷地から向こう側へ渡る横断歩道へ来た時、秋夫が体重を
掛けて引っ張っていた手が、突然榛菜から離れた。

捕まえていたものが急に途切れた反動で、秋夫の身体がトトトト
……っと歩道からはみ出て車道へ飛び出てしまった。

「秋夫！」

榛菜が声を上げて叱ろうとした時、左折の大型トラックが交差点を横切ってきた。

「ほら、危ない！」

誰かの声がした。

「アキオ！」

榛菜は慌てて秋夫の手を掴んだが、小学二年生の女児にはそれだけで彼を歩道に引き戻せるほどの力は無かった。

榛菜はとっさに自分も車道へ出て、秋夫を庇うようにしながら身体ごと歩道へ突き飛ばした。

一瞬の出来事だった。

彼女に考えて行動する暇など無かった。考えていたら、十も車のトラックを目前にしてそんな行動が出来るわけは無かっただろう。

弟が歩道のはずれに倒れこむのが見えた。

これで大丈夫だ。秋夫は大丈夫だ……

振り返った榛菜の鼻先には、左折して来たトラックがいた。

それは既に絶望的な距離だった。

彼女はとっさに後ろへ仰け反るようにして、そのまま道路に倒れ、転がるようにうつ伏せになった。車高の高いトラックのバンパーは彼女のギリギリ上を通った。

運がよかった。この時だけは……

次の瞬間、榛菜の左脚に大きな物凄い圧力が加わった。

激しい圧力が何なのか、この時榛菜には判らなかった。

彼女は、運良く倒れ込む事によってトラックとの接触を免れた。

しかし彼女はトラックに対して垂直に転んだ訳ではなかった。斜めに転びそして転がった為、通過する後輪が左脚を踏み潰してしまっただのだ。

痛み…… そんなレベルでは無かった。むしろ、それを通り越して何も感じなかった。

「ギヤアアアア！」

悲鳴を上げたのは、一番近くで一部始終を見ていた若い主婦だった。

最初に「あぶない」と声を上げた人物だ。

彼女は思わず自分の連れていた子供を強く抱きしめた。

何かが何だか判らない秋夫も、只ならぬ周りの状況に、何かが弾けたように泣き出した。

トラック運転手には、秋夫も榛菜の姿も見えてはいなかった。しかし何かを踏んだ異様な感触で、慌てて車を止めた。

通行人の尋常でない悲鳴、そして子供の泣き叫ぶ声で、それがただ事では無い事が直ぐにわかった。

「何だ、どうした……」

慌てて外に出た運転手が見たのは、自分が脚を踏み潰してしまった少女が道路に転がっている姿だった。

救急病院に搬送された榛菜だったが、左脚の膝から下は復元不可能と診断され、潰れた部位は切断を余儀なくされた。

複雑骨折と言うレベルではない。粉碎骨折と、その上タイヤで踏まれた筋肉組織はすべて潰れてしまい、手の施しようが無い状態だった。

片脚を失った榛菜が病室で目覚めた時、両親に最初に言った言葉は「秋夫は？ 無事？」

それだけだった。

七倉家は榛菜が片脚を失って以来、全てが彼女中心で回りだした。母親も、まだ幼かった秋夫の面倒を充分に見てやれたかは定かでない。

努力はした。榛菜に掛かりっきりになっても、何時も秋夫の事を心配した。

最初の頃は纏わりついて無理を言ってダダを捏ねていた秋夫も、次第に何も言わなくなり、小学校に入る頃にはずいぶんとしっかりしてきたと思ったものだった。

しかし、彼なりの寂しさは、心の奥に潜んで消えはしなかったのだ。

そして次第に心を閉ざすようになって、中学に入ると良からぬ仲間と過ごすようになっていった。

足を切断した榛菜は、他の部分の怪我が治るのとは対照的に、元気を無くしていった。身体が自由になれば、それだけ片脚が無いという現実と向き合う頻度が増すのだ。

どんなに体調が回復しても、自由に歩き回る事が出来ないのだから。

父親は、娘の脚が無くなった現実から逃避するかのように仕事に没頭し、病院にもほとんど顔を出さなかった。

医療費など全ての賠償は、運送業者が責任を持つことを承諾したので、治療のお金には困る事は無かった。

父親はただ、脚を無くした娘を受け入れられなかったのだ。

これから大人になって、本当の女になって青春の日々を桜花するはずなのに、こんな身体では結婚どころか恋人だって出来るか判らない。

父親は、榛菜が生まれた頃

「こいつの彼氏が挨拶に来たって、絶対笑顔は見せねえよ」

そんな冗談を言っっては、デレデレと顔を緩ませて笑っていた。

それがどうだ……俺に会わせる彼氏だって作れるのかどうか……

榛菜は、明るく元気でとても活発な子供だった。しかし、それでも彼女が自発的にベッドから出て、車椅子に乗るまで二ヶ月かかっ

た。

片脚の無い事を吹っ切るまでには、さらに二ヶ月。

しかし、元の学校への復帰は難しかった。

学校へは松葉杖を着いていかなければならない。体育の授業も受けられない。

そんなストレスを抱えながら、クラスの仲間と過ごす覚悟が必要だった。

そんな時、父親が義足の話を聞いてきて、榛菜の左脚は外見上元に戻った。

榛菜が事故に遭ったのは梅雨入り前の事だったが、彼女が学校へ再び通い出したのは、銀杏の木の葉が黄色くなって、だいぶ枝も寂しくなった頃だった。

◆第22話◆

その夜、僕は榛菜をバイクで家まで送ってから帰宅した。

彼女は弟を死なせる所だったと言ったが、事実は違っていた。

榛菜は弟を助ける為に自分を犠牲にしたのだ。

彼女は自分の左脚と引き換えに、秋夫の命を救ったのだ。

弟の命の対価が、彼女の片脚。それが、高いのか安いのか僕には判らない。

秋夫は覚えていないのだろうか。

五歳という年齢は微妙だ。記憶が曖昧で、驚くほど鮮明に残っている出来事があるかと思えば、全く記憶にない事もある。

僕自身がそうなのだから、彼もそう変わりはないだろう。

彼女は当時小学二年生。そんな幼い姉でも、弟を思う愛はそれほどに大きいのだろうか。

それとも、彼女が特別なのだろうか。

兄弟のいない僕は、秋夫に対する榛菜の愛情が少しだけ羨ましかった。

自分を救うために榛菜が犠牲になった事を知ったら、秋夫は立ち直るだろうか。

いや、自責の念に駆られるだけかもしれない。そうしたら、七倉家にもう一つ苦悩を増やすだけだ。

僕はベッドに横になったまま、点けっ放しのテレビを眺めていた。何処か遠くで鳴っている救急車のサイレンの音と、それに惹かれて遠吠えをする犬の鳴き声が、カーテンで閉ざされた闇の向こうから聞こえていた。

再び学校の授業が早かったこの日、聡史が新宿で理奈と待ち合わ

せで、時間が余っていると言うので、僕は久しぶりに新宿まで付き合った。

駅ビルのカジュアルショップでTシャツを買った。

たまにしか来ない新宿は僕には複雑すぎて、あまり駅から離れると戻れなくなりそうだったから、もっぱら駅周辺をブラついて時間を潰す。

アメリカンブルーバードで秋夫を見かけた。

路地の隅で誰かと一緒にタバコを吸っている。

「おい、アイツこの前の」

聡史も彼を見つけて言った。

僕が秋夫に近づこうとすると

「やめとけよ」

聡史は僕の腕を掴んだ。

「でもさ」

「ハルちゃんの弟でも、お前には関係ないだろ」

僕は聡史に促されて、渋々方向を変えた。

僕にしてやれる事は、本当に何もないのだろうか。

聡史と別れて、池袋まで戻って来ると、僕は榛菜と待ち合わせをしていた場所へ向かった。

バイトが休みの今日、僕たちは映画を観て、食事をして、ごく普通のカップルとして時間を過ごした。

人波は常に僕たちを追い越してゆく。

この前彼女と出かけた東京タワーで、僕はかなり彼女の歩くペースに慣れた。今日は松葉杖もあるから、それより少し早いペースで歩ける。

それでもやっぱり、人混みの中で榛菜のペースで歩くのは非常に困難で、出来るだけ周囲の邪魔にならない右端を歩く。

広い歩道では問題は無いが、駅の地下道では時折誰かが肩をぶつけて行く。

これだ…… 亜貴は何時もこんな目に遭っているに違いない。

僕は亜貴に習って、地下道など狭い場所では榛菜を壁際に歩かせ、自分が内側を歩く。

そうしないと、心無い人が榛菜に接触して転倒に繋がる場合があると聞いていた。

彼女と歩いて初めて気がつく事は多い。

今まで自分は自分の都合だけで歩き回っていた。

僕自身も、知らずに怪我人の歩くスペースを妨げたり、時にはぶつかったりしたかもしれない。

健常者、身障者などと認識して周りを見ていなかった。

車椅子や白い杖などは一見してわかりやすいが、松葉杖を着いていない時の榛菜などは、はたから見れば健常者に見えてしまうかもしれない。

だから彼女は通学時、ラッシュの中でも目立つように松葉杖を使うのだそうだ。

「ねえ、何処かで夕飯も食べていこう」

チケットセゾンの前まで来た時に、榛菜が言った。

「家で食べないの？」

「今日お母さん出掛けてるから」

榛菜は笑って

「ほら、あたしのバイトがなければお母さんも自由だし」

「そっか」

僕は辺りを見渡してから

「じゃあ、バイクで出ようか」

「別にいいけど…… 制服のスカートは短いから捲れそうになって恥ずかしいな」

「大丈夫だよ」

僕たちはとりあえず、西武線に乗り込んだ。

車内は帰宅の会社員などでまだ混んでいて、僕はシルバーシートを見つけたが、サラリーマンのオヤジ達が占領していた。

退いてもらおうとすると、榛菜は僕の腕を掴んで「大丈夫だよ」と言った。

僕は、今まで自分がシルバーシートには絶対に座った事が無い事を、少しだけ誇らしく感じた。

◆第23話◆

駅を出たら家までダッシュで帰って、玄関に置いてあるヘルメットを二つ抱えて家をでる。

駅裏の通り沿いに着いたら、駅に残してきた榛菜の携帯を鳴らして呼び出す。

彼女は松葉杖を着きながら通りへ出てきた。

「早かったね」

「ウチ、すぐそこだから」

「着替えなかったの？」

「俺だけ着替えるのも悪いだろ」

榛菜は松葉杖を使って、一人でタンDEMシートに跨る。だいぶ慣れた感じた。

「よし、行こうか。松葉杖、気をつけて」

僕はそう言ってバイクのクラッチをゆっくり繋いだ。

「何食べたい？」

「うん：イタリアン以外がいいな」

「俺も」

二人の笑いが、風で後ろへ飛んでいく。

目白通りとの交差点を突っ切って富士街道を中村橋へ進む。しばらく行くと大きな日本食専門店が在った。

夕飯を食べ終わって店を出たのが夜の九時。

夜のバイトをする僕たちにはまだまだ宵の時間だが、もう送っていった方がいいだろう。

新目白通りを走って、彼女の住む西落合へ向かう。

道路が空いていた為、十分程で到着した榛菜の家の明かりは点いていなかった。

「まだ、誰も帰ってないんだね」

「うん」

「弟さんは？」

僕は、昼間見かけた事は言わなかった。

「友達の所に行くって、さっきメールが来てた」

「一応メールはよこすんだ」

「うん。あたしにはね」

榛菜はそう言いながらバイクを降りると

「お茶、していく？」

僕は、さっきまで何も考えていなかったが、彼女の言葉で少しだけ心臓が波打つのを感じた。

「えっ、いいの？」

「いいよ。別に」

何だか胸の鼓動が高鳴る。

僕は何を期待してるんだ。彼女はそんなつもりで誘っているわけではないのに。

僕はヘルメットを脱ぎながら、七倉家の門を潜った。

「コーヒーがいい？」

リビングに通されて、ソファに腰掛ける僕に榛菜が訊いた。

「ああ」

僕はそう応えながら、彼女がキッチンを動き回る姿を見ていた。

「手伝おうか？」

「大丈夫よ。コーヒーぐらい」

彼女はコーヒーメーカーのスイッチを入れると

「よいしょ」と言って、僕の隣に腰掛けた。

ストンと腰を落とした弾みで、二の腕同士がぶつかって擦れ合う。バイクに乗れば自然に身体が触れ合うのに、ソファで身体が触れ合う感覚は全く別物だ。

今日観た映画の話なんかをしていると、直ぐにコーヒーの香りが漂いだした。

榛菜は立ち上がってカップにコーヒーを注いで来ると、再び僕の横に座った。

何だか自分でも判らないうちに、僕は彼女の手をそっと握っていた。

触れ合う二の腕が、あまりにも彼女をリアルに感じさせた。

榛菜の吸い込まれそうな黒い瞳は、僕に近づいてブラックアウトした。

唇には柔らかく温かい感触。

服の上から榛菜の胸を触ると、カサカサと綿のブラウスが擦れる音がして、彼女は微かに吐息を漏らしながら僕のその手を掴んだ。

このまま何処迄も彼女を征服できるのだろうか。

僕は頭の隅で考えながら、それでも僕の手を掴んだ彼女の手之力具合を確認していた。

きつと、その手の力具合が彼女の開いた心のバロメーターだ。

◆第24話◆

僕は榛菜のブラウスのボタンを上から順に外した。

榛菜は何かを言いたそうにしているが、僕は彼女の唇を塞いだまま行動を続ける。

ボタンを四つ外し、手探りでその隙間に手を忍ばせると、指先が肌に触れて彼女の体温を直に感じた。

上体をねじっているせいか、胸と下着のカップの間には隙間が出来ていた。

僕は指先をゆっくりと滑り込ませる。

榛菜は僕の手を掴んだまま、されるがままだったが、直に胸の先に指が触れた瞬間、小さな声と共に力強く僕の手を引いた。

そして、強引に僕から唇を離すと

「ご、ごめん…… あたしまだ」

そう言いながら、開いた胸元を閉じている。

「いや……俺の方こそ……ごめん」

「あたし、純情ぶってるわけじゃないんだけど……」

「大丈夫。無理にする気はないし……ハルを傷つけたくはない」

「ごめんなさい。勇気がなくて」

「そんな事ないよ」

僕は、榛菜の入れたコーヒーをブラックのまま一口飲んで

「で、でも、キスはいいの？」

榛菜はコクリと頷いて

「その先も、嫌ってわけじゃ…… でも」

その先とは、何処迄の事を言うのだろうか。

彼女は最後までを指しているのだろうか。もしそうだとしたなら、やはり気になるのは左脚の事だろうか。

彼女はコーヒーに砂糖とミルクを入れながら

「この脚、その時どうしたらいいかわからないし。全部を見られる

のは、やっぱりまだ恥ずかしい……」

榛菜はコーヒークップの中に視線を落したまま言った。

僕は彼女が拒む事よりも、拒む自分を責めるような榛菜に対し、そんな気持ちを与えてしまった僕自身が恨めしかった。

「本当はね、もっと人肌に近い材質の義足も、今はあるんだ」

榛菜は、コーヒーを一口飲んで言った。

「どうしてそれにしないの？」

「足首がね、あまり動かないの。階段とかも歩きにくいのよ。だから、あたしは機能優先」

榛菜は小さく笑った。

シリコンで覆われた人肌に近い義足は、関節の可動が小さい。かと言って、ハイテクのダンパーを備えた義足はそれを妨げない為に表皮で覆う事が出来ない。

どちらも一長一短というわけだ。

パラリンピックで陸上をする人などを対象にしたスポーツ義足というものもあるそうだ。もちろん、百パーセント機能重視だ。

榛菜は、初めて義足の事についていろいろ話してくれた。

普通の高校生カップルがする話ではない。それでも、榛菜が少しづつ自分の事を話してくれるのが、僕は嬉しかった。

「ただいまあ」

突然玄関のドアが開く音と共に声が聞こえた。彼女の母親が帰って来たのだ。

「おかえり」

榛菜はリビングから声だけを返す。

僕は急にあたふたして、榛菜を見つめた。

「ドウドウ」彼女は馬を宥めるように笑顔で僕の肩を叩くと

「大丈夫よ。落ち着いて」

「でも、やばくない？」

そんなやり取りをしている内に、彼女の母親はリビングに顔を出した。

「あら、お客さんだとは思ったけど」

「こ、こんにち… こんばんは」

僕は慌てるようにソファから立ち上がった。

「こんばんは」

榛菜の母親はそう言って笑った後

「確か、ミツルさんここで働いてる」

ミツルとは、ベルリネッタのマスター高峰ミツルの事だ。

「里見陽彦です」

「あら、あなたもハルなの？」

「そうよ、ハルが二つで縁起がいいでしょ」

榛菜が母親にそう言って笑った。

「何それ」

母親は少し首を傾げながら笑う。

「ミツル叔父さんが言ったんだよ」

「あの人らしいわね」

「じゃあ俺、そろそろ」

「あら、来たばかりじゃないの？」

「いいえ、もうコーヒーご馳走になったし」

僕は『もうかえるよ』と榛菜に視線を送る。

「じゃあ、外まであたし送るから」

「いや、大丈夫」

「いいから」

榛菜はそう言って、僕の腕を取った。

母親の前で彼女に腕を掴まれて、僕は異常に緊張した。

「大丈夫？」

玄関を出てから、僕は小声で榛菜に言った。

「何が？」

「だって、男連れ込んだりして」

彼女の何処と無く清楚な感じは、箱入りのイメージがある。

「お母さんの顔見たでしょ。嬉しそうだったじゃない」

「そうだったか？」

「あたしが男の子連れて来るなんて、初めてだからね」

「そうなんだ」

僕はふと気がついて

「そう言えば、お父さんは？」

「今日、明日と出張よ。だからお母さんも羽を伸ばしてたのよ」

「そ、そうか」

僕は、もし今帰ってきたのが父親だったらと思うとゾツとした。

「あ、胸のボタン開いたままだった」

突然彼女が言った言葉に、僕はギョツとして視線を下げた。

「ウツソだよ。さっき閉めたじゃん」

「おいおい、マジで焦るよ……」

彼女は悪戯っぽく笑うと、目を細めて急に小声になり

「でもよかったね。最後までしてたら、ヤッてる最中に出くわしてたもんね」

「そ、そうだな……」

僕は再びゾツとして、苦笑しながら額の汗を拭ってヘルメットを被った。

「またねえ」

榛菜は、バイクで走り出す僕に向かって無邪気に笑って手を振っていた。その姿には、身障者も健常者もない。

◆第25話◆

この日、僕は聡史の家に久しぶりに行った。

小学校までは同じ学区に住んでいた僕たちは、もちろん当時クラスメイトだった。

僕が中学一年の時に引っ越してしまったのでしばらくは会わなかったが、高校へ入って再び顔を合わせた二人は何かと行動を共にするようになり、僕がバイクに乗るようになると彼の家にも再び遊びに行くようになった。

最近では、バイトや榛菜の事で忙しく、しばらく来ていなかった。

「俺だってなあ、今度はぜってえ頭のイイ女捕まえてやる」

聡史はくだを巻きながらほろ酔いになっていた。

彼は理奈と別れたらしい。しかも、別れを切り出してきたのは向こうで、聡史は初めて振られる経験をしたようだ。

僕はバイクで来た為、コーラを飲みながらひたすら彼の話を聞くふりをして、頭の中では榛菜の事を考えていた。

「ところで、お前、ハルちゃんともうしちゃったのか？」

聡史が急に切り出した。

もともと、そんなには飲んでいない。気分を盛り上げるために、サイダーで割ったバーボンと、缶チューハーを一本空けただけだ。

「何だよ、急に」

「まさか、プラトニックとか言うなよ」

「いや、でも彼女脚がさ……」

「そう言えば、あの怪我、全然よくならないな」

彼に悪気は無い。僕だって、彼女の事をよく知らなければ同じ疑問を持つだろう。

「ああ、治り難いんだとさ」

僕は榛菜の脚の事は誰にも言っていない。

彼女に無断で、それを誰かに言っではいけないような気がしたの

だ。

「じゃあ、しゃあねえな」

聡史は、ウーロン茶をボトルごとゴクゴク飲んで

「治るまで御預けか」

「まあな」

彼女の脚は治らない。治る脚が無いのだ。

この先、彼女と付き合っていけるのだろうか。本当に彼女は、身体関係を拒まない日が来るのだろうか。

僕に、全てをさらけ出す日が来るのだろうか……

僕がもっと歳を取っていれば、もっと落ち着いて考えられるのかもしれない。

しかし僕は何故か追い立てられるような焦りを感じてしまう。

もっと、他の誰かと適当に経験を重ねた方がいいのではないか。

何も高校生の僕が、身障者一人に関ずらわって貴重な青春を地味に過ごす事は無いのではないかと。

そう思うもう一人の自分がいるのだ。

僕は聡史の家の帰り道、中仙道からハンズの裏を通って池袋を突っ切ろうとした。

ハンズの駐車場の前で、誰かが座り込んでいる。

酔っ払いの女か……

しかし、僕は直ぐにバイクのブレーキを命イッパイ握って止まった。

「恭子……？」

バイクを降りて駆け寄る。

人違いならそれでいい。いや、その方がいい。

しかし、それは紛れも無く橘恭子だった。

立体駐車場のエレベーターの入り口の所で、地べたに座り込んでいた。

キャミソールは捲くれ上がって、スカートも乱れていた。眼鏡はずり落ちて、かろうじで鼻に引っかかっている。

「恭子、どうしたんだよ」

声を掛けると、彼女は虚ろな目で僕を見上げたが焦点が定まっていなかった。

僕は、彼女の両肩を掴んで、強く揺すった。

「おい、恭子。俺だ、陽彦だよ」

彼女の口から漏れた唾液が、糸を引くように下に向かって流れた。……なんだ。何なんだ。これは。

酔っ払っているとかでは無い事が、直ぐに判った。

少しだけ酒の臭いはしたが、こんなになるレベルでは無い。

いったい彼女に何があったのだろうか。

僕は初めて見る光景に、完全にうろたえていた。

恭子は僕の呼びかけに微かに反応はするが、僕自身を認識してはいない。

何処かを見つめる瞳は、魚の死骸のようだった。

クスリ……恭子は、聡史が想像した通りクスリをやっていたのだろうか。少し前からやつれた姿に変貌していったのは、その為だろうか。

ふと足元が濡れている事に気がついた。

その液体は、恭子の座り込んでいる下から流れていた。

こんな……これが、あの恭子だろうか。少しキツイ眼差しで僕に掃除をサボるなど何時も指図をした彼女の姿だろうか。

僕はどうしていいのか判らずに、高峰さんに電話を入れた。

「救急車呼んだのか？」

「でも、学校に知れたらヤバイよ」

「バカ野郎！ 死ぬよりマシだろう」

死ぬ……恭子は死んでしまうのだろうか。

こんなにボロボロになって、弱々しくなって死んでしまうのだろうか。

「今すぐ救急車だ」

怖気づいた僕の気持ちに渴を入れるようなマスターの怒鳴り声が、電話から聞こえた。

僕は、電話を一端切って、直ぐに救急車を呼んだ。

救急車が来る前に、僕は彼女の乱れた衣服を正して、眼鏡を外し、それを自分のポケットにしまった。

到着した救急隊は慌しく恭子をストレッチャーに乗せると、車内へ運び込んだ。

彼女がいた濡れたコンクリートには、座っていた跡がくっきりと残っていた。

「キミも乗って」

救急隊員が僕に声をかけた。

「俺バイクなんで、付いて行きます」

僕はそう言って、TWで救急車の後を追った。

北池の救急病院だったので、直ぐに到着した。

僕がバイクを降りたときには、既に恭子は院内に運び込まれていた。

救急搬送用の入り口付近に、応急処置用の小部屋がある。

恭子はそこへ運び込まれて、医師たちの慌しい声に包まれていた。

僕はいたたまれなくなって、常夜灯だけが灯るほの暗いロビーの椅子に腰を下ろした。

何だか、異常にタバコを吸いたかったが院内は禁煙だし、外へ出る気力もその時の僕には無かった。

◆第26話◆

ほの暗いロビーに自分の薄い影が微かに映っていた。

しばらくすると、恭子はストレッチャーに乗せられたまま、治療室へ運ばれていった。

僕はその光景を、何処か非現実的な、まるでテレビのワンシーンのように感じながら見つめていた。

「あの……」

最後に通り過ぎた看護婦を呼び止めた。

「お連れの方ですか？」

「あ、はい……」

「いま治療室で処置いたしますので、しばらくここでお待ちください」

看護婦はそう言って、足早に去っていった。

「ここで……？」

僕は、使っていないドラマのセットのような空間を見渡しながら、思わず呟いた。

やはり彼女の両親に連絡するべきなのだろうが、僕は恭子の携帯番号しか知らない。

聡史に連絡して名簿を調べてもらおう。

僕が聡史の携帯に電話すると、彼はいささか僕がいた時よりも酔いが回っている様子だった。

「恭子の家の番号調べてくれないか」

「何だよ、何で恭子なんだ」

「いや、とにかく頼むよ」

「俺、知らねえぞ」

「名簿があるだろう」

「あ、ああ、そんなもんあったな」

聡史は電話を片手に部屋の中をゴソゴソと探し回っているようだった。

「おう、あったぞ。……で、何だっけ」

「恭子の家の番号だよ」

「ああ、そうか」

しきりにページをめくる音が聞こえた。

「所で、お前何処からかけてんだ？」

「ちよつと、出先でな」

「ふうん……」

「番号頼むよ」

「おお、そうか」

その後聡史から教えられた番号で、恭子の家に電話した。

母親も、以前から何かを感じ取っていたらしい。

静かで落ち着いた受け答えが、僕にそう感じさせた。

僕に今出来る事は、全てやり遂げた。

もう、彼女の為に今してあげられる事は何も無い。

僕は、ロビーを出て一端外へ出ると、ようやくタバコに火をつけた。

吐き出した煙は、何も見えない夜空に浮かんで、水銀灯の光の中に吸い込まれていった。

翌日、当然のように恭子は学校へは来ない。

学校には何と言ったのか、先生は何も言っていなかった。

「おい、ハル。昨日、どうして恭子の家の番号が必要だったんだ」

聡史が怪訝そうに僕を見て言った。

「お前、何か知ってるだろう」

僕は何も言わなかった。

「おい、ハル」

その場から立ち去る僕の背中を、聡史は視線だけで追いかけた。

恭子はスピードと呼ばれるクスリ……つまり覚せい剤に手を出して、昨晩は急性の中毒症状に陥っていたのだ。

どんな経緯でそうなったのかは判らない。

ただ、彼女は下着を履いていなかったそうだ。

何処かに連れ込まれて乱暴された末に、あそこに棄てられたのかもしれない。

乱暴される前に、大量のエスを飲まされたのだろうか。

しかし、彼女は以前からクスリに手を出していたらしい。混ぜ物を増やして錠剤に加工されたものなら意外と手軽に入手が可能だと聞いたことがある。

「何時かこうなると思っていたのよ」

昨夜、恭子の眼鏡を母親に返すと、彼女はそれを握り締め、悲しい目で僕にそう言った。

父親は大事な仕事で出張中だそうだ。

「クスリの事、判っていたんですか？」

「薄々は……何かイケナイ事に手を出してしまった事だね」

「どうして止めなかったんですか」

「恭子は最近、家で暴れるようになって……父親がいるときはいいんだけど、最近出張が多くて」

母親は、ほの暗いロビーの椅子に腰掛けたまま

「もう、私の手には負えなくなってたのよ」と、弱々しく言って顔を両手で覆った。

そして、彼女を偶然見つけた僕に、何度も何度も頭を下げた。

大人に、しかも同級生の親にこんなに頭を下げられて僕は、いたいどんな態度でいれればいいのか見当もつかずに、ただ時間が過ぎるのを待っているだけだった。

◆第27話◆

その日はバイトの休憩時間に榛菜と顔を合わせても、何だか話は弾まなかった。

と言うより、恭子が病院のベッドで呼吸器を着けているのに、僕だけが楽しくしている事が急に後ろめたい気持ちになったのだ。今まで榛菜という時に恭子の事など考えた事はない。

それなのに、昨晚のあまりにも悲惨な彼女の姿が脳裏に焼きついて離れなかった。

彼女の口から流れ落ちるヨダレを見たとき、恐怖さえ感じた。

「今日は元気ないね」

榛菜は何かを察して、遠慮がちにそう言った。

「友達が入院してさ」

「そう」

僕はそれ以上話さなかった。

榛菜もそれ以上訊こうとはしなかった。

彼女の心配そうな視線が、何だか少しだけ痛かった。

バイトからの帰り際、小さく手を振った榛菜の笑顔は、少しだけ寂しそうだった。

翌日学校へ行くと、放課後職員室へ呼ばれた。

「お前、橘を見つけて救急車を呼んだんだって？」

担任はお茶を片手に、ごく穏やかな口調で言った。

「ええ、いちお」

「何処で見つけたんだ？」

「池袋です」

「お前が見つけた時、橘はどんな状態だった？」

「どんなって？」

「救急車を呼んだくらいだから、普通じゃなかったんだろ」

「判りません。彼女気を失ってる様子だったから」

僕は本当の事は言わなかった。教師が真相を知りたがっている様子が判ったからだ。

担任は深く息をつく

「池袋の何処で見つけたんだ？」

「サンシャインの近くです。ハンズの直ぐ横」

僕はかなり近い線で真実を言ったが、やはり詳しい説明をあえて避けた。

「そうか」

担任は再び息をついた。

学年主任とか、上の人間から真相の追究を迫られているのかもしれない。だとすると、恭子の母親は、学校に何と言って説明したのだろう。

それが判らない今、僕が適当な事を言うわけにもいかない。

「彼女、違法なクスリをやっていた感じは無かったか？ そんな素振りとか」

急激に痩せていった恭子の姿は教師たちも見ている。しかし、だからと言って、それがすぐにドラッグに結びつけるわけにもいかないのだろう。

「さあ、僕には何とも」

「そうか」

担任はお茶を啜ってから名残惜しそうな目で僕を見つめると

「放課後悪かったな。帰っていいぞ」

僕は北池の、恭子が運ばれた病院へ向かった。

もう回復したのだろうか。あれ以来、彼女の親からも連絡は無い。正面玄関を抜けてロビーに入ると、この前とは全然違う明るい空

間が広がって、外来の人たちで椅子は埋まっていた。

受付カウンターで恭子の病室を訊く。

僕はあえて階段を使って3階まで上る。病院の無機質なエレベーターはどれも好きになれない。

彼女の部屋は一人部屋だった。

軽くノックをすると、返事が聞こえた。

確かに恭子の声だった。

静かに扉を開けて部屋に入ると、点滴のチューブを腕から伸ばした恭子がベッドに横たわっていた。

幾分顔はふつくらとして、以前の彼女の面影を取り戻しているが、顔色はいっそう白くなったような気がした。

僕はゆっくりと彼女のベッドへ近づいた。

「ごめんね、迷惑かけちゃったね」

彼女はかすれた様な小さい声でそう言って、僕を見上げた。

「ぜんぜん」

僕はそう言ってただ微笑んで見せた。

僕を見つめる彼女の瞳はみるみる潤んで、目の端に溜まった雫は横に向かって伝った。

僕にはその涙の理由は判らなかった。

彼女は、ただ「ごめんなさい」と、しゃくり上げながら何度も何度も呟くように言った。

窓から入る西日が眩しそうで、僕はそっとカーテンを半分だけ閉めると、彼女の手を握り締めてあげた。

恭子は弱々しい力で、それでも僕の手を握り返した。

◆第28話◆

肌寒い日が続いた。

空は何時もどんよりと重い雲が立ち込めて、一日中雨が降ったり止んだりの繰り返し。

そんな日が続いていた。

雨が酷い日は、学校帰りにベルリネッタへ直接立ち寄る。

バイクを出せなければ、いちいち家に戻る必要が無いからだ。

僕は、優秀なウェイター兼皿洗いに徹して、榛菜はピアノを引き続ける毎日が続いた。

「おい、里見」

帰りがけにマスターに呼び止められた。

「なんすか？」

「なんすかじゃあねえだろ」

「な、何が……」

「榛菜と喧嘩でもしたのか？」

「いや、別にそんな事ないですよ」

僕は、わけの判らないマスターの問いにきょとんとして応えた。

「本当か？」

「本当ですよ。何ともないですよ」

どうしてマスターはそんな事を言うのだろう。ここ何日かは確かに休憩中もあまり彼女と言葉を交わさないが、店内では元々そんなに大っぴらには親しくしていない。

「最近のピアノだよ」

マスターは厨房の陰に置いたグラスにワインを注いだ。

「ピアノが何か？」

「ここんところ、榛菜のピアノが荒れてるんだよ」

それを聞いてハッとした。僕は最近、仕事をしながら榛菜の奏でるピアノに耳を傾けてはいない。

「そ、そうですかね」

マスターは、チツと舌打ちをして

「しょうがねえ奴だな」

「いや、そう言われても、俺、ピアノを聴くのが仕事じゃないですし……」

マスターは僕の背中を、力いっぱい叩いた。

「イタッ。なんすか？」

「お前、榛菜に何かしたろう」

「いや、別に……」

何かしたといわれると、完全否定も出来ない。キスはしたのだから。

でも、それは関係ないし……

彼女のピアノが荒れているのは、僕が榛菜の相手を疎かにしているからなのか。彼女はそれを不満に思い、それがピアノの音色に出るのだろうか。

しかし、彼女は何も言わない。

いや、僕が恭子の事を心配しているのを察して、気を使っているのか。

「何か、思い当たるのか？」

マスターは僕の表情を覗いながら、グラスを片手に僅かに唇の端を上げて笑った。

「いや、別に」

僕はそう言ってごまかした。

その時、お客が一組入ってきたので、マスターはフロアーに出た。僕はその隙に

「お疲れさまです」

そう言って、足早に裏口から店を出た。

榛菜のピアノの音色が荒れている。そんな事、僕は全然気づかなかった。

雨上がりの湿った風が荒ぶるように吹き付けて、久しぶりの太陽の光りはアスファルトを照らしていた。

僕は再び恭子を見舞って病院へ行った。

彼女の身体は次第に回復して、中毒症状も殆ど陰を潜めたらしい。顔色も良くなり、頬の膨らみも以前と変わらなくなった。

一人部屋から六人部屋へ移り、ベッドからも起き上がって、院内を散歩したりもする。

「今日は、風が強そうね」

一階の病棟同士を繋ぐ通路で立ち止まった彼女は、大きく揺れる中庭の草木眺めて言った。

まだ乾いていないアスファルトには、日の光りが白く反射していた。

「バイト、これから？」

「ああ、もう行かなくちゃ」

一階から少しだけ遠回りして彼女の病室へ戻る。

途中、殆ど患者が通らない非常出入り口の傍で、恭子は強く僕に抱きついた。

「またしたいよ」

僕は彼女を抱きとめる事はしなかった。

「無理だよ……」

「二股かければいいじゃん」

彼女は僕の胸に顔を埋めたまま呟くように言った。

「どうせ、適当な付き合いなんでしょ」

「榛菜はそんなんじゃない。適当に付き合える娘じゃないし、俺もそんな気はない」

「榛菜って言うの、あの娘」

あの娘？　そうか、彼女は榛菜を知っている……何度か榛菜を見てるんだ。

「脚引きずってたね。何だか足手まといっぽいじゃん」

僕は恭子の身体を突き放した。

「そんな事、お前が言うなんて……」

「何？ あたしは優等生だから、障害者にも優しいと思った？」

壁にもたれ掛かった恭子は、髪の毛で顔を半分隠したまま、薄笑いを浮かべて言った。

榛菜が障害者という事も知っている。恭子は榛菜をつけ回したのだろうか。それともどうにかして調べたのだろうか。

「どうして、そんな事知ってるんだ」

「どうだっていいでしょ」

彼女はそう言って、病棟に向かって歩き出した。

「おい、恭子」

「もう帰って」

彼女は小さくそう言った後、立ち止まると

「もう来ないでくれる」

振り返らなかった。

「優等生がヤク中になるわけないでしょ。もうあたしは優等生の恭子じゃないんだよ」

再び歩き出した彼女を、僕は追えなかった。ただ立ち尽くしたまま、恭子の暗く陰った後姿を見つめていた。

強風が建物を吹きぬける音が、ゴーツゴーツとまるで竜が唸るように響いていた。

◆第29話◆

あなたは、自分が知らない間に誰かを傷つけている事を気に掛けた事がありますか？

自分の言葉や態度が、誰かを傷つけたのでは……そんな事を感じた事がありますか？

＊ ＊ ＊

入院から3週間、間も無く期末試験が始まる頃、恭子は学校へ来た。
た。

僕はあれ以来彼女の病院へは行かなかった。

恭子は停学などの処分を受ける事はなかった。両親がうまくごまかしたのか、それとも学校側が世間に知れることを恐れて隠蔽したのか。

そんな事は、僕には判らなかった。

学校へ復帰した恭子は、完全に孤立していた。

朝学校へ来て帰りの時間まで、自分の机で文庫本を読んでいる。

席を立つのはトイレに行く時ぐらいだ。

彼女に話しかける者はこの教室には誰もいなかった。

昼休み、僕は聡史と共に、何時ものように屋上へ向かう途中だった。
た。

「あんた、ヤク中で、男とやりまくったんでしょ」

「中だししまくって入院したの？」

女子トイレの前を通りかかった時、複数の声の中から聞こえてい

た。

僕は何事かと思いながらも、そのまま通り過ぎようとしていた。しかし、ふと横を見ると聡史がいない。

振り返ると、彼は女子トイレの前で立ち止まっていた。

「どうした？」

僕の声に聡史は応えなかった。

奥まったトイレの入り口に立って、中の様子を覗うのに夢中だ。

「ねえ、何人とヤツタの？」

「同時にヤツタんでしょ？」

「今まで我慢してた分、イッキってカンジ」

トイレの中では相変わらず何人かの声が、そして笑い声が響いて聞こえた。

それが、誰に向かって言っている事なのか、僕は察しがついていた。おそらく聡史も同じだったのだろう。

彼は不意に女子トイレの中に足を踏み入れた。

この学校のトイレは、入り口を入れて洗面台と鏡がある場所にはドアはない。

直角に折れ曲がって、観音開きのゲート式の扉があり、さらに反対に曲がってトイレが並ぶ。これは、男子も女子も変わらない。

聡史は、扉の前に立つと、無言で扉を押した。

中には三人の女生徒の姿があった。

「ちよっと、女子トイレだよ。何やってんの？」

一人が聡史を睨みつけた。

他のクラスの娘たちで、僕は誰とも面式は無かったが、聡史はその睨んできた娘と面式がある。

彼女たちは、無言で聡史の横を通り抜けて、トイレから出てきた。

「ヘンタイ」

通り際に、聡史に向かって誰かが言った。

聡史が押し開いたドアの向こうには恭子の姿が見えた。

僕たちに気づいた彼女も、足早に聡史の横をすり抜けて廊下へ出

てきた。

恭子は僕と目を合わせないように、わざとソッポを向いたまま通り過ぎた。

聡史は無言で肩をすくめると、何も言わないまま廊下を歩き出した。

「おい、何やってんだよ」

「何って？」

「女子トイレのドア開けんのはヤバイだろう」

「あの状況なら、誰もなんも言わないよ」

聡史は少し機嫌が悪そうだったので、僕はそれ以上何も言わなかった。

屋上へ出ると、岩崎瑞穂の姿を見かけた。

彼女は、恭子と一番仲の良かった娘だ。

「岩崎」

僕は、聡史の代わりのつもりで彼女に尋ねた。

「何で恭子の事、いろんな噂が出てるんだ」

瑞穂は僕の顔をチラリと見て

「そんなの知らないよ」

大きな雲が陽差を遮ってゆっくりと動いているのが、陰として足元に映った。

「お前も、恭子をハブるのか？」

「なんであたしに言うの？」

「だって、お前、恭子と仲良かったじゃん」

瑞穂は途端に僕を見上げた。

「だいたい、こうなったのは、あんたが恭子をやり逃げしたりしたからじゃん」

「や、ヤリニゲ？」

「恭子はあると付き合えると思ってたんだよ」

「だって、あいつ勉強が忙しいって……」

「その気がなかったら、恭子みたいな娘がヤラせるわけないでしょ。」

あの娘は一年の時からあんたに惚れてたんだよ。それなのに、あんたはホイホイ他に女作って」

「ホイホイって……」

僕は自分が考えていた以上に、恭子を傷つけていたのだ。

僕は目に映る、自分が興味を持つ娘に夢中で、誰かを傷つけている事を考えなかった。

恭子には悪いとは思っていた。

彼女の処女を奪った挙句に、結局僕は榛菜に惹かれたのだから。

「ヤリニゲ」 瑞穂から発せられたその言葉は、複数の矢のように僕の心にグサグサと突き刺さった。

それは、心臓のずっと奥の方で痛みとして僕の内側をえぐった。

それまで、そんな風には考えなかった。

あの時、キスをしてきたのは彼女の方だったし、その後起こった出来事も、それから先の事を約束した行為ではなかったのだから。

しかし、恭子からしてみれば、僕は明らかにヤルだけヤッて逃げたも同然なのだ。

それが、彼女を変える引き金になったと言うのか……

瑞穂は、僕の身体を押しつけるようにして足早に屋上を後にした。困惑した表情で彼女の姿を見つめる僕を、聡史は同情とも哀れみともつかない、さらに複雑な表情で眺めていた。

◆第30話◆

昼休みが終わってから、僕は恭子を見る事が出来なかった。

僕のせいで彼女が変わってしまったなんていわれたら、どうしていいのか判らない。

どうすれば恭子は元の彼女に戻るのだろう。

僕はそんな事ばかりを考えながら、虚空を横切る飛行機雲を眺めていた。

あんなに真面目だった恭子が、当番の掃除もせずに教室を後にする。僕が掃除をサボっても、もう叱ってくれる彼女は何処にもいない。

校舎を出た時、恭子の姿を追いかける聡史を見た。

僕は、二人に気づかれないように距離を置いて歩いた。

駅で電車に乗る時は、直前までトイレの陰に隠れて、ドアが閉まる瞬間に先頭車両に滑り込む。

一瞬鞆がドアに挟まりそうになって、焦った。

聡史と恭子が乗った車両に近づくため、車内を歩いた。連結箇所窓から微かに二人の姿を見つけて、手前の車両に留まり様子を覗く。

聡史と恭子は並んでいるようだが、会話を交わしてる様子はない。池袋の地下道を抜けて東口から出ると聡史は恭子の腕を掴んだ。しかし、彼女は聡史の手を大きく振り払う。

こうして見ていると、痴話げんかをしたカップルのようにも見える。

聡史は結局そこまで恭子と離れた。

恭子は予備校へ行ったのだろうか。

僕は聡史にすら声をかけずに、西武線のホームへ向かった。

改札口を抜けた所で榛菜の姿を見かけた。

僕は少しだけ躊躇したが、追いついて声をかけた。

「よう」

「あ、ハルくん、今帰り？」

「ああ」

彼女は何時ものように微笑む。

僕の気持ちは前と変わっていないのだろうか。榛菜の事が好きなのだろうか。

「いったん家？」

「うん。どうしようかな」

彼女はベルリネッタのバックルームに着替えを幾つか置いている。

僕らよりも入りが遅い榛菜は、大抵家に寄って着替えるようだが、学校から直接来た時には店で着替えをするのだ。

もちろん、僕らも着替えはあるが彼女はウエイターではないので、自前の衣装なのだ。

「じゃあさ、今日はウチ来る？　一緒にバイクで送ってやるから」

「ほんと？」

榛菜は明るく笑った。

そうだ。彼女の本当の笑みはこれだ。さっきまでの笑みは違う。

彼女の明るい性格がそれを麻痺させていた。

気を使った笑みと本当の笑みを僕は混同して、危うく見失うところだった。

見失ってはいけない……見失いそうになって、僕は初めてそれに気がついた。

その日の榛菜のピアノは軽やかで、透き通った音色を終始奏でていた。

マスターは時折僕に視線を送っては何かを含んだ笑みを浮かべる。何が言いたいのかは判っていた。

彼女の奏でる音色は、僕とのバロメーターなのだ。それをマスターには気づかれてしまった。

いや、寧ろ僕がマスターから教わったと言ってもいいのかもしれない。

そして、僕は、何時までもこの澄んだ音色を聴きたいと思った。

バイトが終わって外へ出ると、少し先に上がった榛菜がまだ店の外にいた。

「あれ？ 迎え、まだ来ないの？」

「うん」

僕は時間つぶしに付き合って、彼女と一緒にいた。

「あたし、やっぱエロいのかな」

「なんで？」

榛菜は答える代わりに突然自分から僕に唇を重ねると、力いっぱいしがみ付いてきた。

彼女の吐息が熱かった。

久しぶりに榛菜の匂いを嗅いだ気がした。

リンゴのような、シナモンのような……

それは、微かな洗濯洗剤の残り香の中に漂う、穂のかに甘い清楚で不思議な匂い。

僕は、そっと彼女の華奢な身体に腕を回した。

「あたし、ずっとハル君とキスしたくて……」

彼女は僕から身体を離すと、そう言って少しだけ悲しい笑みを浮かべた。

何か言わなければ、そう思ってもなかなかうまい言葉は浮かばない。

僕の頭の中は、久しぶりに嗅いだ彼女の香りで満たされていた。

その時ヘッドライトが近づいて来て、僕たちの目の前で止まった。彼女の母親の車だった。

「本当はね、あたしがお母さんに電話したの。今日は少し上がりが遅いから、遅く迎えに来てって」

榛菜はそう言って微笑むと、車に近づいてドアを開けた。

「俺さあ……ハルの事、傷つけたりしてないかな？」

僕は不安だった。

恭子を知らぬ間に追い込んでいた自分の行動が、とてつもなく不安で、誰かを想う事が、想われる事が不安だった。

榛菜は首を横に振って

「そんなわけ無いじゃん」

手を振る榛菜の笑みは、何時もの明るく晴れやかなものだった。

僕は彼女の乗った車が完全に見えなくなってから、バイクに跨った。

◆第31話◆

朝の喧騒の最中、僕は練馬駅で聡史の姿を見かけた。

「聡史、朝っぱらのこんな所で何やってんだよ」

「おう、ちよつとな」

「ちよつとって、学校だろ？」

「ああ、行くよ」

聡史はそう言って、豊島園のある方角を見つめた。

「誰か待ってるのか？」

聡史は少しの間沈黙を続けたが

「恭子だよ」

「恭子？」

「あいつ、まだ来てねえ」

聡史はそう言って、ホームの端まで歩き出した。

僕も、思わず一緒に歩いて、到着したばかりの池袋行きに乗りそびれた。

「ずっと待ってたのか？」

「ああ、あいつヤッパリ今日も来ないのかな」

恭子は退院してから学校では完全に孤立している。

誰かが、彼女の入院の理由に関する噂を流したのだ。

それは、僕以外に知る者はいないと思っていたのに、いったい何処から出たのか。日常の中には不可解な事が何気なく転がっている。

彼女は次第に飛び飛びでしか登校して来なくなった。

「期末テストには出ると思ってたんだけどなあ」

聡史はそう言って、ホームの端でしゃがみこんだ。

今日から期末考査が始まるのだ。

聡史はどうしてわざわざこんな所まで恭子を迎えに来るような事をするのか。

「俺さあ、一年の時からアイツに気があったんだ」

聡史はぼそりと呟いた。

僕は、その小さな声に反応して、一瞬頭の中が真っ白になった。
「嘘だろ？」

聡史は小さく首を横に振った。

「でもアイツ、お前に気があるみたいだったからさ」

聡史は恭子の気持ちに気づいていたのか。それは、客観的に見る者の強みなのだろうか。

「じゃあ、何で他に女作ったりしてたんだよ」

「恭子みたいな女は一途だろ。それに、相手がお前じゃあな」

「だって、俺は榛菜と……」

「お前がハルちゃんとかくっ着けば、恭子も諦めが着くと思った」

聡史は立ち上がると

「でも、無理だよな。二年以上も同じ奴に片思いの奴が、そう簡単に諦めるわけ無いんだよな。俺自身がそうなんだから」

そう言って空を仰いだ。

聡史がこんな一途な奴だったなんて、知らなかった。

もっと適当で、見かけだけで女を選んで、ちゃらちゃらしてる奴だと思った。

そうだ、今まで付き合った女は、初めから本命では無かったのだ。だから長続きしなかったんだ。

陽差を仰ぐ聡史が、少しだけ眩しく見えた。

その時到着した電車から、恭子の姿が現れた。

真ん中の車両から現れた彼女を、聡史は見つけられないでいたのだ、僕は彼を促して池袋行きの電車に飛び乗った。

聡史は恭子が乗り込んだ車両に向かおうと、混み合った車内でもがいていたので

「池袋に着くまで無理だって」

そう言って彼の逸る気持ちを宥めた。

池袋の駅で聡史は恭子に駆け寄った。

彼女は僕たちの気配に振り返ると、怪訝な顔で彼を見つめていた。

「待ってたんだぜ」

「何で？」

恭子の応えは素っ気なかった。

「何でって、お前があんまり学校来ないからだろ。聡史は心配して……」

僕は、耐え切れずに後ろから会話に割り込んだ。

「あんたには関係ないでしょ」

恭子はそう言って無表情のまま、僕をチラリと見た。

その時の冷たい視線……僕は、恭子に「あんた」と初めて言われた気がした。もちろんそれは錯覚で、以前にもそう呼ばれた事は何度もあるはずだった。

それなのに、今は何て他人様な呼び方だろう。

彼女の姿だけがぽっかりとズームアウトして、急激に遠くに感じた。

「学校行くんだろ？」

聡史はめげずに会話を続けていた。

「当たり前でしょ、テストなんだから」

期末考査が、僅かに恭子の義務感を繋ぎとめて、学校へ足を運ばせているに違いない。

大通りを渡っている時に、チャイムの音が学校から聞こえていた。ホームルームには間に合わなかったが、何とか一時間目からテストには間に合いそうだった。

恭子が一向に走らないから、僕たちまでそれに付き合っただけで大遅刻だった。

「お前らなあ……」

一時間目のチャイムが鳴って直ぐに教室のドアを開けたが、担当

の教師は既にテスト用紙を配り始めていた。

僕は苦笑いを浮かべながら、ペコリと頭を下げて自分の席に着いた。

朝のバタバタした出来事で、一夜潰けたテストの知識の半分は飛んでしまった。

問題用紙をみて溜息を漏らしながら、ふと横を見ると、何時ものように解答用紙にすらすらと記入している恭子の姿が映った。

この瞬間だけは、昔の橘恭子を見ている気がした。

◆第32話◆

聡史とは小学校の時からのだちだった。中学一年の時に、僕は引越しによって転校したが、高校に入って再び彼と出会ったのだ。

何だかずいぶんカッコ着けになったものだと思ったが、聡史も僕を見てそう感じたらしい。

彼が恭子を思っていた事を打ち明けてきた事によって、そんな長い歴史のある僕たちの関係は急にギクシヤクし始めた。

聡史は知っている。僕が、恭子の処女を奪った事を。

この前屋上で瑞穂が口にした言葉を、傍で聞いていたから。

それでも聡史は僕に何も言わない。

彼がどう感じているのか僕には判らなくて、それが余計に聡史に対して引け目を感じる要因になるのだ。

もしかしたら、ギクシヤク感じているのは、僕の方だけなのかも知れないが……

僕は、恭子が入院した経緯を彼に話そうか迷った。

聡史には知る権利があるような気がしたから。

しかし、結局僕は話さなかった。

橘恭子のあられもない姿は、僕の心の金庫にしまって、大きな鍵をかけた。

期末考査最終日は、強い雨が降り荒れていた。まるで台風のような風が、傘を役に立たなくする。

下板橋の駅を降りて、学校までの道のりが一番大変だ。殆どの生徒は傘を差しているが、軒並み風に煽られて今にも飛ばされそうだし、横殴りに叩きつける雨と飛沫のように舞った水滴は、誰も逃れる事は出来なかった。

少し先に恭子の姿があった。

テスト期間は、やはり彼女も一日も休まずに登校してくる。

聡史は、さすがに練馬で待つ事はもうしなかったが、何時も彼女の事を気にしている様子だった。

教室に入ると、みんなの髪の毛は濡れそぼって、各々にタオルやハンカチで拭いていた。

僕も自分の席に座って、ホッと息をつく。

「スゲェ雨だよな」

さへきまてる

前の席に座る佐伯克が声をかけてきた。既に髪の毛が乾いている彼は、だいぶ前に教室に着いているのだろう。

「あ、ああ。マジやべえよ」

僕は、バンドナで頭をクシャクシャと拭きながら、何時もと変わらない口調で返す。

窓に叩きつける雨音は、テストが終わるまで続いていた。

聡史は教室内で困惑していた。

誰も話しかけない恭子に、一人で話しかける勇気が無いのだ。

その気持ちは僕にも判る。一緒にハブられたらシャレにならないし、大体どうしてあんな噂ごときで彼女がハブられるのか。僕たち男子には正直わからないのだ。

それでも、結局は多勢に無勢。他の女子からシカトされる事を恐れて、誰も恭子に声をかけられない。

それに、今の彼女自身が他人との接触を拒んでいるように見えるのも事実だ。

放課後は、部活に向かう者、帰る者それぞれがバラバラに校舎の中を行き交う。

明日から試験休みに入るというのに、僕の心は一向に晴れず、どんよりと厚い雲に覆われていた。

学校が休みになれば、当分の間恭子とも顔を会わせる事は無くなる。

ホッとしている自分とは別に、何だかこのままでは気が治まらない

い僕がいて、何だか指先に刺さった小さな棘が取れないまま、気にしないようにしても気にかかるような、そんな思いだった。

僕はクラスの仲間数人と池袋でボーリングをしていた。

聡史は、恭子を追いかけて行ったみたいだし、心のモヤモヤを何とか忘れたかった。

バイトが休みの今日、榛菜とは約束が無い。

僕は、自分が思っていた以上に不器用な性格なのか、恭子の事を気に掛けながら榛菜と楽しく過ごす事が出来ないようだ。

聡史がうまく恭子を捕まえてくれれば丸く収まるのに。そんな勝手な構想の中で、僕は何時の間にか成り行きを聡史一人に押し付けているのかもしれない。

ボーリングの帰り道、ゲーセンに入った仲間と別れて駅へ向かった。

雨上がりの地面はすっかり乾いて、厚い雲の隙間からは陽が照り付けて蒸し暑い空気だけが風に漂っていた。

交差点の向こうで車椅子を押す女性の姿が目に残った。

人混みの中で、そこだけがぼっかりとライトが当たったように僕の目に飛び込んできたのだ。

障害者の乗る車椅子に手を掛けているのは榛菜だった。

彼を見下ろしながら話す榛菜の仕草が、何だかとても親しげに映った。

横断歩道の信号が青になった時、榛菜は初めて正面に立つ僕に気が付いた。

彼女はゆっくりと車椅子を押しながら、笑顔で僕に手を振った。

何故、どうして自分がそんな態度を取ったのか僕にも判らない。

僕は、素知らぬ顔をして彼女とすれ違い、横断歩道を渡りきった。

「どうしたの？ 知り合い？」

「えっ？ うん。似てたけど違ってた」

車椅子の男と会話をする榛菜の声が、周りの喧騒を掻き分けて僕の耳に届いていた。

彼女が誰か他の男と親しげに話す姿は、バイトの時以外で初めて見た。

僕は嫉妬したのか……

片脚の無い彼女と親しく付き合っているのは自分だけだと勝手に思い込んでいた。

僕だけが、彼女にとって特別な男だと。僕しかないのだと。

彼女の障害を優しく包み込んで、労わり、笑顔を交し合うのは僕だけだと思うことで、僕は彼女に対して優位に立った気になっていたのかもしれない。

しかし、車椅子の男と話していた彼女は、何時もの明るい笑顔だった。

あの笑顔は僕だけの特別ではなかった。

しかも、車椅子の男は何だか爽やかで、優しい眼差しで榛菜を見ていた。

車椅子のくせに……

僕は思わず歩道の真ん中で立ち止まった。

行き交う人波の雑踏が、目の前でグルグル回る気がした。

何だか急に自分が恥ずかしくなった。

僕は偽善を装って榛菜と付き合っているのだろうか。

僕は、片脚の無い彼女をいたる場面で庇いながら、本当はそんな自分に酔っていただけなのか。

いや、違う。そんなじゃない。

彼女が好きだから、単純に今見た光景に嫉妬しただけだ。

あの車椅子の男は、榛菜とどういう関係なのだろう。

振り返ると、榛菜の押した車椅子は区役所の方へゆっくりと進んで行くのが、小さく見えた。

何だか見えるその姿以上に、彼女が遠くに感じた。

◆第33話◆

学校が試験休みに入った。

聡史はどうしているだろう。

恭子はどうしただろう。

榛菜は、昨日、あの後何処へ行っただろう。

僕は、他人の事ばかり考えて、自分はもうどうしたらいいのか判らないままバイクを走らせた。

心の苛立ちが、自然にアクセルを大きく開けさせた。

青梅街道は相変わらずトラックの群れが連なって中央車線を塞いでいた。

一車線分の幅が狭いこの道路では、すり抜けがやり難い。

それでも僕は、二車線の真ん中を縫う様にして、どんどん前に出た。

大型トラックの大きな車輪が目の前でアスファルトを転がっている。

トラックは中央よりの車線を走るのがこの街道のマナーで、その為に比較的左の車線に空きが出来る。

すり抜けをしては、列の空いた車線に身を置き、前に車が近づいてくると再びすり抜けて前にでる事を繰り返していた。

右側のトラックのウインカーが突然点滅した。

僕は慌てて。アクセルを開けて前にでる。

右折車両がいたのだ。それをよける為に、トラックは左に車線変更して来た。

危なくトラックと接触するところだった。

こうして走る為の思考を巡らしていれば、余計なモヤモヤは忘れられた。

僕は、どうして昨日、榛菜にあんな態度を取ってしまったんだ。

たかが、誰かといただけじゃないか……しかも、相手は車椅子に乗った障害者だ。

僕の頭の中には、再び余計な事が駆け巡った。
真正面……見ているはずなのに見えていなかった。
右折車が目の前に出てきた。

「バカやろう」

僕はフロントブレーキのレバーを強く握り、同時にリヤブレーキのペダルを命イッパイ踏みつけた。

アクセルを戻すのが遅れた。そして、ブレーキを掛けるのも。

リヤタイヤが一瞬ロックした。

もう乗用車は目の前だった。

かわせない。

避けられない。

減速力が、距離に喰われてゆく。

スローモーションでそれが近づいて来る。

僕のバイクは全然車速が落ちていない。

ドライバーの顔が見えた。スゴイ厚化粧でシワの溝を埋めた、エルメスのブラウスを着たオバチャンだ……なんで、こんな所で出てくるかな。

真っ白なメルセデスは現行型のS550か。

ハンドルにしがみ付いたまま目を見開いて僕を見つめていたオバチャンは、いきなり目をつぶった。

次の瞬間ベンツのシンボルマークは、ピントが追いつかないほどのアップで僕の目の前にあった。

ドンツと鈍い音がして全身に強い衝撃が走り、僕はバイクから投げ出された。

ボンネットに自分の頭がぶつかったのは判った。身体のアちこちが何かに擦れ、そしてぶつかった。

その瞬間、身体に痛みはない。

複雑に絡み合う音と衝撃、インパクトの瞬間は目をつぶってしま

ったので、一瞬記憶は途切れる。

ドシャ！

何の音？ 自分は何にぶつかって停まったのか……

僕の身体はベンツのフロントガラスにめり込んで勢いを停めた。頭がもうろうとして、何も考えられなかった。

チラリと見えた空は蒼かった。

バイクはどうなった？ まだローンが十回は残っている。

暗闇に呑み込まれる意識の中で、僕はそればかり考えていた。

◆第34話◆

足が無い……僕の右足。

「俺の右足は何処だ」

右足は膝の上辺りで丸い肉の塊となって終わっている。まるで、初めからその先が無かったかのように。

僕は驚愕と絶望の中で考えた。

まあ、いいか。これで榛菜と対等だ。知らず知らずのうちに、彼女を哀れんで、同情してしまう事も無い。お互い、片脚が無いもの同士、同じ立場で付き合っていける。

僕も義足を着けて、榛菜とお互いを支えあいながら生きていける。お袋、悲しむかな……オヤジは怒るだろうか。

恭子はこれで僕を解放してくれるだろうか。

しかし、見舞いに来た榛菜は軽やかに歩いてベッドの横に立った。ミニスカートから覗く左脚にも包帯などは巻いていない。

「ハル、左脚……」

「うん。移植がうまく行って、元通りの身体になったの。これで、あたしも健常者だわ」

榛菜はそう言って笑うと

「これからデートなんだ。じゃあね」

そう言って跳ねるように歩いて病室から出て行く。

「榛菜」

僕の声はもう届かない。

廊下に男が立っているのが見えた。

爽やかな笑みで榛菜を促すそいつは、あの時の車椅子の男。彼も自分の脚で立っていた。

「榛菜、行くな」

僕は立ち上がりうとして右足を踏み出すが、短い太ももだけが空を切る。

無いはずの右足が痛んだ。

「ううっ……」

僕はベッドの上で目を見開いた。

勢いよく布団を跳ね除けて状態を起こすと、目の前の若い看護師が「キャッ」と、小さな悲鳴を上げた。

「びっくりしたあ。大丈夫？」

看護師は直ぐに笑みを浮かべて僕に言った。

僕は状況が呑み込めずに辺りを見渡すが、半分以上閉められたベッドサイドのカーテンが視界を塞いでいた。

僕は我に帰って、自分の右足に視線を落とす。

「ある……」

「事故の事覚えてる？」

呆然と自分の脚を見つめる僕に、看護師は訊いた。

僕が小さく頷くと

「脛スネにヒビが入ってるから、しばらく安静ね」

看護師はそう言って、病室を出て行った。

脛スネにヒビ？ それだけ……

僕は急に全身が軋むように痛い事に気づいて

「イテテテテ」と、身体を横たえた。

＊ ＊ ＊

翌日、見覚えのあるオバサンが、小奇麗なスーツの男性と一緒に僕の病室を訪れた。

手には大きな菓子折りとバスケットに入った果物のお見舞いセツトを持っている。

僕は、そのオバサンを何処で見たのか思い出せずに見ていた。

「お怪我は大丈夫ですか？」

ベッドの傍まで来たそのオバサンは、凄い化粧の臭いがした。

「ああ」

僕は思わず声を上げた。

僕がバイクでぶつかったあの時、フロントガラス越しに見えた顔だ。

「保障の方は、私どもで全て賄いますのでご安心下さい」

スーツの男性が、作ったような営業スマイルでそう言った。

「はあ……」

僕は、何となく頷いて、そして自分にとって一番気にかかることを聞いた。

「あの、俺のバイクはどうなりました？」

「全損と言う事です」

スーツの男は相変わらず笑顔を崩さずに

「こちらで同じものをご用意させていただきますのでご安心ください」

僕は再び

「はあ……」と返事をした。

◆第35話◆

夕方になって聡史が見舞いに来た。

僕の携帯が繋がらない為、家に電話をしたら事故の事を聞いたらしい。

「事故って聞いてビックリしたぜ」

聡史はそう言いながら、あのオバサンが持ってきた洋菓子セットを物色していた。

僕は、その遠慮の無い彼の仕草にホッとしていた。

「信雄が東工の連中と喧嘩してさ」

「東工と？」

東工とは、かなり高派な工業高校で、僕らの中では何かと敬遠している。

「で？ どうした」

「ボコボコにやられて、逃げたって」

聡史は人事ながら、そう言って笑った。

「何だか、東工の奴の女に手を出したらしい」

「そりゃ、やばいよ」

僕も思わず笑った。

夕方とは言え、窓の外はまだ陽差でいっぱいだった。

聡史は、少しだけ真顔を作ると

「そう言えば昨日、新宿でハルちゃんに会ったぞ」

「そうか」

僕は素っ気無く言った。

「何だか、元気なかったなあ」

「彼女、新宿で何を？」

「ああ、病院の帰りだって言ってたな」

おそらく、義足のメンテナンスだろう。

聡史は真面目な顔のまま

「彼女、義足なんだってな」

「誰がそれを？」

「ハルちゃんさ。昨日会った時、そのメンテナンスだって」

聡史は自分が買って来たミネラルウォーターを口にしながら

「俺も、お前に聞いて知ってると思ってるらしい……俺、ビックリしてさ」

「ああ、彼女に無断で他の人に言っているのか考えてたんだ」

「そうだよな……」

聡史はそう言って少しだけ笑ったが、直ぐに表情を曇らせて

「左脚、まったく無いのか？」

「いや、膝下なんだ」

「そうか……」

彼は息をついて窓の外に視線を向けると

「お前、案外偉いよな」

「なんで？」

「だって、障害持った娘と真剣に付き合えるなんて……やっぱ偉いよ」

僕は偉くなんか無い。その娘が誰か他の男と一緒にだけでヤキモチを焼いてシカトする程度の男だ。

黙りこくった僕に、聡史は

「黙っててくれたんだねって、彼女喜んでたぞ」

「そうか」

「それでも、なんか元気なかったんだよな。彼女」

聡史はそう言って一人で首を傾げながら、再びボトルに入った水を飲んだ。

「入院の事、ハルちゃんは知ってるんだろ」

「たぶんな」

「見舞い来たのか？」

「いや、昨日の今日だしな」

「そうだよな。俺が会ったのは、午前中だからまだ知らなかっただろうし」

聡史は冗談交じりで

「ちょうど、お前がベンツに喧嘩売ってる時かもな」

聡史はその後またわいのない話題を次々と出して僕を笑わせたが、恭子の話は出てこなかった。

ふと目を覚ますと窓にはカーテンがかかり、隙間から覗く外の風景はほの暗く変わっていた。

辺りには病院食独特の匂いが立ち込めている。

時計を見ると六時半を過ぎたところだ。

廊下では食事のコンテナが運ばれてくる音がして、歩ける者はそれを取りに動き回っている。

そして僕のベッドには、突っ伏して眠っている聡史がいた。

帰ればいいのに、何時の間にか眠ってしまった僕に付き合って、聡史は自分も眠ってしまったのだ。

そう言えば、僕も聡史の部屋に入り浸って、思わず寝てしまう事がある。

そんな僕たちは、親友なのだろうか。

何をするでもなく、会話の途中で居眠りして、そのまま一緒に眠ってしまうのは、それだけお互いに気を許している証拠なのだろう。

僕はティッシュペーパーを丸めて、聡史の顔にぶつけた。

三個目が命中した時に、彼はようやく目を覚まして、寝ぼけ眼で辺りを見回した。

「もうすぐ七時だぞ」

僕の声に聡史は大きく伸びをしながら

「お前が寝ちゃったから、俺までつい寝ちゃったよ」

「帰ればよかったろ」

「黙って帰ったら悪いかと思ってさ」

僕は、恭子がどうしてるか訊こうとしたが、やっぱりやめた。

間も無く僕に食事が運ばれて来たので、聡史は椅子から立ち上がった。

「ハルちゃんに連絡しておこうか？」

「いや、入院の事はバイト先で聞いているだろうから」

「そうか」

彼はさりげない笑みを浮かべると

「じゃあ、またな」

そう言っ、病室を出て行った。

◆第36話◆

入院して四日目、僕は歩き回っていい許可が出た。それでも、右足には簡易ギブスが着けられて膝と足首は固定されていた。

病院内を気晴らしに散歩すると、様々な人がいる。

僕は中庭を横切る通路の非常扉から外へ出ると、コンクリートに腰をおろした。

夏の陽差を浴びたコンクリートは、思いの外熱かった。

僕は松葉杖を使って歩くことで、榛菜の気持ちを少しだけ感じる事が出来た。

でもここは病院で、松葉杖を着いて歩く僕を誰もが優先してくれる。

誰もぶつかったりはしないし、その危険性も皆無に近い。

僕は聡史が買ってきてくれたメンソールのタバコに火をつけて、ゆっくりと煙を吸い込んだ。

「コラッ！」

後ろから聞こえた声に、僕は慌ててタバコを身体の陰に隠して振り返った。

そこに立っていたのは、榛菜だった。

僕は彼女の姿を見たとき、何だか物凄い嬉しさと安堵の思いが込み上げて来た。

不安だった。

彼女は見舞いに来ないかもしれないと思っていた。

僕の入院は、ベルリネッタへ行けば必然的に知る事だろう。

しかし、池袋ですれ違った時の僕の行動が、彼女にどう感じさせたか判らないし、そのまま過ぎてしまった時間が、二人の距離をどんどん離していくように感じていた。

「なんだ、ハルか」

僕は感情を押し殺して、素っ気無い素振りでそう言った。

彼女は一瞬ガッカリした顔を笑顔に戻して

「ビックリしたくせに」

そう言って、僕の隣に「よいしょ」と腰掛けた。

地べたに座るのは立ち上がるのも大変だから苦手なはずなのに、
榛菜は臆する事なく座った。

僕は、一度隠したタバコを再び啜えた。

「今日も暑いね」

彼女はそう言って、陽差の注ぐ空を仰いで笑った。

「一人？」

「うん。そうだよ」

彼女は怪訝そうな笑みを浮かべ「何で？」

「いや、ナニで来たの？」

「電車だよ」

榛菜は当たり前のようにそう言うと、持っていたコンビニ袋から
コーラを出した。

「途中のコンビニで買ってきた。差し入れ」

コーラを差し出しながら「気が利くでしょ」

榛菜の買ってきたコーラはぬるくなっていた。

「なんか、ぬる」

「しょうがないでしょ」

彼女はそう言って、ほっぺたを膨らました。

僕には判っていた。

大泉の駅からこの病院までは少し歩く。少しとは健常者レベルの
話だ。

彼女が駅前のコンビニでこれを買って、この暑さの中ここまで歩
くには、冷たいコーラがぬるくなるくらいの時間がかかったと言う
事だ。

僕はそれを承知で悪態をついて彼女に甘えた。

「コーラならここの自販機にもあるぜ」

「だってさあ」

彼女は再びふくれっ面を見せたが

「でも、サンキュウな」

僕の言葉に、榛菜はあっという間に笑顔に戻る。

僕たちはお互いに松葉杖を付きながら、空いた手を繋いで院内を散歩した。

まさしく、僕が夢の中で開き直った時に描いた風景そのものだ。

彼女の左脚は、確かに今まで通り義足が入っている。

僕は、何時も以上に彼女の左脚を盗み観た。

「何だか面白いね」

「何が？」

「あたしが左で、ハルくんが右だなんてさ」

榛菜は相変わらず慣れた足取りだったが、今の僕はなれない松葉杖に足取りはギクシャクする。

今は明らかに榛菜の歩くペースの方が僕よりも早い。

しかし彼女はうまくスピードをコントロールして、僕の足取りに合わせていた。

あれだけ痛々しく感じた彼女の歩く姿が、今は微塵も感じない。

僕の方が支えられているのだから。

「あ、アイス食いたい」

一階の小さな休憩スペースにアイスの自販機を見つけた榛菜は、途端に目を輝かせた。

「さっきジュース飲んだろ」

「でも食べたい」

僕は彼女の些細なわがままが、何だか嬉しかった。

何一つ彼女に勝る事が出来ない今、わがまま一つ聞いてやる事が唯一僕に出来ることだ。

古いベンチに腰掛けて、二人でアイスを食べた。

榛菜は子供のような笑みを浮かべていた。

もしかして、彼女には今の僕の気持ちが判るのかもしれない。

身体の不自由さを初めて経験した時の悲壮感。僕のそれはきっと、

彼女の経験の比ではないだろう。

回復すれば、この足は再び自由に動くのだから。治療中の不自由さの先には、確かな希望があるのだから。

僕は彼女の笑顔を見ていると目の奥が熱くなって、喉の奥に何か窮屈なものが詰まったような気がして、アイスを飲み込むのにも苦労した。

◆第37話◆

榛菜も当然学校は試験休みに入っているわけで、彼女は毎日午前中か午後の早い時間に見舞いに来た。

「どっか、遊びに行かないのか？」

「え？ あたし？」

ベッドサイドの小さなテレビを見ていた榛菜は、ポカンとして振り向いた。

「そう言えば、亜貴ちゃんは元気？」

「うん。元気だよ。最近彼氏が出来たみたい」

榛菜はそう言って笑うと

「だから、ハル君が早く退院してくれないと、榛菜はどこも行けないんだよ」

彼女は、丸椅子に座って、足をブラブラさせた。

「あの……」

「ん？」

「あの……車椅子の人は？」

榛菜は一瞬誰のことだか判らない様子だった。

「池袋で会った」

「ああ、飯塚さん」

彼女はそう言って、僕の腕を軽く掴んだ。

そして、ふと思いい出したように顔を膨らませると

「そう言えば、池袋でハルくんあたしの事シカトしたよね。あれ、

超ショックだったよ」

「いや、あれは……ほら、声かけるのも悪いかと思って」

「あたしが手を振ったのに？」

僕はすっかり言葉に詰まってしまった。

「ねえ、妬いた？」

彼女は再び僕の腕を掴んだ。

「べ、べつにいい」

「ふうん」

榛菜はイタズラっぽい笑顔を見せると

「あたし、飯塚さんに付き合ってくれて言われたんだ」

僕は、急に鼓動が高鳴るのを感じた、

頭に血流が注ぎ込まれて、顔全体が熱くなった。

「それで？」

「どうしたらいいかな？」

「俺に訊くなよ」

榛菜は僕の目を真っ直ぐに見つめた。

窓から注ぐ陽光を吸い込んで、キラキラしていた。僕はその目を長くは見ていられなかった。

僕らの付き合いには、告白などの明確な境界線がない……

「榛菜のいいようにすればいいよ」

僕は窓に視線を移しながら、心にも無い事を言った。

「そんなのウソに決まってるじゃん」

榛菜はそう言って立ち上がると、花瓶を持って

「お水替えてくる」

「ウソって、何が？」

僕は彼女の背中に問いかけた。

「あの人は、ボランティアを手伝った時に知り合ったの。あの日駅で偶然会って、区役所に用事があるって言うから、案内してあげただけだよ」

そう言うってから、榛菜は病室を出て行った。

夕方になって、聡史が来た。

一階にある、何時もの非常口のコンクリートに腰掛けて一緒にタバコを吸った。

僕は恭子と彼がどうなっているか、密かに気にしていた。

「お前、恭子とどうなった？」

僕は出来るだけさりげなく、中庭の木々に視線を注いだまま言った。

「それがさあ、全然判んないんだよ」

「判んないって？」

「携帯にも出ないし、塾でも掴まらないんだ」

聡史はそう言って、後ろに手を着きながら空を見上げた。

僕は、フツと笑って

「お前、まるでストーカーだな」

「どうせなら、もっと優秀なストーカーになりてえよ」

「家には行ってみた？」

「ああ、何度か行ってみたけど、留守なのか居留守なのか音沙汰無し」

聡史はそう言いながら、溜息と一緒に青空に向かって煙を吐き出した。

僕は、恭子がドラッグに手を出していた事実を聡史に話した。彼女が路上で放置されていた時の状況は話さなかったが……

「ああ、こんなところで、タバコ吸って。不良少年ね」

僕は、また榛菜かと一瞬思った。

しかし、振り返るとそこには僕の病室の担当看護師が立っていた。

「いっちょ前に、携帯灰皿なんて持って」

「いちお、マナーは守るほうなんで」

聡史が笑って返した。

特に咎めるつもりは無いらしい彼女は、僕たちに笑顔を返すとそのまま通路を歩いていった。

◆第38話◆

僕は髪を洗おうと共用の洗面所に来ていた。浴室の近くに在る洗面台には、洗髪が出来る大きな洗面台があり、シャワーも着いている。

めんどくさいと思いながらも、日に日にボサボサになる頭にも限界が来たのだ。

一つ息をついてお湯を出す。

隣では、髪を洗い終えたオバサンが、ドライヤーでゴーゴーと乾かしているところだった。

「シャンプーはいかがですか？」

その声に振り返ると、榛菜が洗面所に顔を覗かせていた。

「あれ、もう来たの？」

「うん。今部屋に行ったら、頭洗いに行ったみたいだって、向かいのおじさんが」

榛菜はそう言って洗面所に入ってくると

「ほら。あたしが洗ってあげるよ」

そう言ってシャンプーの小さなボトルを手を取った。

「いや、大丈夫だよ」

何だか照れてそう言った僕に

「いいからいいから」

彼女に促されながら、洗面台に頭を伏せる。

シャワーでお湯をかけられて、彼女の指が僕の頭を這い回ると、直ぐに泡立ちが始まった。

何時もは鍵盤の上で跳ね回る彼女の指が、今は僕の髪の中で踊る。しなやかで、柔らかくて張りのある小さな指先は、あまりにも心地よかった。

「客様、かゆい所は御座いますか？」

彼女は陽気にそんな冗談を言ったりする。

「なんか、人の髪って気持ちいいね」

「そうか？ お前の指も気持ちいいよ」

「何か、言い方がちょっとやらしいよ」

そう言って笑う今日の榛菜は、やけに機嫌が良かった。

リンスを流している

「あらあ、羨ましいわあ」

洗面所に入ってきたオバサンが声をかけてきた。

僕は思わず半分だけ顔を上げて、苦笑しながら小さく首だけの会釈をする。まったく知らない人だった。

さっと髪を乾かして、中庭の見える通路まで散歩に歩いた。

非常口から外へでると、熱い風が洗いざらしの髪に吹き付けて心地よかった。

「その手揚げ、何？」

榛菜は少し大きめのトートバックを手に使っていた。

「ハルくん気分転換してあげようと思ってさ」

榛菜はそう言って、バックから何かを取り出した。

それは物凄く見覚えのあるものだった。

「ぴ、ピアノカ？」

榛菜は笑顔でそれを組み立てると

「正式には鍵盤ハーモニカって言うんだよ」

「いや、それは知ってるけど……」

榛菜は容赦なくそれを弾き始めた。

そして僕は、思わず驚いた。

僕の記憶にある音色とは全く違っていたのだ。

もちろん、僕の記憶にあるのは小学生のドシロウトが奏でるものなのだが……吹き方か、鍵盤の弾き方か、おそらくその両方だとは思いますが、それは充分に楽器と言える音だった。

なんだかその音色はちょっぴりレトロで心地いい。

「あら、面白いもの吹いてるわね」

通りかかった僕の部屋の担当看護師が、声をかけてきた。

「あ、ここで吹いたらマズかったですか？」

僕は慌てて彼女に訊いた。

「ううん。大丈夫よ」

彼女はそう言って笑うと

「カノジョ、ピアニスト？」

「いや、そう言うわけじゃ」

僕は、洗いざらしの頭を思わずクシャクシャとかきあげる。

自分で返した言葉が「カノジョ」に対してなのか「ピアニスト」に対してなのか紛らわしかったからだ。

「ねえねえ、ピアニカ吹いてるよ」

看護師は、通りすがりの別の看護師を呼び止めた。

「へえ、何でも弾けるの？」

「知ってれば、たいがいは」

榛菜はうっかりそう言って笑顔を返した。

「あ、ねえねえ、面白いものあるよ」

再び通りすがりの看護師が呼び止められて寄って来た。

「ええ、じゃあ、スマップ弾いて」

「ええ、あたしコブクロがイイなあ」

「じゃあ順番にしよう」

「冬ソナやって」

若い看護師たちは、意外とミーハーだった……

◆第38話◆（後書き）

初めにUPしました38話は39話へ修正いたしました。

◆第39話◆

その日は、梅雨のラストスパートのように、激しい雨が降っていた。

榛菜は当然来られないだろうと思った。

しかし、彼女は身体を半分濡らして、何時ものように僕の病室へやって来た。

「バカだな。こんな雨の中、来なくていいんだよ」

彼女は僕が差し出したタオルで髪の毛を拭いていた。

「だって、今しか無いじゃん」

「何が？」

「あたしが、ハルくんに何でもしてあげられるのは、今しかじゃない。怪我が治れば、またハルくんは健常者で、あたしは障害者。何かあると、ハルくんに助けられて、人混みで守ってもらって……」

自分を障害者と呼ぶ彼女を初めて見た。

解ってはいても、その口から発せられた言葉は痛々しかった。

この四人部屋に今入っているのは、僕の向かい側に一人、おじいさんだけだった。その人も、リハビリの為に今は部屋を出ていた。四人部屋の広い空間に、窓の外から聞こえる激しい雨音だけが鳴り響いていた。

「俺さあ、ここに運ばれた時、夢を見たんだ」

「夢？」

「右脚が無かった」

榛菜は僕を見つめていた。

「無かったって、ハルくんの脚が？」

僕は頷いて、そして続けた。

「すげえショックだった。どうしていいか解んなかった。でも、夢の中の俺がふと思ったんだ。これで榛菜と一緒にだって。何の気兼ねもなく、榛菜と付き合っていけるって」

僕を見つめる榛菜の視線が、僕の心の中まで入って来るような気がした。

「やっと、榛菜の気持ちが解るんだ。て思った」

その時、榛菜は僕の腕を強く掴んだ。

「そんなの、解んなくていいんだよ」

彼女はあつという間に、目にイッパイの涙を溜めていた。

長い睫毛が瞬きをした瞬間に、それは儚げに彼女の頬を伝って布団に零れ落ちた。

「そんな事解ってもらっても、誰かの脚が無くなるのはヤダよ。ハルくんの脚が無くなるのはイヤダ」

僕の腕を掴む彼女の力は身体の芯まで伝わって、僕の心を震わした。

夏用のパジャマの上から、榛菜の小さな爪が食い込んだ。

「あたし、ハルくんが事故で脚を怪我したって聞いて、怖かった。すごく怖かったよ」

腕に食い込んだ彼女の爪のイタミは神経伝達を無視して、僕の胸の中へ伝わり直接こころのイタミに変わった。

「どうしてそんなこと言うの……いつもそんな事考えてるの？ あたしの片脚が無い事に気兼ねしてるの？」

彼女の瞳から溢れ出る涙は、次から次へと頬を伝った。

「あたしと付き合うのは苦しい？」

僕はどう説明していいのか解らなかった。

苦しい訳ではない。いや、榛菜を好きな気持ちは苦しさに似ているのか。

違う……僕は彼女と一緒にいて苦しいと思った事は一度もないし、榛菜の脚の不自由さを苦痛に感じた事も無い。

この気持ちはいったい何だ。

僕は榛菜の憂いな視線を受け止めて、そしてひとつだけ気がついたことがある。

……そうか、僕はこんなに人を好きになった事が今まで無かった

んだ。

あまりにも人を好きになると、こころは苦しいんだ。

「ごめん……ただの夢の話だよ」

僕は、榛菜の濡れた頬に手を当てて言った。

誰かの涙に触れたのは初めてだった。

瞳から零れ出るその雫は、生き物のように情熱を佩びていた。

「ハルこそ、俺に助けられてるなんて思うなよ。俺、普段そんな事思ったことも無い」

榛菜は鼻を吸りながらコクリと頷いた。

そうだ、僕は今まで何も考えずに生きてきて、彼女に出会ったことで些細な事も考えるようになった。

助けられているのは、僕の方かもしれないのだから。

向かい側のおじいさんがリハビリから帰ってきたのを見て、榛菜は慌てて涙を拭いながら窓の方を向くと、ベッドサイドのBOXテイスシュをむしり取った。

相変わらず窓を叩く雨音が鳴り響いていた。

◆第40話◆

榛菜は僕が食べる病院食を前に、サンドイッチを頬張る。

僕は彼女の黙々と口を動かして食べる姿が好きだ。昔飼っていたミニうさぎを思い出してしまうのだ。

一緒に売店にお昼を買いに行く頃には、彼女の機嫌はすっかり直っていた。

「あ、ヨーグルト食べたい」

「俺のに付いてくるやつやるよ」

「えー、食事についてくるのはプレーンでしょ。このラズベリーヨーグルトがいい」

榛菜はそう言ってニコニコと子供のような笑顔でヨーグルトを手にした。

雨が小降りになるのを待って、僕は彼女を正面玄関まで送っていた。

「じゃあ、またね」

榛菜はそう言って何時もの笑顔で手を振った。

「あのさ、あの夢は、ただの夢だから。気にすんなよ」

「うん。もう気にしてない」

彼女はそう言って笑うと

「ハルくんもね」

「えっ？」

「あたし、さっきトイレで考えたんだけど」

「トイレ？」

「夢での自分を一番気にしてたのは、ハルくんだったのかもね」
そうかもしれない。

あの夢の中での僕の考えはあまりにも悲観的で潔くて、普段の自

分とは違っていた。その自分自身に、僕は懸念を抱いている。

榛菜の脚にストレスを感じている自分が、普段からこの心の何処かにいると思うと怖くなる。

それを認識している自分が怖くなる。

榛菜はゆつくりと玄関を出てから、傘を開いた。

僕は、あの夢の中の榛菜に生身の左脚があつた事は言わなかった。まるで、それを僕が望んでいるかのように思われるのが嫌だったから。

「気をつけて帰れよ」

僕の言葉に、彼女は振り返って再び小さく手を振った。

榛菜は、彼女なりに障害者である自分に引け目を感じている。普段、あまりにもそんな素振りが無いから忘れてしまいが、それは確かなことだ。

いや、普段はそんな事忘れていた方がいい。きっと彼女もそうなのだ。

そして、何かのきっかけでそれを思い出してしまうのは仕方の無い事かも知れない。

もしかしたら、時々思い出した方がいいのだろうか。

それで、お互いの大切さを確認できるのなら、それでいいのかもしれない。

僕は部屋に戻るのが面倒で、非常階段の上り口でタバコを吸いながら、ぼんやりと低い空を眺めていた。

雨はもうだいたい小降りになって、今は雨音さえ聞こえない。

「こんにちは」

僕は聞き覚えのある声に振り返った。

そこには、恭子が立っていた。

「恭子」

「試験休み早々、入院したって聞いてさ」

彼女の笑顔の隣にはもう一人の姿があった。

「キミは」

それは榛菜の弟の秋夫だった。

「どうして恭子とキミが？」

「池袋で知り合ったの。榛菜さんの弟さんなんだってね。あまりの偶然でビックリしちゃった」

恭子はそう言って、笑みを浮かべた。

「あんたが姉貴の彼氏？」

秋夫が言った。

「いや、別にそんなんじゃない」

「あら、結局榛菜さんも遊びなの？」

恭子が意地悪そうに、言葉を挟んだ。

「そういうんじゃないよ」

僕は慌てて返した。

「あたし、今秋夫君にいろいろ教えてるの」

「教えてるって、何を？」

「陽彦に教えてもらった事」

「俺が恭子に教えた事？」

恭子は再び小さく嗤^{わら}った。

跳ね上がった眉のメイクと、目の周りを覆うラメの入ったパウダーシャドウが、まるっきり彼女を悪女として映し出していた。

◆第41話◆

「姉貴とは、どうしてるの？」

秋夫は不意に言った。

「はあ？ 何を」

「あの脚、どうしてるの？ 外すの、そのまま持ち上げるの？」

僕は彼の質問の意味が判った途端、頭に血が上って自分では抑えられなかった。

彼女の苦悩、彼女の憂いな微笑み、彼女の熱い涙。

そのどれもが、秋夫には判らないのか……

一瞬の出来事だった。

その行動を考える暇など無かった。

僕は彼を、秋夫を殴っていた。

ちょうど頬骨にあたって、僕の拳にも鈍い痛みが走った。

秋夫は勢いよく通路に転がった。

「ちよっと、乱暴しないでよ」

恭子が僕の腕を強く掴んだ。その時だけは、昔の恭子の顔だった。

「何しに來たんだよ」

僕は恭子の真意がまるで判らなかった。そして、彼女が怖かった。

「ちよっとお見舞いに來ただけよ」

「秋夫はまだ中学生だぞ」

「だから何？」

「秋夫をどうするつもりだ」

「別にどうもしないよ。あんたの変わりに、一緒に気持ちいい事してるだけじゃん」

僕は起き上がった秋夫に向かって息をつく

「お前の姉さんが何で脚を無くしたのか、お前は考えた事無いのか？」

秋夫は薄っすらと嗤った。

「俺がいくら後悔したって、俺がいくら優等生になったって、ネエちゃんの脚が戻る訳じゃないだろ」

秋夫はそう言って、僕が殴った頬に手を当てた。

「お前、知ってたのか？」

「前に、リビングでオヤジと母さんが話してるのを聞いた」

秋夫は知っていた。

自分を守る為に、榛菜が片脚を無くした事を。

それを知った時、秋夫はどう思ったのだろうか。彼なりに苦悩していたのだろうか。

今の僕には、彼の身になって考える事など出来なかった。

「もう。行こうよ」

秋夫はそう言って、恭子を促した。

「こんだけ人を殴れんだから、だいぶ怪我はよくなったんだね」

秋夫はそう言い残すと、恭子と共に廊下を歩いていった。

僕は、右手の拳がまだ痛むのを思い出して、左手でそっと摩った。厚い雲の波間から、ほんの少しだけ覗いた夕日が、西の空を僅かにあんず色に染めていた。

僕は自分の病室へ戻ると、ベッドの上で天井を見上げていた。

パネルボードの穴がやたらと気になって、一枚のボードにいったい幾つの穴が開いているのか数えてみた。

端から数えるも、途中で目が錯覚を起こして何処まで数えたのか解らなくなってしまう、僕は何度も同じ事を繰り返した。

そのうちイライラして止めてしまった為、結局あの天井のパネル一枚に、幾つの穴が開いているのかは解らなかった。

秋夫は、榛菜の怪我が自分にも責任があると知った時、どう思ったのだろう。

自分を責めたのだろうか。それとも、既にグレていた彼は、そんな事どうでもいいと思ったのだろうか。

いや、あいつはあの時「いくら後悔したって」そう言った。きつと、自分の記憶にすら無い行動を、悔いたに違いない。

恭子が秋夫と出会ったのは本当に偶然なのだろうか。

彼女は化粧をすることによってキレイになるどころか、まるで魔性の女に変貌してしまった気がして、僕は先行きの判らない不安に囚われた。

僕はなんだか異常に榛菜の声が聞きたくて、廊下の突き当たりに在る公衆電話からベルリネッタに電話をした。

「お電話有難う御座います。ベルリネッタです」

電話に出たのは祐介だった。

僕が出られない分、彼に無理して出てもらっている。

「あ、あの……陽彦です」

「ああ、里見かあ」

「あ、すみません、無理に入ってもらって」

「いやあ、そんな無理はしてないよ」

榛菜のピアノの音が、彼の後ろから聞こえていた。

「どっから？」と、電話の向こうで声が聞こえた。マスターの声だ。

「あ、里見です」

カチャカチャと忙しく食器が鳴っている。盛り付け中か。

「何だ、急用か？」

「いや、わかんないっす」

送話口を塞がないので、向こうの会話がこちらに筒抜けだった。

「もしもし、マスターが急用か？　って」

「いや、忙しいなら別にいいよ」

「ちょっと待ってろ」

ほんの少しの間があった。

僕は受話器の向こうへ耳を澄ました。

榛菜のピアノが聞きたかったから。

しかし、音色は聞こえなかった。食器の擦れる音と、何かを鉄板で焼いている音が聞こえたから、送話口を塞いでいるわけではない。「もしもし」

榛菜が電話口に出た。

電話を通した彼女の声は、今日会った彼女とは別の人物のような気がした。

「ああ、悪いな。みんな忙しいのに」

「ハルくん？ どうしたの？ マスターがちょっと繋いでおけて」

「いや、マスターはいいんだ。何だかハルの声が聞きたかった」

「昼間会ったばかりじゃん」

「ああ、そうだよな」

彼女の怪訝に思う雰囲気、電話からも伝わってきた。

「大丈夫？」

「あ、ああ。全然まったく大丈夫」

僕はそう言って、わざと声を出して笑って見せた。

「ま、マスターに、明後日退院だって伝えといて」

「うん。判った。明日また行くね」

「おう。明日は晴れるといいな」

僕は、何だか自分でもよく判らないまま言葉を発した。

「何か変だよ、ハルくん」

「そんな事無いさ。じゃあ、また」

「う、うん。じゃあね」

僕は公衆電話の受話器を置いて、深い溜息をついた。

◆第42話◆（前書き）

【中間あらすじ】

榛菜と関係を深める陽彦は彼女が同情や労わりを欲しがっていない事を悟る。そんな中、恭子はドラッグに溺れ、中毒症状のまま路上に放置されていた。恭子の友人から彼女の豹変するキッカケを作ったのが自分だと聞かされ、さらに、友人の聡史が恭子に好意を持っていた事を知り陽彦は再び苦悩する。◆◆学校が試験休みに入ってしまう、気を散らしたままバイクを走らせる陽彦は事故に巻き込まれ病院へ運ばれる。病院へ見舞いに来る榛菜と会う事で、陽彦は彼女の思い、そして自分の気持ちを再確認する。しかし、病院に現れた恭子の横には榛菜の弟、秋夫がいた。

◆第42話◆

入院から十日が過ぎたこの日、僕の脚を固定していた簡易ギブスが外された。

軽い痛みはあったが、膝の関節は直ぐに感覚を取り戻した。病院内をしばらく散歩して病室へ戻ると、榛菜が来ていた。

僕の右足は元通りに戻った。これで再び健常者。そして、榛菜は相変わらず障害者だ。

「ギブス取れたんだね」

榛菜は笑いながら、僕の脚に視線を落した。

僕は、喜びを半分だけ表にだして

「ああ、これで自由だよ」

そう言って、笑顔も半分だけに留めた。

「なあんか、あんまり嬉しくなさそう」

榛菜はそう言って、僕のベッドにストンと腰をおろした。

「そんな事ないよ。めっちゃうれしい」

遠慮してはいけない。

遠慮は彼女を傷つけてしまう。

僕はそう思いながらも、ヤッパリ半分しか笑えなかった。

この先永遠に片脚を引きずる榛菜に、僕は後ろめたさを感じてしまった。

僕は翌日の午前中に退院して、家に戻った。庭にはTW220が置いてあった。

中古で購入した僕のTW200は、新車のTW220へと替わった。

ハンドルくらいは流用できるが、マフラーやサスはまた違うモノ

を買わなければならない。ピカピカの新車を前に、思い入れのあった以前のTダブを思い出して、僕は複雑な心境だった。

貴重な試験休みの大半を、僕は入院に費やしてしまった。

家に帰ると、母親は今日から主婦の会の慰安旅行に出かけ、父親は京都に出張していた。

確かに、僕が怪我をする前からの予定だから何も言えないが、もしかして、もし僕の脚があ夢のように無くなったとしても、僕の両親は大して気にしないのではないか。

そんな事を考えながら、リビングテーブルに置かれたメモ書きを僕は眺めていた。

メモの最後には『冷蔵庫』と走り書きしてあった。

まるで、謎解きメッセージだ。

とりあえずキッチンへ行き冷蔵庫を開けると、中にはラップの掛けられた料理が入っていた。

から揚げにフライドチキン、それに煮物や野菜炒め。そして、お寿司。

それを見て、とりあえず僕の退院を親は喜んでいるのだと理解した。

昔からそうだった。

僕の両親は子供に対しての愛情表現が下手なのか、あまりそれを感じたことがない。

父親は仕事が忙しく、母親は自分の楽しみを犠牲にしない。

それでも、僕は彼らに依存してここまで育ったわけだから、たいして文句も無いが。

がんじがらめで育てられる事に比べれば、これはこれでいいような気もする。

オードブルを少しつまんだ時、榛菜から電話があった。

豊島園の駅にいますというので、僕は迎えに行った。

「お弁当作ってきたよ」

榛菜は僕に会うと、バックを掲げて笑顔を見せた。

退院祝いのつもりだろう。

「じゃあ、ウチ来なよ」

退院したその日にバイクに乗るわけにも行かない。一週間後の検査まで運動はご法度だ。

「親がいっぱい料理置いていってさ。食いきれそうもない」

「置いていった？」

「母さんは旅行で、オヤジは出張でさ」

僕が家の事情を少しだけ彼女に話すと、榛菜は、笑顔で納得し

「じゃあ、あたしも食べるの手伝ってあげる」

「お前の弁当が先だな」

僕たちは、住宅街に向かって歩き出そうとした。

「陽彦」

通りに出ると、歩道に恭子がいた。

「退院したんだ」

「ああ」

僕は、この前の彼女の行動を思い出すと、素っ気無い返事しか返せなかった。

「こんにちは」

恭子は榛菜に笑顔を送る。しかし、僕には彼女の笑みは不安材料でしかない。

「こ、こんにちは」

榛菜は初めて会う恭子に、笑顔を返した。

恭子は何を考えているのか、僕には判らない。ただ、不安だけが頭の中を埋め尽くす。

「行こう」

僕は、自分の不安に耐え切れず、榛菜の手を掴んだ。

「そんなに引っ張ったら彼女かわいそうじゃん」

立ち去ろうとする僕たちに恭子が言った。

そして、笑みを浮かべて

「片脚無いんだからさ」

僕は背中に冷たい汗を感じた。

恭子が憎かった。

榛菜は困惑して恭子を振り返った。

「行くぞ」

僕は榛菜の手をそっと引いた。

駆け出したかったが、そんな訳にはいかない。いつその事、榛菜を抱きかかえて走りたかった。

僕は自分の気持ちを押し殺して、榛菜の手を強く握った。

恭子は僕たちがゆっくり横断歩道を渡る姿を、ただじっと見つめていた。

アスファルトから照り返す熱が陽炎を作り出して、彼女の姿を蜃気楼のように揺らめかせていた。

それでも僕は、恭子が榛菜の弟の事を言わなかったので、心の何処かでホッとしていた。

そして僕はこの時、恭子の左手首に巻かれた包帯に気づく事が出来なかった。

「あの人、誰？」

住宅街を歩く中、榛菜が訊いて来た。

「クラスの娘さ」

「どうしてあたしの脚の事？」

僕はどう答えていいのか判らなかった。

「判らない。当てずっぽうじゃないか」

僕はそう言って笑顔を作ったが、榛菜は怪訝な表情を隠せない様子だった。

「この辺に住んでるの？」

「ああ、ひとブロック先の住宅街らしい」

彼女の家を知っているのに、僕はウソをついた。

「ふうん」

榛菜は怪訝な顔のまま頷いた。

彼女にとって、脚の無い事を指摘されたのは大した事ではないの
かも知れない。

それを気にしている様子ではなかった。

寧ろ、恭子の存在その物を気に掛けている様子だった。

◆第43話◆

久しぶりの朝の駅。到着した電車からは、物凄い人の波が溢れ出てくる。

としまえんのプールに開園一番に駆けつけた連中たちだ。

何処の学校も今日が登校日というわけではないようで、大学生風の連中が多い中、家族連れも混ざっている。

駅から柵越しに見える蒼く聳えるオブジェ。それを朝の陽光が眩しく照らし出す。

榛菜とは、あそこへは行けないだろう。

夏の海、それどころかプールさえも、彼女と一緒に堪能する事は難しい。

ウォータースライダーのチューブに涼しげに流れる水流の影を見上げて、僕は思った。

終業式の日、恭子は学校へ来なかった。

僕は聡史に恭子の事を訊こうと思ったが、何だか切り出しにくくて訊けなかった。

彼の方から恭子の事を何か話してくれればいいのだが、聡史はあまり話したがらない。

何時も一見冷めたような、一歩引いたところから女性を眺めるような、そんな聡史は、あまりにも本気剥き出しの感情は表に出さない。

何時ものふざけたような発言は、意外と本心を隠す為なのかもしれない。

それは恭子に対しても同じで、以前練馬駅で会った時にやっと本心を打ち明けてくれたものの、それ以外は僕から訊かなければ特に彼女の話をしない。

彼が本気で恭子を追いかければ、それだけ僕には話さないかもしれない。

そして恭子が聡史をどう思っているのか、いまだ検討もつかない。見守るしかないのか……

僕はそう考えるように努力した。

学校を終えて、何人かとカラオケに行き、とりあえずこれから始まる夏休みを祝って盛り上がる。

しかし、大検を予定している連中は予備校の夏期講習が大変だとぼやいていた。

聡史は専門学校へ行くらしいので心置きなく平然と盛り上がり溶け込んでいる。

僕は将来の事よりも、今現在の事で頭がイッパイで、先の事を深く考える余裕はない。

とりあえず、専門にでも行けば何とかなるだろう。

カラオケBOXから出ると、僕たちはチリジリになった。

聡史と二人になった時、彼が呟くように言った。

「俺、突き止めたよ」

僕は恭子の所在だと思った。

「何を？」

「恭子に酷い事をした連中さ」

僕は正直驚いた。

恭子が被害者と考えれば当然加害者がいる。

そう、最初にクスリを売った連中、そして彼女を葉漬けにして乱暴したあげく、路上に放置した連中だ。

僕はいままでその事を考えなかった。

恭子自身の変貌に困惑し、引き金になったのが自分だと聞いてさらにショックを受けた。

しかし、考えてみれば彼女を闇に引きずり込んだのはクスリを売

った連中なのだ。

聡史は僕を責めるよりも、恭子を直接闇に引きずり込んだ方を詮索していたのか。

「お前、どうやって？」

「小、中学ん時の知り合いが、Sの売買に関わった事があるって聞いて、辿ったんだ」

「小学って、俺も知ってる奴か？」

「悪いいな。それは言えない」

聡史はそう言うってから、真剣な顔で続けた。

「ブクロを仕切ってるのは二つ。そこから枝分かれして末端では六組の売人がいるらしい」

「お前まさか……」

聡史は財布から透明で小さなビニール袋に入っただけのものを僕に見せた。

中身はオレンジ色の錠剤だった。

「お前、これ」

「心配すんなよ、本物じゃない。て言うか、ちょっと前までその辺の裏路地に在るチンケな店でも売ってたやつさ」

「合法ドラッグか？」

「ま、今は非合法らしいけど」

「何処で？」

「こいつら、エクスタシーもコカインも売ってるらしいんだ」

「そいつらに会ったのか？」

聡史は、何も言わずにフツと笑った。

魂がゆらりと飛んで行きそうな笑いだった。

「お前、そんな事調べてどうするんだ？」

僕は不安に押し出されるように訊いた。

「さあ、今はわからない」

そう言い残した聡史と駅で別れた。

僕は立ち止まったけれど、彼は止まらなかった。

そのまま人波へ消える聡史の姿を、僕は追いかけなかった。

◆第44話◆

緑の木々から注ぐ木漏れ日が、アスファルトを永遠に照らし続け、身体に当たる熱風が光に溶けて後へ飛んでゆく。

練馬から約50キロ。僕は榛菜を連れて奥多摩へ来ていた。

海やプールの人混みには行けない彼女に水際の戯れを味あわせるにはどうしたらいいか。僕は真剣に考えた。

そこで浮かんだのが奥多摩の溪流だ。

場所を選べば人混みも無いだろうし、波に足を取られる事もない。人目を気にせず、素足をさらけ出して水に浸すのも容易な気がした。彼女はこの日、シリコンラバーで覆われた肌色の義足を装着してきた。

「バイト代で買っちゃった。半分はお母さんが出してくれたけど」今朝、榛菜の家に迎えに行った時、何時もより短いスカートから肌色の両脚を出した彼女がそう言って笑った。

右の脚に色合いまで合わせてあるそれは、一瞬本物と区別が付かない。

バイト代で買うのは、女の子なら洋服だったりアクセサリーだったりするのが普通だろう。しかし、彼女の場合はそれが義足という事だ。

僕は、バイト代をバイクなどの道楽にしか使わない自分を少しだけ恥ずかしく思った。

灼熱の葉緑の壁を抜けてトンネルへ入ると、一瞬寒いほどの冷たい空気が身体を捕らえる。光りの玉となって見える出口に向かって、僕はアクセルを開ける。

「トンネル気持ちいい！」

榛菜の叫んだ言葉は、壁面に共鳴するバイクの音で殆ど掻き消さ

れていたが、僕にはちゃんと聞こえていた。

その高揚感は、彼女の身体全体から伝わった。

キャンプ場のある近くを、細い小道に沿って下ると開けた河原がある。

川は二股に分かれていて、一方はゴツゴツと大きな岩が転がる激流、もう一方は小石が散りばめられた穏やかな流れになっていた。大きな河原にその対照的な流れが二本ある。

どちらも川幅は5〜6メートルと言ったところか。

僕たちは、手前の緩やかな流れの近くにレジャーマットを敷いた。相変わらず熱い陽差が照りつける中、僕は上に羽織っていた長袖のシャツを脱いだ。

榛菜もバイクに乗る為に羽織ったシャツを脱ぐと、スカートも脱ぎだした。

「お、おい……」

僕は一瞬ビククリしたが、彼女はスカートの下にショートパンツを履いていた。

すらりと伸びた二本の脚。

まるで幻のようだ。

膝下に付いた10センチほどの継ぎ目を隠す黒い帯が無ければ、完全な生脚と変わらない。

彼女は、義足との継ぎ目を見られるのが、一番抵抗があるのだそうだ。

「なんだか、脇の下とかを見られてるみたいな感じ」

彼女は笑って言った。

「さ、触ってもいい？」

僕が訊くと榛菜は恥ずかしそうだったが、脚を差し出してくれた。僕はそっと彼女の左脚に触れる。

弾力感は、確かに人肌のようなだった。足の指も細部まで再現してある。

右足の型を採って転写したらしい。現代テクノロジーに感激すら

してしまう。

足首に入った関節が僅かに動く。もちろん、本人の意思で動くわけではない。

自分の意志では動かない脚。

しかしそれはピノキオの脚なんかではない。

これが彼女の脚なのだ。

その時、彼女は急に脚を少し引いた。

「何かくすぐりたい」

「えっ、感じるの？」

榛菜は首を横に振ると

「継ぎ目から脚にもぞもぞ伝わってくるの」

「へえ、そうなんだ」

……ビックリした……

「そこは本物……」

「えっ？」

榛菜の声に僕は再び視線を脚に向ける。

僕は何時の間にか、彼女の膝上、生の脚に触れていた。

「あ、ああ。ごめん。どうりでリアルだと思った」

「もう、手つきがやらしかった」

「そんなじゃないって」

僕は笑って頭をかいた。

彼女がこうして無防備に脚を触らせるのは、きっと僕だけかもしれない。

……医者以外は。

ピノキオの脚？ ……それにしても、僕はどうしても急にそんな例えが浮かんのだらう。

僕は木陰でジーンズを脱いでハーフパンツに履き替える。

川の水際まで歩き、二人で脚を入れた。

「うわっ、冷てえ」

「気持ちいい」

気温は35度、水温はおそらく18度も無いかもしれない。まるで、氷に足を入れているみたいだった。

緩い流れの川は、一番深い場所でも膝下ほどの深さしかなかった。川の中ほどまで歩いたが、水の冷たさに耐え切れず、僕は早々に水面から突き出た石の上に飛び乗った。

彼女は僕よりは長く脚を水に浸けていたが

「やっぱり冷たい」

そう言って、やはり水から頭を出している石の上に乗った。

そして榛菜は無言で僕を見つめた。

僕は軽く肩をすくめると、彼女を抱き上げてザブザブと川面を蹴散らして岸まで戻った。

このくらいの甘えは、かえって楽しい。

女性を抱きかかえたのは初めてだった。榛菜は思いの外軽くて、少し驚いた。

彼女の髪の毛が僕の頬に触れて少しだけ緊張したけど、それが顔に出ないように平然を装った。

「これじゃあ、泳げないね」

岸に足を着けた榛菜が言った。

「どうせ泳ぐ気はないよ」

「えっ、そうなの？ ハルくん泳ぐのかと思った」

彼女は本気でそう思っていたらしい。

「泳がないって。つうか、泳げる深さないし」

「そっか、そうだね」

「でも、川の水がこんなに冷たいなんてビックリだけど」

僕はそう言って笑いながら、マットに横になった。

刺さるように乱暴に降り注ぐ熱い陽差が、ここでは気持ちよかった。

榛菜も隣に横たわると、彼女の肩が僕の肩に触れた。

何時の間にかこんなにくつついても、それが当たり前で……僕は彼女がさっき塗っていた日焼け止めクリームの香りがやけに心地よくて、静かに深く息を吸った。

◆第45話◆

セミの声に混じって、山の何処からか野鳥の鳴き声が聞こえていた。

目を閉じると、心地よい自然の喧騒に呑み込まれていく。

瞼を貫きそうな陽差を浴び、真っ赤な暗闇の中で、僕は急に小さい頃の記憶が蘇えった。

ハッとして起き上がる。

「どうしたの？」

榛菜は寝そべったまま、ビックリした顔で僕を見上げた。

「ハルって、前は何処に住んでた？」

「ひばりヶ丘だけど」

「ひばりって、西武沿線の？」

「そうだけど……」

彼女は少し怪訝な表情で応えた。

「そっか。そうだよな」

僕は再び寝転がるが、また起き上がる。

「どうしたの？ 落ち着きないなあ。もう」

今度は榛菜も起き上がる。

「ねえ、日暮里に行った事ある？」

「日暮里？ どうして？」

「いや、何となく……」

「おばあちゃんの家があるから、小さい頃はよく行ったよ」

彼女は起き上がったついでに、鞆からお弁当を取り出して

「お腹減らない？ 暑いから、もう食べちゃおうか」

「近くに神社無かった？」

「神社？」

彼女は話しながら昼食を広げて、麦茶の入った水筒を取り出した。
「あ、この保冷の水筒スゴイね。まだめちゃくちゃ冷たい」

彼女はそう言って笑うと「あれ？ 何だっけ」

「お婆ちゃん家の近くに神社無かった？」

「ああ、神社ね……」

榛菜は少し考えながら、眩しそうに空を仰いだ。

「そんなに近くじゃないけど……亜貴も一緒に来た時に、一度神社まで散歩に行った事あるかな」

「亜貴ちゃんも？」

「うん。お婆あちゃん家には何度か一緒に行ったよ」

榛菜は僕におにぎりの入ったタッパを差し出しながら

「どうしたの？ そんな事訊いて」

僕は彼女が差し出したおにぎりを手にした。

「その神社で、転ばなかった？」

榛菜は自分もおにぎりを手にすると、ポカンと僕を見つめた。

「そう言えば、そんな事あった」

彼女は思い出したようにそう言う

「亜貴がしきりにぶつかってきた男の子を睨んじゃって。大変だったよ」

榛菜はおにぎりを齧りながら明るく話した。

「あれ？ なんでハルくんそんなこと知ってるの？」

「その時、その男の子は、キミに謝ったかい？」

「えっ？」

「彼は、ちゃんと謝った？」

「うううん……確か、亜貴が睨んで、それで男の子はあたしの脚に気づいたみたいでしきりに見てた」

彼女は冷たい麦茶を口にして息をつく

「その後、立ち上がったあたしに『ごめんな』って言って、ズボンに着いた土をほろってくれたよ」

「そう……」

僕はちゃんと彼女に謝っていた。謝っていたんだ。

僕は、心の奥底から、深く息をついた。

潜在意識の中に取り込まれたような記憶の中で、ずっと何かが引っかかっていたのはこれだったのか。

……あの時、あの場所にいたのは榛菜だったんだ。

榛菜は一つ目のおにぎりをお口に押し込んで、ハッと僕を見つめた。

「ねえ、もしかして」

榛菜は僕を見つめたまま口の中のモノを飲み込んだ。

「まさか、あの男の子って……」

僕らはあの時出逢っていた。

子供の時に逢っていたんだ。

最初に榛菜に会った時感じたものは、懐かしさなのか。

「なあんだ」

榛菜はそう言って笑った。

「なあんか、ハルくんと初めて会った時、初めてののような気がしなかったのよね」

彼女はそう言いながら、紙コップの麦茶を飲み干した。

そうか、彼女も感じていたんだ。

僕たちが顔を合わせるのは初めてではなかった事を。

「亜貴は、覚えてないかもね」

「何で？」

「だって、彼女いろんな人に睨み効かせて来たから、誰を睨んだかなんて覚えてなんじゃないかな」

榛菜は笑ってそう言いながら立ち上がると

「ねえ、向こうの川も見たい」

彼女はしぶきを上げる流れを指差した。

「えっ、危ないよ」

「大丈夫だよ」

そう言いながら、榛菜は携帯用のステッキをシュッと、伸ばした。

◆第46話◆

ゴオゴオと唸りを上げて岩をかき分ける激しい水の流れは、まるでラムネのような色をしていた。

榛菜は僕の身体に掴まりながら大きな岩の上を歩いて、小さな岩をちよつとだけジャンプして、なんとか川の中央付近にある大岩まで辿りつくと、腰をおろして水の流れに足を入れた。

「きゃあ、冷たい。でも気持ちいい」

思わず叫んだ彼女は、足をぶらぶらさせて水面の流れを弾いた。

僕も隣に腰掛ける。

向こう岸からせり出した大樹の枝が、直射日光を遮って日陰を作っていた。

「ここ涼しくて最高」

木漏れ日の中で、榛菜の笑顔が弾けた。

……連れて来て良かった。

「俺、飲み物とって来るよ」

僕はそう言って立ち上がると、岩をポンポンと飛び跳ねて、隣の緩い流れをザブザブと渡り、荷物を置いた場所まで行った。

水筒と紙コップを持って再び榛菜のいる場所まで戻る。小走りのまま石の上を小気味良く渡っていたその時だった。

ほんの一瞬、僕は油断をしたのだろう。

小さな流れを飛び越えて次の足場に着地した時、濡れた石に足を取られて川に落ちてしまった。

一瞬の出来事だった。何かに掴まる暇も掴まる場所も無い。

転がる石で小さな堰せきとなったその場所は思いの外深さがあり、左右から流れてぶつかる強い水流に押されてあっという間に数メートル流された。

「ハルくん！」

「バカ、来るな！」

僕が叫んだ時には、榛菜はもう水に飛び込んでいた。

おいおい、お前、泳げんのか……？

榛菜はあつという間に流れに乗って僕の横まで来た。が、僕と身体が一瞬触れただけでそのまま行き過ぎる。

「榛菜、足を着け！」

そう言いながら僕は手を伸ばした。

「ごめん、うまく出来ない」

彼女も手を出したが、それらは触れることはなかった。

「クソッ」

僕は足で川底を蹴った。

川の流れが邪魔をして、うまく榛菜に近づけない。

川幅は5、6メートル。いや、もう少しあるか。榛菜と僕の距離は3メートル前後を行ったり来たり。その距離が異常にもどかしい。

いずれは流れが収まるだろう。しかし、その前に激流に吞まれるかも知れないし、岩に激しくぶつかるかも知れない。

「ちきしょう！」

僕は、身体を水面に寝せて泳ぐ態勢をとった。

横の距離がとにかく縮まらない。

僕は水泳が得意だ。区の大会で表彰台に上がった事もある。しかし、それは小学校の時の話。こんな事なら運動部にでも入って、身体を鍛えるんだ……

何とか横に進まなければ。

そう思っている矢先に突き出た岩に吸い込まれる。

ダメだ……川底から足を離したら流れに吞まれるだけだ。

今のところ榛菜の行き先にはさほど危険な箇所はなさそうだが、水の流れが強くて、彼女も水を飲んでいようだ。

榛菜も必死に川底に足を着いて川の流れに抵抗しているに違いない。

きっと、健常者でも女の子にはこの流れに逆らう事は出来ないかもしれない。

男の僕さえ横に移動できないのだから。

転がった岩で川底は急激な高低を繰り返す。彼女の身体は上下に揺れながら流されてゆく。

せめて縦の距離は離れないようにと、彼女を追う。

そうこうしているうちに、小さな岩に榛菜が取り付いた。

「そうだ、そのままそこにいろ。放すなよ」

はじけた川の流れが彼女の顔にモロに当たっていた。

いそげ、いそげ。急げ、俺。

泳いだら流される。何とか歩いて彼女のいる岩まで行かなければ。足元にも気を付けないと、流れで挟まれた川底は急に深くなっている。足を取られてしまう。

「おい、大丈夫か」

誰かの声が聞こえた。

見上げると、草むらをかき分けて誰かが顔を出している。

「その娘をお願いします」

僕は必死で榛菜を指差した。

身形みなりから見て、釣り人のようだったその人は、長さの変わる網を

取り出して、命イッパイ榛菜に向けて延ばした。

彼女は必死でそれを掴んだ。しかし、僕を振り返る。そして今にも手を離してこちらに身体を返しそうだった。

「いいから先にあがれ」

僕はとにかく叫んでいた。手でジャスチャーを繰り返す。

「放すなよ」

釣り人は彼女を引き寄せた。

……よし、これで大丈夫だ。

ゴツゴツした岩をかき分ける激しい水音だけが周囲を取り巻いていた。

この時、僕は激流のど真ん中で悟った。

そうか、きつと秋夫を助けた時の榛菜はこんな気持ちだったに違いない。

自分はまだ全然危険な場所にいるのにも関わらず、きっとこんな安堵に満たされたに違いない。

「ハルくん！」

喧騒をかき分ける声。

榛菜がずぶ濡れのまま向こう岸で叫んでいた。

そうだ僕はあそこへ行かなければ。

「少し先で枝が出てる。それに掴まれないか？」

釣り人が言った。

流れの先を見ると、僕のいる側に斜めに生えた樹木から枝が突き出ている。

僕は頷いて見せると、切らした息を整えてその樹木に向かって慎重に進んだ。

僕が木の枝に捕まったのを見て、榛菜を連れた釣り人は少し先に在る小さな橋に向かった。

◆第47話◆

「聡史、俺ちょっとタイムな」

少年は転んだ少女に駆け寄った。

「大丈夫？」

一緒にいた友達の非難する視線が痛かった。

「大げさなんだよ」

少年はその言葉を発した事を後悔した。その目で見た光景に、絶句した。身体が硬直して、少しの間動けなかった。

ピノキオのあし……

「ご、ごめん。俺、知らなくて……」

「大丈夫、あたし転ぶの慣れてるから」

少女はそう言って笑った。

自分より幼いその笑顔に、少年はドキリとした。異常な胸の高鳴りを感じた。

「ほら、まだ土が着いてるよ」

少年は少女のズボンに着いた土をほろった。自分とは違う華奢な足腰に触れた。

「ありがとう」

少女の笑顔は特別だった。少年にはそれが何故なのか解らなかった。

彼女の乗り越えた苦悩も絶望感も彼には解らなかったが、少女の笑顔が特別なものだと言う事だけは解った気がした。

「この人のせいで転んだんだから、当たり前前の事だよ」

一緒にいた少女の友達はそう言いながら、少年と一緒に彼女のズボンの土をほろっていた。

キツイ言葉に相反した優しい仕草を見て、少年は苦笑いを浮かべた。

そんな心に残るはずの光景も、人波に戯れながら成長して行くう

ちに、他の多くの記憶に追いやられていつのまにか見失ってしまうのだ。

それが平和の下に暮らす常人の記憶なのかもしれない。

.....

熱い陽差は相変わらず僕たちに降り注いでいた。

榛菜は水に流されている間、弱気な表情は見せなかった。しかし、ホッとして気が抜けたのだろう。

「ごめんなさい……ごめんなさい……あたし……ハルくん助けなきゃって」

榛菜は嗚咽を堪えながら子供のように言った。

「判ってるよ。大丈夫だから泣くな」

僕は子供を宥めるように、彼女の濡れた頭を撫でた。

「まあ、足着く深さだから呑みこまれる事もめったにないし、二人共無事でよかったじゃない」

僕らを助けてくれた釣り人の後藤さんと名乗ったその人は、そう言って笑ってくれた。

僕が流してしまった水筒は、途中の岩に引っかかっていた。それも後藤さんが網で拾い上げてくれた。

僕と榛菜は荷物を置いている場所まで歩いて戻ると、少しの間マッソトに寝転がって衣服を乾かした。

榛菜はまだ少ししょんぼりしている様子だった。

僕は熱い陽差の下で、彼女の濡れた身体を抱きしめた。

「有難う。飛び込んでくれて」

僕は、彼女の耳元でそう言いながら、そっと頭を撫でた。

「でも、ハルくん一人ならきつと、もっと早く上がったよ」

「そんなのただの結果だろ。だいたい、落ちた俺が悪いんだよ」

僕は、榛菜の意外と向こう見ずなところが、何だか愛おしく思えた。

それはきっと、秋夫の命を救った原動力でもあるのだ。

僕自身、いままで誰かに助けられた記憶などない。そもそもそんな場面に出会った事がないのだ。

結果的には、榛菜は僕を助けてはいないが、そんな事は関係ない。目の前で僕を必死に助けようとしてくれた彼女は、僕が守らなければいけないような気がした。

見かけによらずコテコテの長女肌の榛菜は、そんな事しなくていいと言うに違いない。だから僕は、それを心の奥に刻んで、彼女には見せないでおこう。

「おにぎり、まだあったよね。ひと泳ぎしたから腹減っちゃったよ」僕は、彼女に抱きついたまま言った。

それを聞いた榛菜は、ようやく笑顔が戻った。

僕たちは、洋服が半乾きのまま荷物をまとめた。

僕は、再びジーンズに履き替え、榛菜はスカートを履いてショートパンツを脱いだ。

しかし、二人共下着はまだ濡れたまま、なかなか乾かない。

奥多摩の国道から青梅街道に入って直ぐ、左手にお城が見えた。

もちろん、本物のお城ではない。アミューズメントホテルと称した洋風のお城だ。

ちょうど信号で止まった時、僕は何となく榛菜に聞いてみた。

「なあ、お城に寄って下着乾かすっての、どう？」

もちろん、いい返事を期待してはいない。半分以上は冗談のつもりだった。榛菜とはゆっくり歩むと約束しているから。

彼女は一瞬お城が判らなかつたらしく、きょとんとしていた。

僕が顎で建物を示すと彼女も気付いたようだ。榛菜は僕に回した腕に力を入れて僕とヘルメットをくっ付けると

「いいよ」

と小さく言った。

僕の鼓動は一瞬で跳ね上がった。

胸の中に期待と不安が押し寄せて交差する。

動揺を隠すように、僕はバイクのクラッチを何時もよりゆっくりと慎重に繋いだ。

「ハルくんはこういう所、来た事あるの？」

部屋に入った彼女は、珍しそうに辺りを見渡しながらいきなり僕に問いかけた。

「んん……どうかな？」

「あつ、あるんだ」

彼女はちよつとだけ頬を膨らまして、でも微笑んでいた。

僕たちは服や下着を全部脱いでバスローブに身体を包んだ。

カラオケも、50インチのハイビジョンで映画を観ることもできる。

勢いで押し倒せば、今の榛菜なら拒まないような、そんな不確かな自信はあった。

でも僕は、彼女の横に座ったまま

「映画でも観る？」

そんな事を訊いてみたりする。

「何あるかな」

榛菜はメニューを見て

「あつ、プーさんあるよ」

「プーさん？」

僕も彼女に寄り添って一緒にメニューを眺める。

突然キスをして来たのは彼女の方だった。

僕は何も考えずにそのまま榛菜を抱きしめた。

彼女を抱きしめたまま、大きなベッドの端から中央へゴロゴロと転がった。

榛菜の笑顔に迷いは見られなかった。

僕は、榛菜のバスローブの紐を、ゆっくりと引いた。

無邪気だった少女は女に変わる……

◆第48話◆

部屋の明かりはほの暗く落されて、熱帯魚の円柱型の水槽がぼんやりと青くライトアップされていた。

天井にはデディーベアの絵が描かれているのが今更気付いた。

僕の心配は無用だった。

片脚が義足でも、榛菜は榛菜で、僕の気持ちに揺らぎは生じなかった。

血の通わないその脚さえ、僕は愛おしく思えた。

……それは無いと思っていた。

でも本当の事だ。

榛菜の身体に着いた全ては彼女で、僕にとってはそのどれもが同等に愛おしいのだ。

きつと、アルミの義足を着けていたとしても、僕は同じ気持ちでいられたと思う。

「パンツ乾いたかな？」

タオルケットに包まった榛菜が、僕の腕にしがみ付いて笑った。半乾きだった衣類は、浴室に設置してある乾燥機能を使っていた。

「いいかげん、乾いたら」

僕はそう言いながら、彼女を抱き寄せた。

彼女を放したくないと思った。

恭子の白い肌の記憶は、榛菜の愛くるしい小さな身体に置き換えられた。

僕は、恭子の呪縛から逃れられると思った。

ホテルの部屋は時間の感覚を失う。

昼間なのか夜なのかわからなくなる。

外へ出ると、太陽の強い陽差はまだ健在で、何処と無く初々しい僕たちをこそばゆく照らしていた。

途中でお茶をして榛菜を送った後、自分の家の近くまで来たのはもう夕方というより夜に近かった。

蒼かった空は緋色から縹色はなだいろに変わり始めていた。

後ろからサイレンの音が聞こえたので、僕は左の路肩によって止まった。

見事なドップラー効果音で、救急車が慌しく僕の横を走り過ぎるが、緩い坂道を下るその光景に、僕は妙な胸騒ぎがした。

自分でもそれが何なのか解らない。

でも僕は、その救急車が緩くカーブした途中で曲がるのを見た。そこが恭子の家のある辺りか確信は無かった。それでも胸騒ぎが収まらずに僕は自分の家に向かわず救急車を追っていた。

最初に曲がった住宅街。そこは恭子の家の在る路地ではなかった。ホッと息をついて、そして考える。

救急車は何処だ？ 何処で停まったのだろう。聞こえていたサイレンの音は今さっき消えた。

僕は辺りを見回しながら住宅街をゆっくりと走る。

小さな堀にかかる橋を渡った所で引き返した。

こんな所までは来ていないはずだ。僕は一本隣の路地へ入った。……いた。救急車が後のドアを大きく開いたまま停まっている。

僕はそれを見て一瞬止まった身体にムチを入れるように、バイクのアクセルを開けた。

救急車が停まっているそこは、確かに恭子の家だったからだ。

キッとブレーキをかけて停まると、僕は彼女の家の庭に駆け込んだ。

ちょうどストレッチャーに乗せられた誰かが運ばれてくる。一緒にいるのは母親だからそれ以外の人に違いない。

妹か？ 父親か？ そんなわけない…… 僕には直ぐに判ったは

ずだ。

ストレッチャーに乗せられているのは恭子だ。

「お婆さん、恭子、どうしたんですか？」

僕は母親の腕を掴んだ。

「ああ、あなた確か恭子のお友達の」

彼女はそう言ったきり、虚ろな表情でストレッチャーを追いかけた。

玄関先には少女が一人佇んでいる。前にイタ飯屋に来た時に見た妹だった。

「お姉ちゃん、手首切って……」

彼女は小さい声で呟くように言った。

バンツと勢いよくドアを閉める音が響き渡った。紅いライトがほの暗い庭の雑木を不気味に映し出していた。

僕は走り出す救急車を、ただ無言で見つめるだけだった。

恭子は風呂場で手首を切った。

以前からのためらい傷、いや、最初はただの自傷行為だったのかもしれない。それが、恭子の両手首には無数にあったそうだ。

しかし、彼女はついに気持ちを解き放つかのように深く手首に刃を立てたのだ。それは動脈に届くほど深いものだった。

妹が彼女を発見した時には、既に大量の出血で、お風呂場は一面真っ赤だったそうだ。

病院に運ばれた恭子は、大量の出血によりショック状態だったが、緊急輸血などの処置を受けて一命を取り留めた。

僕は、彼女を見舞うか迷っていた。

全ての引き金は僕にあると思うと、それだけで胸が苦しくなる。それは、何時の間にか命を絶つまでに膨れ上がってしまったのか。

しかし、やはり恭子の容態が気になったので、一日空けた翌々日の午前中に彼女が運び込まれた練馬病院へ足を運んだ。

彼女は四人部屋の窓際にいた。精神状態を病院側が考慮して一人部屋を避けたのか、空気が無かったただけなのかは判らない。

ベッドで点滴チューブを着ける彼女を見るのは二度目だ。

まだ貧血状態なのだろう。恭子の顔は蠟人形のように真っ白で唇の血色も薄い。

しかし、まったく化粧をしていない彼女は、僕の知っているクラスメイトの橘恭子だった。

僕が病室へ入ると、彼女はチラリと一瞬だけ視線をこちらに向けたが、直ぐに窓の外へ移した。

それでも僕は、彼女の確かな生を感じてホッとした。
左の手首には痛々しいほどに包帯が巻かれていた。

「なあ、聡史が心配してたぞ」

僕は、どう声をかけていいのか判らずに、聡史の名前を出した。

「あなたは？」

恭子はこちらを見ずに言った。

「えっ？」

「あなたは、あたしを心配してくれないの？」

「そりゃあ、心配してたよ」

恭子の目からは雫が滴り落ちていた。

彼女は、見かけよりもずっと弱いのだろうか。寧ろ、一見無邪気に見える榛菜の精神はとても強く、それは小さい頃に苦悩を乗り越えた事にあるのかもしれない。

今の僕に、彼女を元氣つける言葉は浮かばない。

「早く、元氣になれよ」

僕はいたたまれなくなつて、そんな言葉を残して恭子の病室を後にした。

彼女は立ち直れるだろうか。

僕は、恭子の事を聡史に教えるのを忘れている事に気づいて、病

院の建物を出て直ぐに彼の携帯に電話した。

◆第49話◆

聡史の携帯には繋がらなかった。

僕は少し間を置こうと思い、バイクを置いた駐輪場まで歩いていた。

すると、携帯のコールが鳴った。

聡史からだ。着信モニターにはそう表示された。

しかし、電話に出ると向こうから聞こえたのは彼の声ではない。

「陽彦君？」

「はい、そうです……」

何となく聞き覚えのある女性の声。それは、聡史の母親だ。

「あの……」

「聡史の母です。久しぶりね」

「ああ、こんにちは。お久しぶりです」

僕は、妙な緊張感に追い立てられてペコペコと頭を下げながら言った。

「あの、聡史君は？」

少しの間、返事は無かった。

「ニュース、見てない？」

「はあ？ ニュースですか？」

「昨日、池袋で殺人事件があったのよ」

「はあ……そうなんですか」

僕には関係ない事だと思った。

どうして、聡史の母親がそんな事を僕に言うのか判らなかった。だって、殺人なんて身近に起こるものだなんて思った事は無い。

四六時中東京のあちこちらで起こる事件や犯罪も、僕から見れば遠い出来事で、身近に感じる犯罪なんて、せいぜい万引きとカツアゲくらいだ。

「あの……それで、聡史君は？」

再び沈黙があつた。

「殺されたのは、聡史なのよ」

彼の母親は、妙に事務的なアクセントでそう言った。

僕にはその言葉が直ぐには理解出来なかった。

『殺された』と言う言葉が何か違う意味を持っているのだと必死に詮索した。

それとも、僕の聞き違いかもしれない。似た言葉を探す。

しかし聞き違いなどではなく、その意味はタダ一つ。『殺された』以外には無い。

「ナンデですか？」

僕は、自分でも驚くほどに普通に訊いた。

おそらく、母親が今さっき言った言葉が何を意味しているのか、まだきちんと理解できなかったのかもしれない。

「聡史は、何か悪いことに関わっていたのかしら……」

「えっ？ どうしてですか？」

「警察がそんな事を私に訊いて来たから」

母親の声は、何時の間にか涙声になっていた。

「陽彦君、何か知らない？」

「いや……僕は何も」

僕は嘘を言った。

一瞬で、あの時聡史が見せたドラッグの錠剤が僕の頭を過ったからだ。

アイツは、行動に移してしまった。

恭子の為に？

彼女の為に出来る事は他にいくらでもあつたのではないだろうか。なのに、聡史はそれを選んだ。

密売組織に一人で立ち向かったのだろうか。それとも、彼女に直接クスリを売り渡していたヤツを見つけて詰め寄ったかもしれない。とにかく彼は、素人が入ってはいけない場所に足を踏み入れたのだ。

「陽彦君？」

「あ、すみません……」

僕は葬儀の日程などを詳しく訊いたが、漠然とした空白が支配する頭には、それは半分しか入らなかった。

小学校からの友人が死んだ。

しかも、殺人事件。

数日前には普通に話して、バカな冗談を言い合って笑っていたのに。

僕の頭は今にもパニックを起こしそうだった。

いろんな思考が断片的に頭の中を駆け巡る。その中には全く関係ない自分の事故の体験などが入り混じっている。

小学校の時、よく神社の境内に隣接した公園でカン蹴りをして遊んだ。聡史はやたらとジャンケンが弱くて、何時も最初の鬼はアイツだった。

みんなで草野球をすると、ショートバウンドの処理が異常にうまくて、何時もショートかサードを守っていた。どうして少年野球チームに入らないのかと僕が訊くと

「だって、面倒じゃん。朝とか早いし」そう言って笑いながらコーラを飲んでいた。

昔の仲間も、半分は名前すら忘れている。

もちろん、未だに付き合いのある連中など聡史以外にはいない。

そして、それも終止符を打った。

小学校の思い出に浸る事なんて、もっとずっと先だと思っていた。本当の大人になってから時々思い出しては懐かしむものだと思っていたから。

でも僕は今、あの頃をとっても懐かしく感じ、今まで忘れていた事も一気に蘇えり、頭の中に溢れ出るのを押さえられなかった。

病院内の敷地に佇んだまま、僕は不意に空を見上げた。夏空は白

い太陽の輝きと共に、やけに清々しく広がっていた。

そらぞらしいほどの眩しい光に目を細めると、目尻から零れた涙が耳に触れた。

嗚咽と共に吐息がこみ上げて肩を震わせた。

そんな事は、何時振りなのかさえ判らない。

◆第50話◆

「どうしたの？ 珍しい」

亜貴はそう言って、池ふくろうの前にいた僕に駆け寄った。

僕は亜貴に電話をして待ち合わせをした。

昨日、聡史の葬儀が行われ、僕は参列した。咽るような暑さに囚われた妙に長い一日だった。

誰かの為に涙を流すのは優しさの現われだとかで聞いたことがある。僕は、優しい人間なのだろうか。

恭子にも榛菜にも会う気が起きなかった。少し距離のある亜貴に会おうと思った。

それが何故なのか自分でも解らない。

「大丈夫？」

亜貴は、僕の顔を覗きこんでそう言った。

聡史が死んだ事は彼女も知っている。

榛菜に会えば、今の僕に命イッパイ気を使うだろうし、恭子は何を考えているのか判らない。今、一番一緒にいて安らぐのは、亜貴のような気がした。

「とりあえず、どっか入る？」

亜貴は僕を促して歩き出そうとした。

「どっか行かない？」

「えっ、何処に？」

「浅草……とか」

別に浅草に行きたいわけではなかった。日常から離れた場所に、浅草が思い浮かんだだけだ。

「うん。いいよ」

亜貴は明るく笑うと

「じゃあ、行こう」

そう言って歩き出した。

浅草の雷門は昔と変わらなかった。

花やしきに行く途中にある変な洋服屋も時間が止まったように存在していたが、花やしきその物は、小さい頃来た時とはだいぶ変わっていた。

「あ、変なお面あるよ」

亜貴は終始明るい笑顔で僕と過ごした。

榛菜以外の娘と一緒に歩くのは久しぶりだった。

歩くペースを考える必要もなく、段差を気にする事も無い。人混みだって、手を繋いではぐれないようにさえすれば、いくらでも足早に通り返られる。

彼女は時折さりげなく僕の手や腕を掴んで引く。その行為が男の心をくすぐる事を知っているのだろうか。

いや、これは彼女の性格から来るごく自然なスキンシップだ。

そう判っていたのに僕は……

ウォークスルー方式のお化け屋敷の中で、僕は後ろから亜貴を抱きしめた。

「さ、里見くん？」

亜貴は意外と落ち着いた声で言った。

ラベンダーのような、ちょっぴりアーモンドのような甘い香りがした。それは、榛菜とはまた違った不思議な香りだった。

「ダメだよ。こんな事しちゃ……」

彼女は、そっと僕の腕を掴んだ。

「今日あたしが里見くんに会って、ハルは知ってるよ」

僕は、思わず彼女の身体から手を離れた。

「そうだよな……キミらは親友だもん」

僕は親友を失った。

知らない誰かに殺された……

聡史の顔は、全体が青あざで腫れ上がっていた。そして、最後はナイフで刺されたのだ。

亜貴は僕の方を振り返ると

「今はあたしにもどうしていいかわからないから、彼の事お願いね。て、ハルは言ったよ。あたしは、ハルの信頼は裏切らない」

亜貴は暗い通路の中で、僕を見つめた。

非常口を表示する小さな明かりが、彼女の瞳に映り込んで微かに揺れていた。

「里見くんは、ハルを裏切るの？」

「俺は、彼女みたいに強くないから……」

「そんな事無いよ。あたし、里見くんみたいな人好きだよ。でもそれは、ハルを大切にする里見くんが好きなの」

女性特有の少し冷たい手が、僕の手を強く握り締めた。

僕は何もかもが嫌になっていたのかも知れない。現実から逃避したかっただけなのだと思う。

亜貴は僕の手を引いて、ほの暗い中で何かの台座を見つけると、そこに座るように言った。

僕は何だか判らないが、とりあえずそこに座って立ったままの彼女を見上げた。

「おまじないしてあげるから、目を閉じて」

「おまじない？」

「いいから、早く目を閉じて」

僕は、亜貴に言われるまま目を閉じた。

「一度だけだよ。超サービスだかね」

亜貴はそう言って、僕の頭を自分の胸に抱きかかえた。

ビックリしたと同時に、彼女の温かさに包まれた。

ラベンダーのような甘いミントと洋服の香りが入り混じった女性の匂い。

柔らかい胸の奥から心臓の鼓動が聞こえた。それは意外と速く叩かれて、彼女が平気でこんな事をしているのでは無いと判った。

それでも僕は、あまりの心地よさに彼女にしがみ付いてしまった。彼女は僕を抱きしめたのではない。僕の弱った魂（こゝろ）を抱いてくれたのだ。

女性の方が精神年齢が上だとよく言われるが、本当かもしれない。

「あの……すいません……」

「きゃっ」

亜貴が声を上げた「な、なに？」

僕たちがハッと振り向くと、小さなライトに照らされた骸骨姿の男が、何だか妙に遠慮気味に立っていた。

「そこ……私の待機場所なんすけど……」

お化け屋敷から出ると、陽の光りが眩しかった。

青い空が眩しかった。

白い雲が眩しかった。

僕はちよつとだけ、誰かに甘えたかったのだ。榛菜でもなく、恭子でもない誰かに……

「あっ、あたしアイス食べたいな」

亜貴が僕の手を引いて言った。

「里見くんのオゴリね」

彼女の笑顔は、何時も通り明るかった。

彼女の彼氏はどんな男なんだろう。

このキラキラした笑顔を独占している男が、僕はちよつとだけ羨ましく思ったけど、直ぐに榛菜の笑顔が浮かんでそれを掻き消した。

僕には僕の、帰るべき素敵な笑顔が待っている。

「亜貴ちゃん、これ食べたら帰ろうか」

「ええ？ いいけど……」

亜貴は、唇に着いたソフトクリームをペロツと舌で拭くと

「じゃあさ、ハルに会いに行こうよ」

そう言って笑った。

◆第51話◆（前書き）

榛菜が片脚を無くした頃の話が3話分あります◆◆◆左脚と一緒に無くした笑顔を、彼女はどうやって取り戻したのか……

◆第51話◆

.....

「ハル、亜貴ちゃんがお見舞いに来てくれたわよ」

「帰ってもらって」

七倉榛菜は閉め切ったカーテンでぐるりと囲われたベッドの中で言った。

「せっかく来てくれたのよ」

母親は榛菜の身体に布団の上から優しく触れた。

「会いたくない……」

彼女は脚のない自分の姿を、親友にさえも見せたくは無かった。

亜貴は病室の入り口から、カーテンに閉ざされた向こうにいる親友の気配を見つめていた。

窓から差し込む陽の光がリノリウムの床に白く跳ね返り、室内のあらゆる物が溶け込んだように影の模様を作っている。

「ごめんね亜貴ちゃん。ハルはまだ具合がよくなって……」

「ううん。いいんです。また来てみていいですか？」

「えっ？ ええ……ありがとう。帰りは気をつけてね」

亜貴は榛菜の母親に笑顔を返すと、通路を去っていった。一二〇センチちよつとのその後ろ姿は切ないほどに可憐で、廊下を照らす白い明かりに吸い込まれていった。

榛菜は車椅子の上で陽の光を浴びながら、病院の庭に植えられた並木を眺めていた。

脚を切断して二ヵ月が経とうとしていた。

膝を曲げるリハビリは何とかこなした。しかし、その先を動かす

努力は必要ないし、何の為に膝を曲げる必要があるのかも榛菜には判らなかった。

頭の中は何時も空虚で、何かを考える事が苦痛だった。自分の無くなってしまった左脚を嘆く事が、自分のした行為に対して後悔する事が怖かった。

それを後悔すると言う事がどういう事なのか彼女には判っていた。自分の脚を無くした行為。

あの時道路に飛び出しさえしなければ……しかしそれは、弟の秋夫を助けなければよかったという考えと直結してしまう。

そう思うことが怖かった。

だから、何時も頭の中を空っぽにして過ごした。それは同時に、彼女の前向きな性格を奪ってしまう事でもあった。

「ハルちゃん。暑くない？ 少し日陰にいこうか」

車椅子を押す看護師の言葉に、榛菜は小さく頷くだけだった。

木陰に入ると木漏れ日が白く注いで、さざ波のように地面に模様を作っていた。榛菜は密集した木の葉の影が作り出す模様を、ただじっと見つめていた。

笑顔を作ろうとしても、顔に表情が出ない。何かを考えたくないと思う気持ちは、彼女の表情を人形のように固定してしまった。

「こんにちは」

近づいてきた気配に声をかけられて、榛菜は振り向いた。

「こんにちは」

先に挨拶を返したのは、榛菜の車椅子に手をかけていた看護師だった。

「こ、こんにちは」

榛菜の潜在意識が無意識に、かろうじて挨拶を返していた。

車椅子に乗って榛菜に近づいて来たのは、同じ年くらいの少女だった。

榛菜は無意識に彼女の足元に視線がいった。フツとレストに乗っている脚は一本だけ……

パジャマの脚の部分。左側のそれは、根元からペタリと潰れている。それがどういう事なのか、彼女は直ぐに気付いて慌てて視線を上げた。

そこには笑顔があった。陽の光と並木の緑が同時に彼女を照らしていた。

「あたし、工藤エリ」

榛菜は彼女の笑顔を見つめていた。

「あたしは……榛菜。七倉榛菜」

「天気よくて、気持ちいいよね」

エリはそう言って空を仰いだ。

彼女の後ろには看護師はいなかった。一人で車椅子を押して散歩に歩いているのだ。

脚が無くてこんなに笑える彼女を、榛菜は不思議な気持ちで見つめた。

「こんにちは」

翌日、榛菜の病室に静かに入って来た人影は、彼女のベッドの横で声を発した。

彼女はほとんどの時間を読書に費やしていた。母親や看護師が外へ連れ出す時だけ、事務的に病室から出る。それは検査も散歩もその頃の榛菜にとっては同じだった。

その時も上体だけをベッドの上に起こして、枕に背をあてて本を読んでいた榛菜は、声に気付いて視線を上げた。

昨日庭で会ったエリだった。

「退屈だから遊びに来ちゃった」

彼女は笑顔のまま「じゃまなら帰るけど」

榛菜は無言のまま首を横に振った。

「ハルちゃんは、二年生？」

エリの明るい声に、榛菜はコクリと頷いた。

「あたしは三年生。もうずいぶん学校休んじゃったけど」

「入院、長いのか？」

「うん。ここって、あんまり同い年の子供がいなくて退屈だよ」
彼女は手にしていた白いポリ袋からジュースを取り出すと、一つを榛菜に手渡した。

「ありがとう……」

ありがとうの言葉には笑顔。でも、そう思う自分の考えに反して、今の榛菜には自然な笑顔が出てこない。ボンドで固めたように表情が固着して、気持ちが表情に直結しないのだ。

「リハビリやらないのか？」

エリは自分の缶ジュースのプルタブを開けて、口に着けた。

「やったよ」

「そう」

「やっても、結局歩けないし」

榛菜はぼそりと言った。

エリはスツと車椅子の向きを変えたと窓際へ行った。

「ねえ、一緒に外に出て散歩しない？」

「えっ？ でも……」

この頃の榛菜は、尽く消極的だった。

エリは病室の出入り口まで行くと、通路の横に置かれている車椅子を一台手に取り、それを引きずって再び榛菜の元へやって来た。

榛菜の病室は六人部屋。それなりに広い病室で、榛菜は窓際に位置している。入り口からの距離を、エリはあっという間に滑り込んできた。

慣れた手つきで折り畳まれた車椅子を広げると

「さ、行こうよ」

そう言っ、彼女は車椅子のシートを手でポンポンと叩いた。
エリの笑顔に引きずられるように、榛菜はベッドから身を乗り出した。

「違うよ、先に右脚をここに掛けて。ブレーキ掛けてるから、少し

ぐらい体重かけても大丈夫だよ」

車椅子にブレーキが付いている事さえ知らなかった。

まだ一人では車椅子に乗った事がない榛菜は、悪戦苦闘しながらようやくシートに腰をおろした。

◆第52話◆

榛菜とエリは、二人で通路を歩いた。もちろん車椅子で。広い場所では並んで通る事ができた。お互いの目線が一緒だから、何だか気持ちが落ち着いた。

エリは慣れた動作でエレベーターに滑り込むと、くると一八〇度向きを変える。榛菜もそれに続いたが、定位置での転回は出来なかった。

それでも自分の意思で車椅子を走らせて、そのままエレベーターに乗り込むと、榛菜は何だか少しだけワクワクした。

エレベーターが一階に到着すると、両脚で立っている他の人たちはみな、彼女たちを優先的に降ろしてくれた。

榛菜は、いそいそと後ろ向きでエレベーターを降りるのがちよつとだけ恥ずかしかったけど、エリが一緒だったので心強かった。

二人は一緒に売店へ入った。榛菜は自分で売店に来たのも初めてだった。そこは車椅子のままでも充分に買い物出来る広さがあった。

この夏新しく出たらしい炭酸飲料に期間限定味のポテトチップ。榛菜は思わずあれもこれも手に取る。

「これから外に行くのにそんなに買うの？」

エリに言われて、榛菜はハッとして頬っぺたを紅くした。

「帰りにまた来よう」

エリの笑顔に頷いた榛菜は、彼女と一緒にジュースだけ買って、売店を出る。

裏の通用口から外に出ると、直射日光の陽差に榛菜は目を細めた。建物の周りをぐるりとまわる。病院の裏庭を見るのも榛菜は初めてで、自分の視野の狭さを痛感した。

昨日までは、時々看護師や母親に押されるまま車椅子で庭の散歩に出ていた。その景色は何処かおざなりで、簡素なものに思えた。

でも今は違う。

自分の意思で右に曲がり左に曲がり、ほんの少しの傾斜に負荷を感じて、それでも息を切らして車輪を回す。

八月の暑さも手伝って、榛菜の額には汗が流れていたが、同時に笑顔が零れていた。それは意識しないまま湧き出る笑顔だった。

並木の木陰まで来て二人は止まった。

「自分の意思で歩き回るのって、楽しくない？」

「うん。気持ちいい」

榛菜は汗を拭いながら笑った。

昨日まで感じたうっとおしいほどの陽差が、やたらと清々しく感じた。

「車椅子ならベンチを捜す手間も要らないしさ」

エリはそう言って笑いながら、売店で買ったジュースを口にした。

＊ ＊ ＊

榛菜は自分から車椅子に乗るようになった。もう一人でもスムーズに乗りこめるし定位置転回も自由に出来るようになった。

母親が彼女の病室を訪れると、しばしば不在の時があって、そんな時はたいてい庭を散歩している事が多い。

エリが検査などでない時は、一人で庭へ出て木陰で読書などをするようになった。

程なくして、エリが退院する事になった。

「エリちゃんがいなくなったら淋しいな」

「時々遊びに来てあげる」

「ほんと？」

「うん。ていうか、ハルちゃんも、もうじき退院できるよ」

「そうかな」

「そうだよ」

「あたしが退院したら会えなくなる？」

「会えるよ。そしたら、一緒に買い物行こう」

工藤エリが退院の日、二人はそう言って笑顔で別れた。

しかし、エリが再び榛菜の病室を訪れる事はなかった。

どうして彼女は来ないのか。外の生活が楽しくて、自分の事なんて忘れてしまったのだろうか。

榛菜は僅かながらそう思っていた。

それでも、エリのお陰で榛菜は明るさを取り戻していた。

見舞いに来た亜貴を、笑顔で迎える事も出来た。

亜貴は榛菜が入院して直ぐに、一度見舞いに来た。しかし、その時は一人部屋だった榛菜の病室の前で引き返している。片脚を無くした親友の姿を見るのが辛かったから。

そう、身体の一部を失った榛菜に会う事は、亜貴にとっても勇気が必要だった事は確かだ。

その後も何度か病院へ来ているが、内にこもり出した榛菜が会おうとはしなかった。母親が病室にいない時など、声をかけられないまま病院を後にした回数はもう本人も覚えていない。

「ごめんね、心配かけて」

「そうだよ。めっちゃくちゃ心配した」

亜貴は榛菜に真顔でそう言う

「あたし友達少ないんだからさ」と笑った。

そんな事はない。亜貴は、気は強いが明るくて本当は優しい娘だ。だから、男子にも女子にも人気がある。

彼女の冗談に、榛菜も思わず笑った。

「退院したら、学校来れる？」

「判んない。片脚が無くても行けるのかな」

「関係無いんじゃない？」

「でも、体育はできないなあ」

「その代わり、学芸会のダサいお遊戯じゃなくていいじゃん」

亜貴のちょっぴりお気楽な言葉に、何故だか榛菜も気が楽になった。

夏休みも終わる頃には、榛菜は松葉杖だけで歩く練習を始めた。もう直ぐ退院して自宅療養に切り替えた方が良さだろうと医師から提案があったのだ。

この頃、母親は学校への復帰を申し出て、その条件の難しさに密かに頭を抱えていた。

◆第53話◆

榛菜は退院してからも車椅子に乗る反面、松葉杖での歩行練習も続けていた。しかし、片脚で身体のを支え続けるのは用意ではない。松葉杖に体重の一部が分散するとはいえ、大半は片脚に集中するのだ。

短時間なら問題ないが、長時間歩き回る事は困難だった。

秋夫は、片脚を無くした榛菜にどう接していいのか判らなかった。榛菜は何かと秋夫を気にかけて、よく声をかけた。

彼も少しずつ、榛菜と普通に接するようになるが、家の中の生活リズムはどうしても榛菜寄りにならざるおえなかった。

空に浮かぶ雲は少しずつ高くなり、朝晩の乾いた風に、素肌は冷たさを感じるようになる。

この頃になると、近所に住む亜貴は学校で配られたプリントなどを届けてくれるようになった。

亜貴自身、榛菜の通学復帰を誰よりも心待ちにしていた。

当時亜貴の家は、榛菜の家のある都営団地に隣接する民間のマンションにあった。高校へ入って榛菜の家は落合に引っ越したが、少しして亜貴の家もまた引越して移ることになった。そして再び同じ駅を利用するようになったのだ。

現在の亜貴の家は、椎名町より次の駅の方が本当は近いのだが、榛菜と一緒に時は同じ駅を利用している。

長期入院、自宅療養をしていた榛菜は元のクラスに在籍したままだったが、片脚のない生徒をこのまま受け入れるかどうか、学校側は慎重すぎるほどの審議を繰り返して、なかなか榛菜の登校許可が出なかった。

一部の保身的な教員たちは「何かあったら」という言葉を楯に、

障害者の混入を否定したのだ。

それでも榛菜は次第に学校へ行く意欲を持ち始めていた。その為には、車椅子ではなく、松葉杖での校内生活が条件だった。

亜貴の励ましはもちろんの事だったが、やはりエリと出会った事が大きく影響した。

何時でも前向きな姿を見せていた工藤エリ。長女である榛菜が、初めて目上の優しさに触れたのが彼女だったのかも知れない。

きっとエリちゃんも何処かで頑張っている。そう思うと自分自身も勇気が湧き出るのだった。

そんなある日、榛菜の家に一人の女性が訪ねてきた。

部屋で読書をしていた榛菜は、母親に呼ばれてリビングに顔を出した。

「こんにちは、榛菜さんね」

先にソファに腰掛けていた女性が、そう言って微笑んだ。

「こんにちは」

榛菜は誰か知らないその女性に声を返した。年格好は自分の母親とそう変わらない。

「工藤エリさんのお母さんよ」

母親に言われて、そう言えば似てる。そんな事を彼女は思った。

「エリさんは元気ですか？」

もう、彼女に会えなくても自分で今の自分に立ち向かっていける。榛菜はそんな気持ちになっていた。

しかし、エリの母親は直ぐには応えなかった。悲しい笑みが、榛菜を見つめた。

「エリは、骨肉腫だったの。あの娘はダンスが好きで、将来はプロになりたいって言ってたわ」

一瞬俯いたエリの母親は静かに言った。

「それなのに、大事な脚を失って……」

彼女は言葉を詰まらせた。

榛菜はエリの左脚が根元から無い事は知っていた。しかし、理由

を訊いた事はない。お互いにそれは言わないのが礼儀のように思っていたから。

「骨肉腫？」

榛菜にはそれがどんな病気か判らなかった。

「骨の内部にできる腫瘍……癌みたいなものよ」

榛菜の母親が口添えした。

「ガン……」

癌と言えば、死に直結するような病気。榛菜にはそんなイメージがあった。

エリは自分の苦悩を他所^{よそ}に、自分に元気を分けてくれたのだと彼女は思った。

「エリちゃんは元気ですか？」

榛菜は再び訊いた。彼女の母親が、どうしてここへ一人で訪ねて来たのか、その疑問と不安に追い立てられながら。

エリの母親は、バックから写真を一枚取り出して榛菜に見せた。

「それが、エリが最後に撮ったものよ」

それは、病院のベッドに臥^ふせる、やつれたエリの凛々しくも何処か果かない笑顔だった。

エリはあの時、榛菜のいた病院を退院してから数日後に、大学の付属病院へ再入院していた。退院と言うより転院に近かったのだ。

最後に撮ったもの……？ 榛菜の思考は混乱した。

「エリちゃんは、病気が肺に転移……肺に移ってしまつて、もう手遅れだったんですって」

榛菜の母親が、エリの母親の代わりに言った。

手遅れ？ 榛菜は一瞬その言葉の意味を探った。途端に彼女の見る景色は灰色に変わっていった。

「ウソ……そんなのウソだよ。だって、エリちゃんあんなに笑つたもの」

榛菜は声を張り上げた。

「あの娘は明るい娘だったから」

エリの母親がポツリと言った。

榛菜は松葉杖を片手にソファから立ち上がると

「エリちゃんはあたしに会いたくないんだ」

乱暴に杖を着きながら、出来る限りの早足で部屋を出て行った。

彼女も頑張っていると信じて自分も頑張ってきた榛菜には、目の前にいる大人たちの発した言葉を受け入れる事は出来なかった。

「ハル……榛菜」

母親の声に、彼女は立ち止まらなかった。

「ハルちゃんに伝えていいものかどうか、私自身迷ったのですが……やっぱり来ない方が良かったのでしょうか」

エリの母親は首をうなだれたまま呟くように言った。

「いえ、そんな事ないですよ。榛菜も事実を知った方がよかったと思います。現実には時に残酷なものです」

榛菜の母親は、そう言っただけで彼女を見つめると

「ささ、コーヒー冷めないうちにどうぞ」

そう言っただけで、朗らかな笑顔を向けた。

陽も落ちかけた夕方、母親は榛菜の部屋のドアを叩いた。

彼女が部屋に入ると、榛菜は机に突っ伏していた。

「あらあら、真っ暗じゃない」

母親はそう言っただけで、榛菜の部屋の電気を点けた。

夕暮れの部屋の中は、いち早くほの暗さを増していた。

「ハル、これ」

母親は、エリの最後の写真を彼女の机に置いた。エリの母親が榛菜に、と置いていったのだ。

榛菜はゆっくりと顔を上げて、それを見つめた。

「最後なのに、笑ってる……」

「きっと、エリちゃんはとても強い娘だったのね」

母親は榛菜の肩に手を置いて一緒にその写真を覗き込むと

「せっかくお母さんが持ってきてくれたんだから、大事にしまっておきなさい」

母親は瞳に涙を堪えていた。同じ年頃の娘を亡くした母親の気持ちには痛いほど判る。あの大きな事故で榛菜の命が絶たれなかった事を、彼女は改めて感謝した。

「きっと、あなたが挫けそうになった時、エリちゃんが助けてくれるわ」

榛菜が小さく頷いた時、乾きかけていた机に、再び雫が零れ落ちた。

「あたしも素敵な笑顔が出来るようにがんばる」

榛菜はこの一カ月後、担任の働き掛けも手伝って、小学校へ復帰した。

.....

.....

◆第54話◆

聡史が殺された1週間後、犯人が捕まった。しかし未成年の為、顔も名前も公表されなかった。年齢は十八才。僕と、そして聡史と
同じ年。

僕はどうしても、犯人の顔が知りたい。ひと目でもそいつを見て
やりたいと思った。

それはただの好奇心などではない。ましてや、それを知ったから
と言って復讐心に燃えてるわけでもないだろう。

僕から親友を奪った犯人がどんな奴なのか知りたい。人一人殺し
た同じ年の奴がいったいどんな顔をしているのか知りたい。

しかし、どうしたらいいのか僕には判らなかった。

犯人が送検された拘留所のある建物の周囲をグルグルとバイクで
走る日々が続いた。

未成年の殺人犯を狙ったワイドショウのカメラマンスタッフや特
ダネ雑誌の専属カメラマンが連日何組かうろついているので、僕を
怪しむ者などいなかった。

「あの……あの犯人の少年で、出てくるんですかね？」

僕は、近くにいたカメラマンに聞いた。

雑誌のスクープなどを狙っている連中の一人だろう。テレビカメ
ラの連中よりは、話し掛け易そうだった。

「ああ？」

ダメか……

「そのうち出てくんじゃない。現場検証とかもあるだろうし」

「現場検証？」

「自白すれば、それを元に犯行現場で検証するから」

「それって、何時？」

「だから、そんなの俺が知るか」

男はしかめた顔で、僕をチラリと見た。

「そうっすよね……」

彼に苦笑を返した僕は、歩道を横切って停めていたバイクに乗ろうとした。

「出てきた！」

離れた場所から誰かの声が聞こえた。

近くにいたカメラマン数人が、カメラを抱えて走り出した。

僕は跨りかけたバイクを降りて、歩道の柵を越えてそれを追った。犯人が出てきたのだろうか。

どんな奴だろう。聡史を殺した犯人……少年A

僕は全力で走る以上の動悸を感じながら、カメラマンの背中を追った。

「こっちからいけるぞ！」

誰かの声に僕が振り返ると、塀の隙間の格子からカメラを突き出す男の姿が見えた。

この目で見てやる。犯人の姿をこの目に……

正面は報道陣でごった返していて、今更行っても何も見えそうも無い。

他に隙間は無いか。

ふと見ると、誰かが塀によじ登った。

僕も、後先考えずに塀に向かってジャンプした。高い塀をよじ登ると、裏口が丸見えで、白い大きなバンが停まっていた。

大きく伸びた木の枝とそれに茂った葉が、僕たちをカモフラージュした。

すぐ横で、パチッ、パチッとデジタル一眼のシャッターをしきりに切る音が聞こえた。

……出てきた。

スーツを着た男たちに囲まれた少年は、頭から誰かの上着を掛けられている。前に小さく突き出した手には大きなタオルがグルグルと巻かれていた。おそらくその下は手錠で繋がれているのだろう。僕は塀の上の木陰で目を凝らした。心臓の鼓動が内側から大きく

胸を叩いた。

僕と同年の殺人犯。いったいどんなヤツなのか。
クソッ、顔が見えない。

正面からフラッシュが凄い勢いで焚かれて、嵐のように彼に振り注いでいる。

段差を越えるとき、チラリと少年が顔をあげた。正面のカメラを避ける為か、その顔はこちら側に向けて少しだけ上がったのだ。

それを見た僕は一瞬眩暈に襲われた。真夏の青い空を埋め尽くした濁った大気に、思考が溶け出してゆく。

アイツは……

あの頃の晴天、あの頃の雲、あの頃の風景。僕の頭の中に小学生の記憶が走馬灯のように駆け巡った。

そんなバカな事があるのだろうか。

どうしてアイツが聡史を殺すと言うのか……

「ケンイチ！」

僕は思わず声を出した。

「バカ、声出すな！」

隣でシャッターを切っていた男が僕に言いながら、それでもチャンスを逃しはしない。

僕の声で、少年は一瞬だが完全にこちらに視線を向けたのだ。

間違いない。その面影は充分すぎるほど残っていた。

小学校のクラスメイト、斉藤ケンイチ。そして彼は、聡史のクラスメイトでもあった。

どうして……

少年ケンイチは直ぐに顔を下に向けた。僕に気がついただろうか。

「ケンイチ！ お前が聡史を殺ったのか？」

僕は叫んでいた。

「ケンイチ！ 何でだ！ ケンイチ！」

自分でも訳が判らなかった。ただ、無我夢中で訊きたい事を必死で叫んだ。

答えが返ってくるはずもないのに。

「コラ！　そこから降りろ！」

警官が駆けつけて、僕とカメラマンは塀の上から引きずり降ろされ、歩道の上に強く腹這いに押さえつけられた。

目の前は警官の黒い靴でいっぱいになった。

押さえつけられた首と腕が軋むように痛かったけど、それ以上に心情はもっと痛かった……

◆第55話◆

「ど、どうしたの？ ハルクン」

その日の夕方バイトに入ると、足を少し引きずる僕に榛菜が声をかけた。

「いや、ちょっとな」

「また、バイクでコケたんじゃねえのか」

マスターが言った。

「違いますよ」

マスターは小さく肩をすくめると

「今日は暇そうだから、まかないにカツ丼でも作るか」

榛菜は胸元で小さく手を叩いて笑った。

僕は少し驚いて

「えっ、マスターカツ丼なんて作れんの？」

「お前なあ、料理人なめんなよ」

しかし、八時を過ぎると何時ものように店は急に混み始め、せつかくの何時もと違うまかないも、ただ口にかき込むだけが精一杯だった。

「むごむご…むむ」

榛菜はどんぐりを頬張るハムスターのように、小さな口いっぱいにご飯をかき込んでいた。

「ハルはゆっくり食べてな」

彼女は、アイスティーで口の中のモノを喉に流し込むと

「あたしも直ぐ行くから」

そう言いながら、咳き込んでいた。

豊島園で花火があったらしく、それを観に来た連中が帰りに立ち寄っているのだ。

「ピアノ弾かないのかな」

そんな声が時々聞こえてきた。

今週出た雑誌に、『弾き語りのある店特集』とかで、この店が小さく載っていたらしい。

榛菜は間も無く休憩から出てくると、いきなりミッキーマウスマ―チなどを引いて、お客にサービスする。

家族連れの小さな子供が、やたらと喜んで椅子の上に立ち上がる。榛菜は時折お客の様子を見て、陽気な曲を奏でる。

クラシックの静かな曲は確かに落ち着くが、土、日の家族連れが多い時などは子供が退屈してしまう。

そんな子供を見かけると、こうして賑やかな曲を間に挟むのだ。意外なことに、若いカップルにも受けはいい。

弟思いの彼女の性格は、こうした所にも細かく顔を出す。

僕には出来ない気の使い方だ。

子供から絶賛を浴びる彼女と、僕の腕の中でと息を漏らす彼女が同じだと言う事が、時々信じられなくなる。

しかしそれが、僕の独占欲をほどほどに満たしているのも確かだ。僕は、ふと秋夫の事が気にかかった。

彼は今どうしているのだろう。

恭子との付き合いは続いていたのだろうか。それなら、恭子の所へ見舞いに行ったりしているのだろうか。

十時を過ぎるとお客の引きが早かった為、その日は榛菜と一緒の時間に上がりとなった。

着替えを済ませて一緒に店を出る。

榛菜の迎えがまだ来なかったので、僕たちは敷地を仕切る段差に腰掛けて時間を潰した。

「ハル、弟さんは元気？」

「え、うん……相変わらずだけど、元気よ」

榛菜は苦笑いを浮かべると

「夏休みに入ってから、サッパリ家にいないって言うか」

「そうか……」

「秋夫がどうかした？」

「いや、何となくさ」

僕は、そう言いながら少し不自然に笑った。

秋夫は恭子の病院へ行っているのかもしれない。

「ねえ、ハルくん……」

「なに？」

「うん……何でもない」

彼女は何かを言おうとして、それを呑み込んだように思えた。

その表情が妙に気になって訊き返そうとしたけど、ちょうど母親の車が迎えに来たので、彼女はそれに乗り込んだ。

最近帰りに少しだけ外で話す時間が空く事が多い。

もしかして、母親に迎えに来てもらう時間を、榛菜が少し遅くしたのかもしれない。

「じゃあね、お休み」

「ああ、お休み」

何度言っても、違う場所で暮らす榛菜と交わすこの言葉は、胸の奥で小さな気泡が弾けて全身に沁みるような気持ちになる。

心地よい照れ臭さ……とでも言うのだろうか。

僕はバイクを走らせると、何だか自分でも判らないうちに、自分の家を通り越して恭子の家の前に来ていた。

そこはまるで空き家のように静まり返って、夜気に呑みこまれている。

妹の部屋ぐらい電気が点いていてもいいようなものだが、それもない。

僕は、溜息をひとつつくと、バイクを押して彼女の家の前から立ち去ろうとした。

が、その時、玄関のドアが開く音がした。

暗闇を静かに近づいてくる影。それが恭子だと言う事は直ぐに判った。

「退院してたのか？」

「ええ、昨日」

恭子は小さく応えると

「バイクの音が聞こえたから、まさかとは思ってたけど」

彼女の左腕には、まだ包帯が痛々しく巻かれていた。

僕は、ここまでやって来たものの、突然彼女に会って何を話していいのか判らなかった。

ぼんやりと朧に浮かぶ月が、僕たちを僅かに照らしていた。

「ウチ、引越す事になったわ」

「えっ？」

年明けは大学受験だというのに、今更何処に引越すと言うのか。

「父が、海外に赴任する事になったの。あたしの大学とかの為に、今まで拒んでいたらしいんだけど……今はその方がいいだろうって」

「そうか……」

僕は無理に笑顔を浮かべると

「お前の事だから、向こうで有名大学とかに入るんだろうな」

「うん……それで金髪のボーイフレンドを連れて歩くわ」

彼女はそう言って、笑顔を見せた。

僕は少しだけ安心した。

目の前から恭子がいなくなるからでは無い。彼女の笑顔が、久しぶりに見た安堵に包まれたものだったからだ。

「俺、恭子の事知らぬ間に傷……」

彼女は僕の口到人差し指を伸ばして言葉を制した。

「あたしが弱かっただけ。何もかも誰かのせいにしたかったのよ」
そう言って笑うと

「榛菜さん……一度お見舞いに来たわよ」

「えっ？」

「秋夫と一緒に」

「そ、そう……」

「秋夫は、みんなが思っている以上に、お姉さんの事を想ってるよ」
「そうだな」

「榛菜さんて、何だかあたしよりも強そうね」

「ああ、俺より全然強いよ」

僕は彼女と一緒に笑った。一瞬声を出して、そしてそれを押し殺して。今はもう夜中だ。

僕らは聡史の事については話さなかった。

彼女も口には出さなかったし、僕もあえて言わなかった。

もちろん、彼が死んだ事は恭子も聞いているはずだ。

しかし、彼女にドラックを売った連中に惨死^{やら}れた事は僕しか知らない。しかも、手を下した犯人は僕と聡史の小学校の級友……

「海外って、何処？」

「逢いに来てくれる？」

僕は一瞬返事に困った。以前の僕なら、冗談でもウソでも「行くよ」と言ったに違いない。

「バカね、冗談に決まってるでしょ。カナダよ」

「カ、カナダか……何時？」

「九月の頭頃。ちょうど二学期が始まる頃かな。ほら、向こうはちようど新学期だし」

恭子は少し俯いて、眼鏡越しに僕を上目使いに見ると

「見送りに来てくれる？」

「ああ、学校サボっても行く」

それは本心だった。

彼女は、僕の腕を掴んで笑った。

月影に、恭子の頬を伝う何かが見えたような気がしたけど、僕は気付かないふりをした。

◆第56話◆

夏休みが終わり、恭子は家族と共にカナダへ旅立った。

再び彼女と会うことがあるだろうか。

僕は出発ベイから見送った恭子の背中を見ながら考えた。

恭子は、旅立つ前に聡史の家に焼香に行ったらしい。彼女が聡史の事をどう思っていたのか、最後まで判らず終いだ。

始業式の日、僕のクラスは何処と無く物静かで、それはポツリと空いた机がふたつも在るからなのは誰もが判っていた。

恭子の事を話すものは無く、また、クラスのほとんどが葬儀に参列した聡史の事を話す者もいなかった。

帰り道、校門を出た僕は一人で駅までの道のりを歩く。

一人で帰るのは別によくある事のはずなのに、何だか心の中が空虚で、まるで一人だけこの場に残されたような気持ちになる。

「よう、元氣」

誰かが後から駆けて来て僕の肩を叩いた。

同じクラスの坂上信雄だ。

「おう。バリバリ元氣」

僕は空元氣に笑ってそう応える。

「唯たちとカラオケ行くけど、ハルも行かない？」

「おお、行く行く」

僕は相変わらず笑顔で

「あいつらは？」

「今来るよ」

信雄と一緒に後ろを振り返ると、同じクラスの男女が数人、髪を振り乱しながら笑顔で走って来るのが見えた。弘明と池橋と塚本唯あと数人。

僕と信雄は、追いつこうとしている彼ら彼女らに意地悪をして走り出す。

「ちょっと、待ってよ」

唯が笑いながら「ムカツク！」

僕たちは息を切らして笑いながら駅まで走った。それを、唯や池橋たちが追いかけてくる。

零れる自分の笑顔にふと思う。

……こんな楽しい気分でいいのだろうか。でも僕は、無くした親友を引きずって生きるはイヤダ……

忘れるわけではない。

心の奥にしまって、何かの時だけ思い出せば、それでいいと思う。僕は、そう自分に半ば無理やり言い聞かせた。

帰りの電車に乗っていた時、椎名町の駅でふと窓の外に視線を向けると、秋夫の降りる姿が見えた。

僕は思わず彼を追って自分も電車を降りてしまった。

「秋夫」

彼は怪訝な表情で振り返ると

「何だ、あんたか。気安く呼ばないでよ」

彼は一応足を止めて「何か用？」

「恭子との事、榛菜に、姉さんに話したのか？」

僕は、榛菜が秋夫と一緒に恭子を見舞った事に疑問を思っていた。榛菜には直接聞いてはいない。

「いや、話したって言うか……」

彼は言葉を濁した。

「だって、恭子の見舞いに行ったんだろ。姉さんも一緒に」

秋夫は少しの間、キョロキョロと落ち着き無く辺りを見回して「見られたんだ。二人でいる時に」

「何処で？」

「いや、ウチで」

「お前の家か？」

秋夫は無言で頷いてから

「昼間だったし、家には誰もいなかったから……」

「まさか、お前らヤッテルところを榛菜に」

秋夫はブリーチした頭をクシヤクシヤとかきながら

「いや、それは終わって、一緒にプレステやってたんだ」

榛菜は恭子と秋夫が親しい事はそこで知ったらしい。彼女が手首を切るちよつと前の事だと言う。

ただの友達では無い事くらいは、きっと榛菜にも判っただろう。駅から出た所の自販機で缶コーヒーを買うと、一つを秋夫に渡した。

「学校は行ってるのか？」

「姉貴みたいな事言うんだな」

秋夫はコーヒーのプルタブを空けながらそう言って笑うと

「一応、行ってきた。今日はね」

「恭子がカナダへ行く事、知ってたんだろ？」

僕も缶コーヒーのプルタブを開けた。

「うん。退院する前に聞いた」

「そうか」

「俺、けっこう本気だったよ。彼女、頭もいいし、何だか俺に無いものいっぱい持っていてさ」

彼はほの暗く淀んだ空を見上げると

「中学くらいはちゃんと行けてさ。何だか、あんたに悪態つく彼女とは全く正反対っていうか」

彼は少し燻くすぶったような少年らしい笑顔を見せた。

「それが、本当の恭子だからな」

秋夫は小さく俯いて、何かを躊躇したかと思うと

「あんた、恭ちゃんの初めての人なんだって？」

僕は一瞬、心臓の鼓動が跳ね上がるのを感じた。忘れてはいけな

い事実がそこにはあった。

「ああ……」

「姉貴とは今も続いているの？」

「当たり前だろ」

「姉貴はその事知ってるの？」

僕は少しの間をおいて、手に持っていた缶コーヒーに視線を落とすと

「いや……たぶん知らない」

「そう」

秋夫は僕に空き缶を押し付けるように手渡した。

「ごちそうさま。大丈夫、俺は言わないよ」

そう言って彼は歩き出した。

ちょうど電車が着いたのか、人混みが駅から溢れ出て来て、彼の姿はそれに呑み込まれるようにあつという間に見えなくなった。

彼に会ったら言おうと思っていた事が、結局言えなかった。

榛菜はきつと片脚を失った事を後悔した事はないだろう。

それを後悔したら、秋夫を助けた事を後悔する事になるのだから。

◆第57話◆

日中はチクチクと肌を刺すような陽差が身体に照り付けて、キャミソール姿の女子大生もまだまだ目にするが、夜風は乾いて何時の間にか心地よい季節に変わろうとしていた。

バイクで走る風は尚の事、羽織った長袖シャツも苦にならなくなる。

その日、夕方バイトに入ると祐介が既に入っていた。彼が僕より早く入るなんて、今までにもほとんど無かった事だ。

「あれ、珍しく早いね」

祐介は何食わぬ顔で笑うと

「ああ、俺、今日で終わりだからさ」

「えっ？」

僕は、一瞬呆気にとられた。

「俺、聞いてないよ」

「マスターの事だから忘れてたんじゃないか」

「忘れてたわけじゃないぞ」

厨房からマスターが言った「今夜は送別会だ」

僕たちは声をそろえて

「それも聞いてないっす……」

「おはよう御座います」

女性の声が聞こえた。

その声の主は裏から入って来たが、榛菜ではない。聞き覚えの無い声に反応して振り返る。

僕と祐介は少し離れた位置にいたにも関わらず、思わず顔を見合わせた。

お互いに「誰？」という顔をしている。いや、もちろん自分の表

情は判らないが……

「今日から入る、相原ヒカリさんだ」

マスターはそう言って当たり前のように彼女を紹介した。

「えっ、フロアーですか？」

「ああ、祐介の代わりだからな」

いつの間に募集していつの間に面接したのか知らないが、おそらくマスターは、ここに欠員が出ない為、祐介が辞める事も特に言わなかったのだろう。

「祐介、今日だけ一緒だけど、お前の代わりだから、いろいろ教えてやってくれ」

マスターはそう言って厨房の中に戻ると

「とりあえず、休憩室に案内してやってくれ」

フロアーに女性がいると言うのはいいものだ。何だか自然に張りがでる。

それとも、自分に後輩が出来た事が心地よいのだろうか。榛菜は僕より後にここへ入ったが、役割が全く違う為、その立場は最初から対等だった。

ヒカリは祐介に仕事を教わりながら、あちこちを足早に歩き回る。お客の後片付けでテーブルを拭く姿も、何だか初々しくて可愛らしい。

ただ、ここの制服である白いシャツと黒いボトムは女性も同じだった。つまり、ここでスカート姿なのは結局榛菜だけなのだ。

「おはようございます」

榛菜が裏口から入って来た。

「おはよう」

僕に声をかけながら店内に目を止めた彼女は

「あの人は？」

「新人だって」

「へえ、人増やしたんだ」

榛菜の視線を感じたヒカリは、こちらを見て頭を下げた。榛菜も慌てて会釈を返す。

僕はヒカリを呼んで、榛菜を紹介してあげた。

女性同士の少々ぎこちない笑顔の交わし合いが、何だかちよっとおかしかった。

「祐介さんが、今日で終わりだって」

「うそ……」

マスターは、やはり誰にも言っていなかったようだ。

十時になると店を閉めて祐介の送別会をした。いきなり閉めて大丈夫なのかと思ったが、何気にドアの外には張り紙がしてあった。いつの間に貼ったのかは判らないが……

相原ヒカリは二十歳。アート系の専門学校に通っているらしい。

祐介の送別会と一緒に、彼女の歓迎会も行った。

「里見はいいよな、これから毎日女の子に囲まれて」

祐介はしきりにそんな事をぼやいていた。確かに、これからはマスターを除けば僕一人が男……しかし、祐介の代わりだけあって、ヒカリは毎日シフトに入るわけでは無いのだ。

祐介も、いよいよ本格的に就職活動に入るそうだが……少々遅い気がしないでもない。

「仲良くやろうねえ」

ヒカリはビールを片手に冗談半分で、僕にそんな言葉を投げかけて笑う。

笑顔を返す僕に、何時もと違う榛菜の視線が、ちっぴり刺さって来たのは気のせいだろうか。

翌日からは早速ヒカリと二人でフロアーを行き来する。

彼女はテキパキと働き者だったが……

「すいません、いまお取替えいたします」

時々オーダーを間違えたり……

「あああ、すいません」

時々皿を落として割ったりする。

「大丈夫、俺がやっておくから、ヒカリさんはオーダー取ってきて」
僕は、自然に彼女のフォローを余儀なくされる。

しかし、古株のサガと言うのか、それを苦痛には感じる事はなかった。それよりも、意外とそっかしい彼女が、年上なのに可愛く感じたりしていた。

彼女は榛菜より少しだけ背が高いが、それほど大きい方ではない。肩によりやく着く髪の高さとかは、何となく亜貴に似ている雰囲気を持つているが、よりコミカルな印象はそっかしいせいだろう。

今風の濃いマスカラから覗く瞳が、かろうじて年上を感じさせる。

「すみません。何だか助けてもらってばかりで」

彼女とは休憩が一緒になることは無かったが、同じフロアで動き回るのでよく話をした。

「あ、あのさ。年上なんだから必要以上に敬語で喋らなくていいよ。ここ、そんな堅苦しい職場でもないし」

「でも……いちおう、ここでは先輩だし」

「いや、調子狂うって言うか、なんていうか」

僕は、年上の彼女に敬語で話される事にこそばゆい気持ちを感じていた。

◆第58話◆

僕が休憩に入ると、榛菜がちょうど休んでいた。最近は一カリのフオロー等が忙しくて、彼女のピアノに耳を傾ける余裕もなく、いつの間に休憩に入ってるのかさえ気付かない時がある。

「何だか忙しそうね」

榛菜はおっとりとして笑って言った。

「ああ、別の意味でね」

僕は笑いながら肩をすくめて椅子に腰掛ける。

「直ぐに慣れるよ」

「そう願ってる」

僕はコーヒーを口にして

「何だか倍働いてる気がする」

そんな僕の言葉に、榛菜も思わず笑った。

「でも、キレイな人だよ」

「そうか？」

僕は何食わぬ顔で榛菜を見た。

彼女は僕とヒカリが親しく話す姿を見てどう思っているだろうか。人並みにちよっぴりヤキモチを焼いたりするのだろうか。

それを確かめる術など、もちろんないのだが。

「じゃあ、あたし行くね」

榛菜はそう言って、立ち上がった。

「あ、そう言えばさ」

「なに？」

「恭子の見舞い、行ったんだって」

「あ……うん」

彼女は少し俯いて

「ごめんね、黙ってた」

「いや、別に……いいけど」

「あたし、気付いてたんだ」

「何を？」

「初めて彼女を見た時、手首に包帯巻いてたから、もしかしてリストカットしてるんじゃないかって」

「そうだったのか」

「恭子さんて……」

榛菜のその言葉に、僕の鼓動は一瞬高鳴った。その先の言葉が怖かった。

「意外といいひとね」

「えっ？」

「二学期になってからは、秋夫も学校に行ってるみたいだし、彼女のお陰かも」

僕は何だかホッとして、心の中で大きく息をついた。僕との関係の事ではなかった……

確かに恭子は最初、僕への当て付けか何かで秋夫に目を着けたのかもしれない。でも、二人は深く傷ついた心を互いに調和し合って、意外とうまくいっていたのかもしれない。

もちろん、中学生にはまだ早い行為もあったかも知れないが……リストカットをしたり、何かと僕に突っかかる素振りを見せたりした恭子は、一方で秋夫に学校へ行けと促していた。

秋夫に話を聞いた僕は、彼女はやっぱり優等生の橘恭子だったのだと思った。

僕は座ったまま榛菜を見上げると

「そうかもな」

そう言って、微笑んだ。

「外国に行っちゃったんだってね、彼女」

「ああ。アイツは元々勉強好きだから、よかったのかも」

僕は、そう言う事にしておいた。

それを聞いた榛菜は、笑顔で休憩室を出て行った。

＊ ＊ ＊

「お疲れ様」

僕とヒカリは十二時近くに一緒に上がった。榛菜は三十分ほど前にあがったので、もう迎えも来たようだ。

ヒカリに仕事を覚えてもらう為に、後片付けを出来るだけ彼女させろと、マスターは言った。

マスターは先に上がってもいいと僕に言ったが、そう言うわけにも行かず、僕は、チェックとアドバイスをしながら彼女に付き合った。

手際がイマイチなので、時間が多くかかるのは仕方が無い。僕が替わってやれば、もっと早く終わるだろうが、それでは意味が無いとも言われた。

「すみません……あたし仕事のろくて」

「最初はしょうがないよ。直ぐに慣れるって」

「ねえ、里見くんは何でここまで来てるの？」

「俺はバイクだけど」

「そっかあ」

ヒカリは裏口のドアを開けながら

「じゃあ、呑めないよね」

「えっ……ああ」

「何処かでちょっと呑みたい気分だったんだけどなあ」

彼女はそう言って、夜空を仰ぎながら「あああ……」

彼女は、彼女なりに自分の失敗などを悔いているのだろう。

仕事でもハキハキと明るい彼女だが、それなりに緊張しているのだ。

今見る安堵に満ちた素の笑顔が、仕事中的のものとは少し違って、余計にそれを思わせた。

「少しなら付き合うけど」

僕は、何だかもう少しだけ彼女の力になってあげたいと思ってしまった。

「本当？」

「帰り、大丈夫？」

「あたし、桜台だから」

僕たちは、ヒカリの乗って来た自転車を使って、練馬駅の近くにある居酒屋に向かった。

◆第59話◆

僕は酒があまり飲めない。

まあ、バイクでの移動も多いから、自然に酒を飲む習慣がないのだ。

とは言っても、未成年の僕がそんな事を言うのはまだ早いのだろうか。

ヒカリはグビグビとジョッキに入ったビールを飲み干すと、酎ハイを何度もお変わりしていた。

二十歳ともなると、女性もかなりの呑みっぷりだな。などと半ば感心していたのだが……

「里見くんは彼女いるの？」

「いや、いると言えはいる……かな」

「なによ、はっきりしない奴ね」

ヒカリはそう言ってテーブルに置いた僕の手をグイッと掴んだ。目が座っていた。

「あ、あのさ、ヒカリさん、あんまり呑むと……明日学校でしょ」

「なんで？」

「はあ？」

何でとは、どういう意味なのか。

「何で、あたし学校なの？」

「いや、俺も学校だし」

彼女は完全に酔っ払っている。

酒をあまり呑まない人間にとって、酔っ払いは意外に厄介な生き物だ。しかも、対処法が判らない。

「ヒカリさん、そろそろ出ようか」

「なんで？ どっか連れて行ってくれるの？」

「いや、もう帰らないと」

「そう……」

彼女はようやく立ち上がってくれたので、一緒にレジまで歩いて会計を済ませる。

完全に千鳥足だ……

「ヒカリさん、一人で帰れる？」

「だいじょう……よ」

彼女は自分が止めたモノと違う自転車に一生懸命鍵を差し込んでいる。

「それじゃないよ、こっちこっち」

僕は彼女の肩を抱えて促す。

ダメだろうな……

もう深夜の2時半になるところだった。

僕は彼女を後ろに乗つけて自転車をこいでいた。

僕の腰に頼りなく回された彼女の手が時々解ける度に、振り返って彼女を支える。落っこしたら大変だ。

「ヒカリさん、この辺？」

うわ言のように応える彼女に道を訊きながら、何とかヒカリの家の近辺まで来ていた。

「ああ、ここお」

ヒカリは大きく手をあげて子供のように指差した。

意外と大きなマンションで、キレイなレンガ調の外壁は高級感がある。

僕は彼女の肩を抱えながらエレベーターに乗り、四階に辿り着いた。

彼女の部屋は406だと言う。

「ヒカリさん、鍵は？」

彼女は僕の声に反応すると、バックを引っかきまわして取り出した鍵をドアのキーシンダーに差し込もうとするが、その動作すらおぼつかない。

僕は仕方なく、彼女の替わりに鍵を外して、ドアを開けた。
バニラとリンゴが混じったような、お香のいい香りがした。

玄関に入るとヒカリは靴を脱ごうと何だかもがいている。

僕は肩をすくめると、彼女の履いていたワークブーツの紐をほどこいて、片足ずつ脱がせた。

「ヒカリさん？　ここで大丈夫？」

僕は声をかけてみたが、彼女は一人で立ち上がる様子 wasn't なかった。
何処まで僕は引き込まれるのか。

時計の針は、もう直ぐ三時をまわるところだ。

ヒカリの部屋は1Kの間取りで、キッチンを抜けて部屋に入ると
小さな水色のソファとベッドが置いてあった。

ヨタヨタと歩く彼女を促して、最初はソファを目指したが、僕は
直接彼女をベッドへ座らせた。

「眠い」

案の定、彼女はそのままゴロリと横になった。

スカートが捲くれ上がって、日焼け跡の残る太ももが露になって
いた。

僕はそれから目をそらすように、部屋の中を見渡す。壁にはクリ
スチャン・ラッセンのリトグラフが瀟洒な額に入って飾ってあった。
彼女はデザインの専門学校に通って、グラフィックを学んでいる
らしい。

パソコンデスクの上の本棚には、絵画やイラスト関係の本が目立
つ。

女性の一人暮らしの部屋は初めてだったので、つい見入ってしま
う。

淡いピンクのカーテンを閉めてふとヒカリを見ると、上に着てい
たカットソーを脱いでいた。

僕がここにいる事を、もはや認識していないのだろうか。

「おい、大丈夫？」

僕は仕方なく、彼女の左腕に絡まったカットソーを抜き取ってあげる。そこから再び着せるのは無理だと思った。

「大丈夫だよ」

彼女はそう言って、僕の首に腕を回して引き寄せた。

酒臭い中に、彼女の甘い香水とファンデーションの匂いが混じっていた。

「ちょっと、ヒカリさん」

彼女の力は思いの外強かった。

思わず彼女に引き込まれるようにベッドにひっくり返る。僕の頬が当たったヒカリの首元は、熱く火照っていた。

「もう行かないでね」

彼女が呟いた。

「ど、何処に？」

身体を引き離そうとする僕の問いに、彼女は応えなかった。

完全に酔っ払ってる。

しかし、彼女は応えない代わりに、閉じた瞼の隙間からほろほろと涙を流していた。

「ずっと一緒に……」

誰かと間違えているのだろうか……きっとそうに違いない。

「大丈夫だから」

僕にはそれしか言えなかった。

彼女が誰に言った言葉なのか、僕には全く判らない。

僕はヒカリの腕をゆっくりと首から外して起き上がり、乱れたスカートを直した。

まさか、これから服を着せるわけにも行かず、僕は彼女をそのままに部屋を出る事にした。これ以上ここに居てはいけないような、そんな気がしたのだ。

何とか、掛け布団を引っ張って、彼女の上に掛けた。

鍵はどうするか……一晩ぐらい大丈夫だろうか。

結局僕は彼女の鍵を借りて、外側から鍵を開めるとドアポストにそれを入れた。

テーブルにはその事を綴ったメモを置いて来たから大丈夫だろう。

エレベーターに乗って下へ向かうボタンを押すと、深く息をついた。

自分の洋服に着いたのか、鼻孔の粘膜に残っているのか、彼女のファンデーションと甘い香水の香気かおりがした。

ヒカリの言った言葉が耳の奥で再び聞こえた。

みんな、何かしらの苦悩をかかえて生きているものなのだろうか。僕はマンシヨンの玄関を出ると、再び大きく息をついて夜空を見上げた。

「どうするかな……」

自分のバイクで送ってくれば、帰りは問題なかった。しかし、あれだけ酔った人をバイクに乗せるわけには行かなかった。

辺りを見渡すと、静まり返った生暖かい夜気だけが何処までも続いていた。

◆第60話◆

「そう言えば、また連れておいでって、お母さんが言ってたよ」

僕の部屋のベッドでタオルケットに包まった榛菜が、そう言って笑った。

「ええっ？」

家に両親のいない時間を狙って、僕らは度々ベッドで戯れる。ホテルのベッドと違って小さなシングルベッドは多少窮屈だが、やっぱり榛菜はホテルに出入りす事にはあまり気乗りではないし、僕自身度々誘うのも気が引ける。

結局目的は同じはずなのに、ホテルに誘うよりも「ウチ来ない？」と言う方が気が楽だし、彼女も頷き易いのだろう。

何時の間にか僕の部屋は、榛菜との共有空間となっていた。

「いいじゃない。こんど、またウチ来なよ」

僕は、母親とばったり会った時以来、榛菜の家には入っていない。もちろん、家の前までは何度もバイクで送っているが、家の中に入るのは気が咎める。

別に彼女の母親が嫌とかじゃ無く、寧ろ僕が後ろめたい気持ちになりそうで……

こうして、愛娘をベッドに引きずりこんでいる僕は、彼女の両親に対してどんな顔をすればいいのだろうか。

こんな事を考える僕はおかしいのだろうか。僕がまだ未成年だから、そんな気持ちになるのだろうか。

「うん……でも、できれば、誰もいない時がいいな」

「お母さんは、ハルくんの事気に入ったみたいだよ」

榛菜はそう言って笑うと

「見かけによらず真面目に良く働くって、マスターに聞いたみたい」「見かけによらず？」

「いいじゃん。褒められてんだから」

榛菜はそう言って、仔犬のように僕の肩に顎を乗せて笑った。

しかし、彼女の母親に再びバッタリ出会う機会は、自分の思惑とは関係なくやってきた。

「里見くん」

学校帰りの池袋駅構内で、僕は声をかけられて振り向いた。

そこには、榛菜の母親が笑顔で立っていた。しかも、手には何だか大きな荷物を抱えている。

「やっぱりそうだ。今学校の帰り？」

「ええ」

僕は、挨拶も忘れて頷く。

「何時も榛菜と帰ってるわけじゃないのね」

彼女は線の細い、そう、榛菜にとっても似たシルエットをしている。いや、榛菜が母親に似ているのか。そう思いながらも、彼女の抱える大きな荷物に目がいく。

「ええ、僕は板橋なんで」

「そうなの」

彼女の笑った瞳は、まるっきり榛菜そのものだ。

「里見くんも西武線、よね」

「あ、俺持ちましょうか」

彼女の何かを訴えかけるような笑顔に、ついそう言ってしまった。家電ショップで買ったらしい包み紙が巻かれた電子レンジ、いや今話題のスチームオーブんだ。

「レンジが壊れちゃったの思い出して、つい買っちゃったのよ。意外と重いのね」

僕はそれを受け取りながら、ただ笑みを返した。

……衝動でこんなの買うか？ しかも、マジでけっこう重い。

僕は仕方なく榛菜の母親と一緒に改札を抜けて電車に乗り込んだ。付き合っている女性の母親となんて、何を話していいのか判らない。乗り込んだ電車が早く発車してくれないかと窓の外を眺めた。椎名町だから、一駅の辛抱だ。

「お店は、これから？」

「え、ええ。そうです」

「榛菜はしっかりやってる？」

「ええ、そりゃもう。ピアノがうまくてビックリですよ」

短い会話がふらふらと飛び交う。

「里見くんはバイク上手なんですって？」

「えっ？」

「奥多摩のクネクネした道路を凄く上手に走るんだって、ハルが自慢してたわ」

僕と出かけた事は当然のように母親にも話したりするのだろう。

「いや、普通ですよ」

それでも、さすがにあの日川に落ちた事や、お城に入った事は言っていないようだ。

会話は一端途切れて、走り出した電車がちょうど椎名町に着くところだった。

「お店、まだ時間あるんでしょう？」

「えっ？」

「ウチでお茶でも飲んでいきなさいよ」

「いや……はあ」

善意の浮かぶ爽やかな笑みに、僕は断る理由を捜しあぐねてしまった。もしかしたら、荷物を家まで運んでもらいたいのかもしれない。

「ささ、あがって」

「は、はあ。お、お邪魔します」

僕は玄関で靴を脱ぐと、一端降ろしたレンジを再びかかえて

「あの、これ何処に置きます？」

「じゃあ私、お茶の用意するから、里見くんはそれを箱から出してくれる」

やっぱり……僕はキッチンへ運んだスチームレンジを箱から取り出して、冷蔵庫の横にあるシステムラックの上に乗せた。

「私そう言うの苦手だから、直ぐ使えるようにお願いね」

箱から取り出した取り説を見ながらコンセントを挿して、初期設定をすませる。といっても、時計の設定だけだが。

僕は空き箱を潰して、保障書と取り説をテーブルに置いた。

「取り扱いの説明書はここに置いときますね」

「ありがとう、助かったわ。私に使えるかしら？」

「今までのオーブンレンジと使い方は一緒ですよ」

「そう、良かった。やっぱり男の子はいいわね。うちの男共ときたら、まるつきり使えなくて」

そう言って笑った彼女は、ちょうど入れたてのダージリンティーをティーポットのままりビングに運んだ。

「ささ、こっち来てお茶飲みましょ」

榛菜の明るさは、母親ゆずりなのだと思った。

僕がソファに腰掛けると、彼女は冷蔵庫から出したケーキを皿に乗せて僕に差し出し、ティーカップに紅茶を注いだ。

「ただいまあ」

玄関のドアが開く音と共に、榛菜の明朗な声が聞こえた。

「お帰り」

母親はリビングから声だけを返して、僕には「シッ」と言って自分の唇に人差し指を立てた。

「嗟あ吁、何か何時まで暑いんだろうね」

そう言いながら「ふう」と息をついてリビングに顔を出した榛菜は「何やってるの？ ハルくん……」

目を丸くしている彼女に向かってとりあず僕は、ホークを片手に

「お帰り」と笑みを返した。

◆第61話◆（前書き）

中間あらずじゝ今までとこれからゝ◆親友の聡史が他界し、恭子は父親の海外赴任に付いて学校を去った。陽彦は何処か空虚な思いを振り切るように他の友達と笑い合う。バイト先では祐介が去り、新しくヒカリという女性が入って来た。陽彦は年上の女性を初めて目の当たりに感じ、戸惑いさえ覚える。◆◆◆これからゝ◆大人の香りで陽彦に近づくヒカリ。そんな時、池袋で偶然目にした光景が、失った友の亡霊を呼び起こした。執拗にドラック売人に近づこうとする陽彦。それに気付いた榛菜は彼を止めようとするが……70話前後で完結予定です。

◆第61話◆

「この前はごめんね」

この日、バイトに入るとヒカリがそう言って苦笑いで近づいてきた。

彼女は毎日仕事に入るわけではない。祐介の代わりだけあって、彼よりは定期性があるものの、土日を含んだ週に3〜4日ほどの出勤だ。

彼女と居酒屋へ行って、家まで送ったあの日から三日が経っていた。

「ああ、いいよ別に。でも、ヒカリさんあんまりお酒強くないんじゃないの？」

「そうかも……でも、好きなのよね」

彼女はそう言って再び苦笑した。

「帰り、どうやって帰ったの？」

「いや、歩いて」

「ええ？ あそこから歩いて？ あたしの自転車使ってよかったのに」

「裏道を使ったから。そんなに遠くもなかったよ」

僕は、出来るだけ平然と言った。

本当は、あの時間に歩きは少々キツかったが、彼女の涙を思い出してしまったから、冗談でも「しんどかった」とは言えなかった。

しかし、彼女は少し困惑した笑みを浮かべていた。

「変なこと訊いてもいい？」

「なに？」

「朝起きたら、あたし服着てなかったんだけど……何時、脱いだのか……？」

ヒカリは少しだけ不安げに笑うと

「あ、里見くんを疑ってるわけじゃないんだよ」

「大丈夫、部屋のベッドに寝転がって、自分で脱いじったんだよ」
僕は笑いながら

「もちろん、その場に俺もいたけど、止める間もなかった」

「うわぁ、マジで？ ブラ丸見え？」

彼女は頬を真っ赤にして笑うと「よかった、下まで脱がなくて」

「俺だって焦ったよ」

「でも、里見くんって紳士なのね」

「そう？」

「そうだよ」

彼女はそう言って笑った後

「それとも、あたしに魅力が無いのかな」

何だかちよっぴり悲しいような、微妙な表情だった。

紳士なのか度胸が無いだけなのか判らないが、あの時僕の後ろ盾には榛菜がいたことは確かだ。

あの夜酔った彼女が、何かを呟きながら流した涙の事が気になって、僕はよほど訊こうと思ったけど、彼女の何時もと変わらない笑顔を見ていたらどうにも訊けなくなって、結局思いを呑みこんだ。

六時になって榛菜が来た。

店は何時にも通りにお客が入り、榛菜のピアノの音色が空間を彩らせる。

僕が休憩を終えてフロアーに戻った時、一人の客が榛菜に声をかけていた。

「ねえ、今度写真を撮ってあげるから、俺のアトリエに来なよ」

彼は確か、自称写真家の古谷ふるたにという男だ。千川通り沿いのマンションにアトリエ兼自宅を構えているらしい。三十代の彼は写真家を名乗っているが、具体的にどんな写真をどのようなものに掲載して生計を立てているのかは誰も知らない。

榛菜は少々困惑した笑みを浮かべていた。

実は、彼女が古谷に声を掛けられたのは初めてではない。以前から何度かこんな事はあるが、彼女はその度にうまくはぐらかしてい

た。

徐に嫌な顔も出来ない為、古谷には榛菜の嫌悪が伝わらないらしい。

「ねえ、何時なら空いてる？　ここに来る前の日中でもいいよ。一度ぐらい付き合ってよ」

マスターは厨房からこっそり盗み見る程度で、特に声はかけない。自分が出るほどの事ではないと思ってるのだろう。

「あ、あたしも写真撮って欲しいな」

その時、少し手の空いたヒカリが会話に割って入った。

「ああ、キミ、新人さんだよね？　いいよ。何時でも俺のアトリエに来なよ」

古谷はそう言って、懷から名刺を取り出して彼女に渡そうとした。

「ギャラはいくらくれるんですか？」

「えっ……ギャラ？」

名刺を渡そうとした古谷の手が止まった。

「はい。独占撮影だと、30分で2万くらいは貰えます？」

「いや、に、ニマン？　しかも30分？」

「だって、普通は素人でも、写真撮影だとそのくらい貰えますよね」
ヒカリは演技なのか本心なのか、そう言って愛くるしく笑って見せた。

「いや……五千円くらいじゃ、ダメ？」

「ええっ、だって、撮影会のモデルやったってもっといいギャラも
らえますよ。そんなんじゃ、ダメですね」

ヒカリは笑顔を絶やさずに

「ねえ、七倉さん」と、榛菜にも同意を求める。

「は、はあ。そうです……よね」

榛菜も彼女に合わせて、とりあえず頷いて見せた。

古谷は完全に諦め顔だった。そんなに金回りが言い訳ではないの
だろう。

「じゃあ、とりあえずまた今度って事に。いま、個展の準備で忙し

いからさ」

彼はそう言って笑うと、グラスワインの追加をヒカリに伝えて自分の席へ戻った。個展なんて本当にやるのかは誰も訊かない。

ヒカリは、榛葉に笑みを送りながら少しだけ肩をすくませると、一瞬舌を出した。

それを見た榛葉は、ポカンとしていた顔を笑顔に変えていた。

「何か、ごたごたしてたけど」

僕は、カウンターの陰でヒカリに声をかけた。

「うん。全然大丈夫」

ヒカリはそう言って笑うと、古谷にワインを持っていった。

「まあ、彼女もそれなりに場数を踏んでるって事だ」

マスターがそう言って、厨房から顔を覗かせて笑った。

「場数？」

ヒカリの通う専門学校には写真科もあるらしく、時折撮影会のモデルの依頼が来たりするらしい。もちろんカメラを手にする連中は全員学生だが、中には他の学校や一般参加が可能な撮影会もあるらしい。

ちゃんとギャラが発生するらしく、プロのモデルのギャラには遠く及ばないが意外と率のいいバイトなのだそうだ。ただ、非常に不定期なのが難点だとか。

それでも、彼女が古谷に言ってみせた料金は、誘いを断る為になり吹っ掛けたみたいだ。

他人との交流が多い場所で生活する彼女は、相手との掛け合いやあしらいを僕らよりも知っているのかもしれない。

二つ年上だけど隙だらけのヒカリも、こうして時折しっかり者の顔を見せるのだ。そしてそのギャップは僕に、年上の魅力として何処か興味を抱かせる。

◆第62話◆

月曜日から榛菜は修学旅行に出かけた。五泊六日で九州長崎まで、行きは飛行機を使い帰りはバスで広島経由だそうだ。

「ハルくん、お土産何がいい？」

「えっ、いいよ別に」

僕がそんな応え方をすると、彼女はしつこく何度も訊いてきた。

「ハルくんの時は何処行つたの？」

「北海道。何にも無かつたぜ」

僕たちは去年の春に北海道へ修学旅行に行っている。春の北海道は、高校生にとって特に楽しい場所ではない。

「でも、友達と寝泊りするのって楽しいじゃん」

そう言つて直ぐ、彼女は「ご、ごめん……」

僕の友人が減った事を気にしているのだろう。

「別にいいさ。思い出は変わらないんだし」

僕はそう言つて榛菜の頭にポンツと手のひらを乗せると、少しだけ無理に笑つた。

得るものがあれば失うものがある。

「人生って、うまく出来てるよな」

僕が思わず呟いた言葉に榛菜は

「なんで？」

「いや、別に」

僕はそう言ってから

「あっ、博多ラーメン」

「えっ、ラーメン？」

「お土産だよ。今はお土産用があるんだろ」

「えええ、それ生ものじゃん」

学校帰りの池袋。榛菜が修学旅行へ出発して二日が経ち、バイトが休みの今日、久しぶりに一人で街をぶらついてみたりする。

最近は何時も榛菜が横にいたから、自分の右側が少々淋しい。駅ビルの通路では、知らず知らずのウチに右側にスペースを作っている自分がいたりして、それに気がついて一人薄ら笑いを浮かべ肩をすくめる。

習慣とは恐ろしいものだ。

「里見くん」

誰かに呼ばれて振り返った。

「あ、ヒカリさん」

「今帰り？」

「ええ、暇だったもんでぶらぶら」

彼女は僕と榛菜が付き合っている事は知らない。そう言えば、祐介も結局は知らないままだったか……それとも、気付いていて知らぬふりをしていたのか。

「あ、そうか。今日はお店休みだね」

彼女は黒い大きなバックと釣竿を入れるような丸い筒を肩にかけていた。おそらく、筒はデザイン画などを入れるケースだろう。

「ヒカリさんも、今帰り？」

「うん」

彼女はそう言って笑うと「何処かでお茶でもする？」

僕たちは小さなビルの二階にあるカフェに入った。夜はバーとして営業しているそこは、通りに面した壁面が全てガラス張りになっている。

ガラスは薄いスモークで日光を遮り、店内は全て間接照明の為、外に比べるとほの暗い演出になっている。

「ラッセン、好きなの？」

「えっ、どうして？」

「いや、部屋に飾ってあったから」

「ああ、あれね」

彼女はそう言って一瞬視線を窓の外に向けると

「うん。もらい物だけど」

ちよっぴり意味深な言い方に、僕は密かに勘ぐっていた。それもきっと、あの夜聞いた彼女の言葉と果敢なげに零れた涙のせいだと思う。

「彼氏？」

「昔のね」

「そう」

僕はさりげない相づちで切り抜けた。

彼女は、昔の彼氏を今でも忘れられないでいるのだろうか。

「誰かのモノって、欲しくなっちゃうよね」

「えっ？」

「ううん。何でもない」

ヒカリはそう言って微笑むと、アイスカプチーノに口を着けた。

◆第63話◆

ヒカリが画材店へ行きたいと言うので、暇を持て余していた僕はすんなりと彼女に付き合っ、カフェを出ると路地を渡った。

サンシャイン通りから中池袋公園に向かって路地を入って少し行くと、輸入雑貨と一緒に輸入画材を取り扱う専門店が在った。絵心の無い僕は、その小さな店の存在すら知らなかった。

なるほど、店内には僕にも見覚えのある人気画家の作品をリトグラフにした物も多数販売されていた。

ヒカリは外国製のパステルペンシルのぼら売りを物色している。いわゆる色鉛筆だ。

駅ビルにも似たような店がテナントで入っているが、何か彼女にこだわりがあるのだろうか。僕は店内の狭い通路をうろついて時間を潰す。

その店を出た頃には、もう西陽も暮れかけて街路灯に灯が入りだしていた。

公園側に向けた僕の目に、どうにもアヤシイ二人組みの男が映った。

……あんな所に立って何をしているのだろうか。ナンパには見えない。

しかし、直ぐにその理由が判った。

ドレッドを巻いた男がその二人組みに近づくと、素早く何かを渡した。

二人組みの片方が素早くそれを確認して数えている。札だ。

そして、もう一人が素早く小さな袋をドレッドの男に手渡した。

僕は視線を固定しないように辺りを眺めるふりをしながら、ゆっくりとした動作でそれを盗み見る。

ドレッドの男が足早に立ち去り、二人組みは再びその場に立って辺りを覗う。彼らの顔がこちらを向いたので、僕は携帯を取り出す

動作と共に視線を反対側の建物に移した。

その時、会計を終えたヒカリが店の外に出てきた。

「お待たせ」

「おう」

「里見くん、どっか寄りたい所ないの？」

「えっ、あ、俺は別に」

僕たちは駅前通りに向かって歩き出した。

……あれがそうだ。こういう奥ぼった路地で売買してるのか。僕は確信にも似た思いだった。

あれは明らかに違法な物品の売買現場だった。そして、真っ先に考えられるのはドラッグ。今更違法テレカも無いだろう。

僕が一度だけ振り返った遠くに霞むような暗闇には、あの二人組みに再び近づく誰かの姿が映っていた。

「どうしたの？　きれいな人でもいた？」

「えっ、いや」

ヒカリは笑って「それとも売人でもいた？」

「知ってるの？」

「えっ？」

彼女は自分の些細な冗談に対する僕の反応に、一瞬困惑した。

「売人って」

「ああ、何処にでもいるじゃん。池袋でも公園の近くの路地は有名なだよ」

「エスかな？」

「さあ、トルエンかもね」

ヒカリはそう言って僕に笑いかけた後、不安げに表情を曇らせて「まさか里見くん、あんなの買ってないよね」

「まさか」

「学校でもさ、手を出してる人いるから。最近は身近な人でも興味本位で手を出してたりして怖いよね」

僕は「そうだね」とだけ相づちをうち

「腹減らない？ 何か食べようよ」

話題を直ぐに変えた。

身近な人。そう、僕の身近な人もドラッグに溺れてしまった。そして、それに関わった聡史は命を失ったのだ。

「あれ？ 新しい彼女？」

サンシャイン通りに出た所で秋夫にバツタリ出くわした。

「ははあん、姉貴のいない間に浮気だ」

「違うよ、バイト仲間の娘さ」

僕は秋夫に言い訳をしなければならなかった。

「そうやって、職場で手え出しまくってたりして」

秋夫はポケットから出したタバコを咥えてそう言った。

「馬鹿なこと言うな」

僕は彼の咥えたタバコをパッと口から引き抜いた。

「年上だぞ。彼女に失礼だろ」

「年なんて関係ないじゃん」

秋夫にしてみれば、その通りだろう。

「私服なんか着て、学校行かなかったのか？」

僕は少々苦し紛れにそう言ったが、どう見ても彼が学校帰りには見えないのは確かだった。

「今日は創立記念日で休みさ」

秋夫はそう言いながら、周囲の人波を視線で追った。

「姉貴に頼まれて、あんたを尾行してたんだよ。今まで気付かなかった？」

「はあ？ ウソだろう」

僕は、僅かながらたじろいだ。

「ウソに決まってるだろ。誰がそんな暇な事」

秋夫は微かな笑みを浮かべると、通りの向こうへ渡り路地へ入って消えた。

「あれ、もしかして榛菜さんの弟さん？」

ヒカリが言った。

「あ、ああ。よく判ったね」

「秋とハルで解り易いジャン。それに、職場で手え出しまくって」

「いや、手え出しまくってわけじゃないよ」

「判ってるよ。彼女は特別なんですよ」

「いや、特別っていうか……あれ？」

僕はふと気付いてヒカリに訊き返した。

「俺とハルが付き合ってるの、知ってた？」

「判るよ。何となくね。あたしもハルくんって呼んじやおうかな」

ヒカリはそう言って笑うと「何食べて行こうか？ ハルくん」

◆第64話◆

僕は池袋で見かけた売人の姿が頭から離れなかった。

接触する方法はあるか？　何かを訊きたい。聡史の事、ケンイチの事。

僕は翌日、バイトの時間ギリギリまで池袋の公園近くをうろついたが、その日は彼らに出くわす事は無かった。

ギリギリに店に入った僕は慌ててタイムカードを押して着替える。ヒカリは、もうテーブルのセッティングを済ませていた。

「ギリギリセーフね」

フロアーに出た僕に、ヒカリはそう言って笑った。

「珍しいじゃない」

「あ、ああ。ちょっと急用があつてさ」

何時もと変わらない時間が何時もと変わりなく流れていく。

僕は時々主のいないアップライトピアノを知らず知らずのうちに眺めてしまう。日曜日まではこの眺めが続くと思うと、少しだけ淋しい気持ちになる。それは、榛菜に会ったばかりの頃、彼女が指を怪我して数日間来なかった時の比ではなかった。

しかも、今はどう頑張っても自分から会にはいけない。

「なに、元気ないなあ」

ヒカリは僕の背中をパンツと叩いて笑った。

お客が引いた隙に休憩を貰って裏でまかないを食べていると、ヒカリが入ってきた。

「あたしも、今のうちに休めってさ」

彼女はそう言いながら僕の前に腰掛けた。

「ねえ、今晚また呑みに行かない？」

「ええっ？」

「なによ、せっかく彼女のいない寂しさを紛らせてあげようかと思つたのに」

「別に淋しくなんか……」

「はいはい。いいじゃん、付き合つてよ」

「わかった、行くよ」

僕はそう言つて笑いながら席を立つと

「でも、ほどほどにしてよ」と彼女の小さな背中を突いた。

その晩はお客の引きが少し早かったので、僕とヒカリは十一時頃一緒に上がりとなった。

「あれ？ 里見くんバイクは？ と言うか、制服じゃ飲み屋いけな
いじゃん」

「あ、そうだ……」

僕は思わず自分の身形みなりを見回した。今日は時間がギリギリだった
為、家に帰っていない。

「はあ……」

ヒカリは思わず溜息を漏らした。

「じゃあさ、ウチで呑もうか」

「えっ？」

「帰りはあたしの自転車で帰りなよ」

彼女はそう言つと

「さ、行こう」

そう言つて、自転車の荷台に先に座つた。

どうしても、誰かと呑みたい気分なのだろうか……

途中、酒を置いているコンビニで買い物をする間、僕は外で待つていたりして何だか少し面倒だけど、それはそれでちょっとだけ楽しかったりする。

何だかイケナイ事をしているみたいで……もちろん僕の飲酒は違法だが、そんな表面的な事じゃなくて、そう、不倫カップルってこ

んな心情なのだろうか、少しだけ共感してしまった。

ひと通り買い物を済ませると、彼女を後ろに乗せて自転車のペダルをこいだ。ヒカリがさり気なく僕の腰に添える手が、少しだけこそばゆかった。

彼女の部屋は二度目だ。

エレベータに乗った時、既にあの時の彼女の部屋の匂いを思い出していた。

ヒカリに促されて部屋に入ると、僕の記憶と一致するその匂いは、ちよっぴり懐かしいものに思えた。

彼女はグラスを出して、おつまみを広げる。練馬の駅前の屋台で焼き鳥も買ってきた。

僕はグラス一杯で直ぐにメインをコーラに切り替え、彼女はチュウハイとビールの空き缶が増えるたびに、次第に陽気になってゆく。ヒカリの机の上には、見たことも無いような定規が沢山置いてあった。

「これ、何に使うの？」

僕は立ち上がると、雲のような多彩なカーブで模られたモノを手にとった。

「それ、雲形定規よ」

「雲形？ 見たまんまの名前だ」

僕は思わず笑った。

彼女も立ち上がって僕の傍に來ると

「色んな曲線をこうやって、定規を組み合わせて引くの」

彼女はそう言って、数枚の雲形定規を並べて見せた。

ヒカリは肩が触れ合うどころか、髪の毛が触れ合うほど僕に近かった。彼女の火照った体温が微かに感じ取れた。

僕は、意識しないように心がけるが、微かに鼓動は高鳴っていた。そして彼女は突如、僕にキスをした。

僕は不意をつかれて一瞬嘔然として立ちすくんだ。そのまま僕の手を強く引いたヒカリは、ベッドに転がった。

僕はバランスを崩して彼女に覆いかぶさったが、両手を着いてヒカリにもたれ掛かるのを防いだ。

「な、なんで？ 俺、榛菜と付き合ってるよ。ヒカリさん酔ってる？」

僕は前回以上に動揺していた。今のヒカリの意識ははっきりしている。

彼女は陽気に声を弾ませて

「言ったでしょ。他人のものは欲しくなるって」

「彼氏の事、忘れられないんじゃないの？」

彼女は真顔になって「だから、忘れさせて」

酔い痴れたように潤んだ瞳には、天井に吊るされた照明がゆらゆらと映りこんでいた。

◆第65話◆

沈黙が流れた。

それは、一瞬のようで永遠のようでもあった。

僕の中に葛藤が無かったと言えば嘘になるだろう。榛菜にばれなければ別にいい。そんな気持ちが入み上げたのも事実だ。

だって、ヒカリは大人の魅力と可愛さの両方をバランスよく兼ね備えている。榛菜にはない、成人した女性の匂いが僕を惑わす。

同じ女性なのに、二つ年上というだけで未知の領域に踏み込むような錯覚。彼女と身体を交えれば大人の世界を垣間見れるような、そんな愚鈍な思考が過る。

二十歳の彼女は、高校生の僕にとって明らかに成人という仕切りを隔てた大人なのだ。

黒いキャミソールのレースの隙間から覗く胸元は、日焼けも取れて白さが目立っていた。

その肌に唇を着けたい欲望は、心の隅で小さく広がる。

……少しくらい他の誰かと経験を増やしても、今時それに罪の意識を感じる事は無い。僕の中で一瞬誰かが囁く。いや、それは自分の声だった。

もし榛菜が知ったら、今度は彼女を苦しめるぞ。頭の中で複数の声が一瞬で飛び交う。

ヒカリは呆然とする僕のシャツのボタンをさり気なく外し始めていた。

ハッ和我に帰り、彼女の手を掴むとゆっくり振りほどいた。

「ごめん……俺、不器用でうまく出来ないと思う」

「大丈夫よ、今夜はあたしがリードするから」

「いや、そう言う意味じゃないって」

僕は、彼女の捉え方に思わず笑って立ち上がった。

彼女は行為そのものを、僕が苦手としていると思ったようだ。

「浮気が下手ってことさ」

自分の行動で、再び誰かが傷つく事がやっぱり怖かった。今ここで踏みとどまるのがベストな選択だと思った。

「あつ、ごめん。そう言う意味だったの」

彼女も自分の勘違いに気付いて、酔った頬をより紅潮あかくすると、思わず笑った。

僕はテーブルのコーラを手にとってグツと喉に流し込むと、気持ちを落ち着かせる為に大きな窓を開けてベランダへ出た。

メンソールのタバコに火をつけて、深く吸い込む。

「あああ、いいな。榛菜さん」

ヒカリはベッドからズリ落ちるように、そのまま床にペタリと座ると、溜息混じりで天井を見上げた。

「ご、ごめん……」

思わず僕は、ベランダから呟いた。

半分吸ったタバコを空き缶でもみ消すと、部屋へ戻って床に腰をおろす。

少しテーブルから離れる僕を見てヒカリは

「もう。里見君ったら、無理やり襲ったりしないわよ」

悪戯っぽい笑顔で、僕を睨んだ。

そんな言葉と仕草で、ぼつの悪い空気は吹き飛んだように感じた。ヒカリの元彼は、美容専門学校に通うかなりのイケメンで、他からもかなり羨ましがられたそうだ。それは彼女の自慢でもあり、彼と一緒にいる事でヒカリ自身も優越感を得ていたらしい。

しかし、最後は知り合いの女性にあっさり寝取られ、かなり酷い目にあったという。

「だからって、榛菜さんにも同じ思いをさせようとしたわけじゃないからね」

彼女は慌てるように言った。

「ガードが緩いって言うか、自然体なのよ。里見君って」

「そ、そうかな。俺もいろいろ考えてるんだけど」

「じゃあ、それが表に出にくいのかな」

……そうなのか？

「ごめんね、何だか里見君といると、彼の事忘れていられたから……だから、つい」

彼女は俯いたまま、テーブルの水滴を何気なく指で拭うと

「やっぱり、今日も少し呑みすぎたのかな」

そう言って、自分のグラスにウーロン茶を注ぎ入れた。

一線を越えずに彼女の心を励ます方法は、今の僕には判らなかった。

大人になればなるほど、一線を越える行為で心の隙間を埋めようとしてしまうのかもしれない。

彼女は、本気で誰かを好きになる事が怖いと言った。再び誰かに取られるのが、怖いのだそうだ。

それは言い換えれば、僕を特に好きではないと言う事の証のようで、何だかちよっぴり残念な気持ちになったのは確かだ。

それとも、既に誰かのものなら、初めから取られる心配が無いという事なのだろうか。

「き、気晴らしなら、何時でも付き合うよ。こんど、バイクでお台場でも行く？」

「社交辞令なんて、苦手なくせに」

ヒカリは目を細めて笑った。

「いや、別に社交辞令ってわけじゃ……」

僕は、さっきヒカリの開けたウーロン茶のボトルを手にとって、自分のグラスに注いだ。

「彼女……榛菜さんは左脚が少し不自由なの？」

「えっ？ あ、ああ」

少し……あれは少しなのだろうか。彼女は気を使って「少し」と表現したのだろうか。もちろん、その片脚が無い事を、ヒカリは知らない。

「善くなるの？」

「いや、判らない」

……善くはならない。榛菜の脚は一生あのままだ。

「よくなるといいわね」

僕の言葉数の少なさに、ヒカリはそれ以上榛菜の事は質問しなかった。

「俺、そろそろ帰るよ」

僕は時計を見ながら立ち上がった。

深夜の二時を少し回ったところだった。

一緒にエレベーターに乗って一階の駐輪場まで送りに出てきたヒカリは、少し上目遣いで僕を盗み見るように見上げると

「明日からも、今まで通りでいられる？」

彼女は少し不安な笑みを僕に投げかけた。

「ああ。だって、俺ら何も無かったじゃん」

僕は無理にさり気ない口調で返した。

何事も無かったように会話を続けた僕たちだったが、彼女なりに気まずさを感じているようだった。

……キスぐらいはいいだろう。

「そ、そうだよ。無かったよね」

ヒカリは少し引き攣った笑みを浮かべた後、何だかホッと息をついたように見えた。

僕は、彼女の自転車に乗って、夜の帳をゆっくりと家路に向かった。

◆第66話◆

夕暮れの街は、喧騒と慌しさに満ちている。朧に輝く街の灯に照らされながら、昼の顔と夜の顔が複雑に絡み合って交差する。

僕は翌日も池袋をうろついていた。それまでほとんど通った事の無い細い路地を選んで歩き回った。

しかし、それらしい男たちは見つからなかった。あやしい連中と言えば、出会い系や風俗のチラシ配りくらいだ。

ケンイチがどうしてあんな事をしたのか……何故ドラッグの売人と関わっていたのか。彼も、ドラッグに溺れた犠牲者なのだろうか。小学生の頃、ちょっとした悪事は僕や聡史と行動を共にしたが、何時も宿題をしない僕らとちがって、ケンイチはしっかりと勉強もしていた。六年の時には、全学期通してクラス委員をやったほどだ。そんなアイツがどうしてドラッグに関わり、何故犯罪に足を踏み入れてしまったのか。

そんな疑問が焦燥感を煽り、僕を突き動かしていたのかもしれない。

「あれ？ キミ」

誰かが声をかけてきた。

振り返った先には一瞬誰も見えない。

声をかけて来た人は車椅子に乗っていた。

「キミ、確かハルちゃんの」

以前、池袋ですれ違った車椅子の男だった。確か、飯塚っていったっけ。

「前にすれ違ったよね。彼女はあの時人違いって言ってたけど、その後彼女と歩いてるのを見かけたし」

彼の車椅子を笑顔で押す榛菜の姿に、僕は嫉妬を抱いてシカトしたのだった。

僕はほとんど初対面の彼と何を話せばいいのか判らずに困惑した。

「ハルちゃんは元気？ 最近ボランティアにもあまり参加しないから会う機会も無くてね」

「今、修学旅行に行ってます」

「そう」

彼は僕が歩いていた事に気を使ったのか、そう言いながら前に進み始めた。

「駅に？」

「はい」

車椅子のスピードは思いのほか速く、向こうが僕の足取りに合わせていた。

「ボランティアって、どんな？」

「ああ、障害を持った人たちに楽しんでもらう為のイベントが多いかな。紙芝居や人形劇。七夕には屋台祭り、クリスマスにはパーティー」

彼は僕をチラリと見上げると

「ほら、俺なんか自分でたいがい事が出来るけど、自分ではどうにも身体の動かせない人たちも沢山いるから。そう言う人たちはストレスを抱え易いんだ」

「ハルも、紙芝居や人形劇を？」

「ああ、彼女はたいがいエレクトーン係りだね。今のところ、彼女より上手に弾ける仲間はいないから。時間があると、仲間にエレクトーンを教えたりもしてるよ」

僕には判らない世界を、彼と榛菜は共有している。しかし、決して嫉妬を感じるような世界ではない。

「みんな、障害者だけで？」

「いや、健常者のボランティアの方が多いよ。僕らに出来る事も限られるし」

僕はバイトの時間を気にして、彼に判らないようにチラリと腕時計を覗き込んだ。まだ、時間は大丈夫だ。走る必要もないだろう。

「足、怪我したって？」

「えっ？」

「夏に彼女と会った時、ハルちゃん心配してたから」
飯塚は再び僕を見上げて「もう、怪我はいいの？」

「え、ええ。もうすっかり」

榛菜は僕の事を周囲に何と言っているのだろう。彼氏と言っているのだろうか。

僕の知らない場所で榛菜の口から語られる僕の姿は、いったいどんな感じなのだろう。

バイクを乗り回すちょっと不良っぽい彼氏……それとも、彼女を支える優しい年上の彼氏……いや、まさか身体の関係をやたら迫るエロい男？　僕の中で僕の知らない榛菜が妄想となって色々な僕を描き出す。しかしそれは、全てが僕自身だ。

「あ、俺こっちだから」

飯塚は大通りの交差点まで来ると、横断歩道を渡らずに向きを変えたので、僕は軽い会釈で彼を見送った。

車椅子に乗った彼の姿は、暮色の人混みに直ぐにかき消された。

土曜日の夜、バイトから帰ると僕に小包が届いていた。

差出は七倉榛菜だった。クール便のシールが貼ってある小荷物は、長崎県から発送されていた。

修学旅行の出先からわざわざ何を送って来たのか？　僕は彼女のちょっとした悪戯か何かかと思いつながら包みを開ける。

頑丈なガムテープを剥がし終えた時、携帯電話が鳴った。

「もしもし、あたし」

榛菜の声だった。

この数日間電話で何度か話しているが、何だか声まで遠くに感じていた。

「今日帰って来たよお」

「ああ、お帰り」

彼女の声はとても近くに感じた。

「あつ、もう昨日か」榛菜が言い換える。
ちようど日付の変わる時間だった。

彼女の声は心なしか弾んでいて、それが修学旅行の余韻なのか、何時でも僕と会える距離に戻って来た嬉しさの現われなのかは判らない。

ただ、僕が後者と同じ喜びを隠して、無理に声を落ち着かせていたのは事実だ。

「荷物届いた？」

「えっ、ああ、今開けてる」

「ホテルから送るのけっこう恥ずかしかったんだからね」

「何送って来たんだよ？」

「ああつ、ハルくんもしかして忘れてる？」

電話で話しながら開けた小さなダンボール箱の中には、長崎ちゃんぽんと博多ラーメンの詰め合わせが入っていた。

◆第67話◆

週が開けても僕は、夕方に池袋の路地裏をうろつく行動を続けていた。

いったい何時までこんな事を続けるつもりなのか自分でも判らない。もしかして、聡史もこんな当ても無い事を繰り返していたのだろうか。

水曜日、先週と同じ曜日に彼らはそこにいた。

ほの暗く蔭った道を、僕は彼らに向かって歩いた。

「あの……」

「おっ、新顔」

向かって左側にいた坊主頭に顎鬚を生やした男が言った。耳に大きなピアスを着けている。

近くで見ると、二人共そんなに老けていない。せいぜい、僕の二つか三つ年上といった感じか。

「何か探してる？」

「エスがありますか？」

「制服はやばいなあ。誰かに聞いてきたの？」

右側にいた金髪の男がそう言って笑った。少し長い髪をオールバックに流している。

僕は手っ取り早く掛けに出た。他には言葉が思いつかなかったのだ。

「ケンイチの昔のダチなんすけど。俺」

「ケンイチって……」

そう言い掛けた坊主頭の男を、金髪が制した。

「悪いけど、俺らそんな奴知らねえし」

「ああ、そうすか」

感触はあった。こいつらはケンイチを知っている……彼らの態度がそれを物語っていた。とりあえず今はそれだけ判ればいい。

「じゃあ、またそのうち私服で来て見ます」

「木曜と土曜は公園の反対側だぜ」

坊主の男が言った。

僕は愛想を振り撒きながら、その場を後にした。

「お前、アイツの事は口にするなって言われたろ」

「おお、わりい」

後から微かに、しかし確かにそんな会話が聞こえた。

「ハルくん」

表通りに抜ける手前で声をかけられた。それが榛菜の声だと直ぐに判った。

僕が振り向くと、ほの暗い路地にあるタバコの自販機の陰に彼女は立っていた。

「な、なんだよ。こんな所で何やってんだ？」

「ハルくんこそ。何してたの？」

「いや、別に……池袋探検……かな」

僕は冗談混じりにそう言うと、彼女を促して歩き出した。

「あの人たち誰？」

「あの人たちって？」

榛菜は僕の腕を強く掴んだ。

「ごまかさないで。あれって、薬物とかの売人じゃないの？」

「お前こそ、何こそこそつけてんだよ」

質問をはぐらかす僕に、榛菜は

「クスリ……買ったの？」

彼女の心配は他所よそにあった。何か勘違いしているようだった。

「お前、何か勘違いしてるよ」

僕はそう言って笑うと

「俺がドラッグなんか買うわけないだろ」

「じゃあ、何話してたの？」

「話してないよ」

「話してた。あたし見てたもん」

榛菜の困惑した表情は変わらなかった。

「日曜日にボランティアの友達にお土産渡しに行ったら、ハルくんに会ったって聞いて」

「ああ、飯塚さん。それで俺のことつけてたのか？」

榛菜は小さく首を横に振った。

「月曜日に亜貴も見かけたって。変な路地から出てきたって言った。ハルくん最近何時も遅刻ぎりぎりでバイトに来るってヒカリさんが言ってたし、何してるのかと思って」

榛菜はそう言って少し俯くと

「黙ってつけたのは、ごめんなさい」

「ハルが思ってるような事は何もしてないよ」

僕は再び笑うと、彼女の頭にポンツと手を乗せた。

「じゃあ、何してたの？」

僕は、彼女に話すかどうか躊躇したが

「聡史を殺した連中さ。それを探ってる」

「えっ？」

榛菜は再び困惑した表情を見せた。

「犯人は捕まったじゃない」

「あれは違うよ。いや、刺したのはあいつかもしれないけど、それを命令した奴は他にいる」

「そんな事調べてどうするの？」

僕は榛菜の問いかけに一瞬戸惑いを感じた。

それを調べてどうする……？　僕はいったいどうするつもりなのだろう。

「復讐するの？」

「いや……わかんない」

その言葉を口にして、僕はふと聡史を思い出して立ち止まった。あの時、クスリの売人を見つけたと言っていた時の聡史と同じセリ

フを吐いた自分にゾツとしたのだ。

「行こう」

僕は榛菜の手を掴んで立ち止まった足を前に踏み出した。

僕は復讐しようとしているのだろうか。

警察に通報しても、掴まる可能性は少ない。おそらく彼らは、次々と場所を変えているのだろうし、路地に立っているのはほんの末端の連中だ。

榛菜の心配そうな視線を感じながら、僕は彼女の手を握ったまま駅まで歩いた。

◆第68話◆

朝の電車はまだ蒸し暑さを残していた。相変わらず中年サラリーマンの體えた臭いと女性の香水が入り混じって悪臭に包まれる。

池袋の駅で西武線の改札を抜けると、そこには榛菜が立っていた。「どうしたんだ？」

彼女は近づく僕を無言で見上げた。

「もう、犯人探しなんてやめて」

「何だよ。別に犯人探してわけじゃ」

「同じだよ」

「俺の勝手だろう」

僕は真っ直ぐ見据える榛菜の視線が痛くて目を逸らした。周囲を無造作に見渡すと、行き交う人波の視線がこちらに注がれている事に気付いた。朝っぱらから痴話げんかと思われてるらしい。

「最近のハルくん変だよ」

榛菜は僕の腕を掴んだ。彼女が本気を意思表示する時の癖だ。

「聡史君の事は気の毒だけど、ハルくんにまで何かあったら……」

「別に何もないさ」

行き行く人の視線が煩わしくて、僕は余計に苛立ちを露にした。

「人って簡単に死んじゃうんだよ。聡史くんだって……」

「俺が死ぬわけないだろ」

「そんなの判んないじゃない。危ない事は止めなよ」

「うるさいな。しばらくほっといてくれ」

彼女の腕を振り払って僕は歩き出した。

榛菜が到底追いつけない速さで。

一瞬視界の片隅に見えた榛菜の悲しい表情は、今まで見た事の無いものだった。

空は淀んだ暮色に包まれていた。街路灯が薄っすらと路地を照らして、その二人の男の影を映し出している。

時折行き交うまばらな人波の中、度々足を止める顧客と二人の男は取引を繰り返す。

僕は、ポケットに入れた手が触れる冷たいものを確認していた。ずいぶん前にアメ横で買ったジャックナイフ。

今朝榛菜にあんな事を言われた後だが、知り得るだけの事は知っておきたい。

心の奥に仕舞ったはずの聡史の影と、一緒に遊んだ頃のケンイチの笑顔が、まだ僕を突き動かすのだ。

公園を挟んで昨日とは反対の通りに彼らはいた。昨日言った事は本当だったのだ。僕が顧客になることを少しは期待しているのだろうか。

僕は駅ビルのトイレで、今朝持ってきた私服に着替えると、陽が暮れるのを待ってここまで来た。

今日を逃したら、またあの二人を見失ってしまうような気持ちに追い立てられていた。

ナイフは護身用。あくまでも身を守る為だ。榛菜が言ったように、聡史の二の舞にならないとも限らない。それは自分でも判っていた。それでも彼らにはもっと訊きたい事がある。

殺伐とした景色が、咽返すような濁った空気と共にゆっくりと動いて近づいてくる。まるでカメラのレンズ越しに見た風景を、静かにズームインしているようだ。もちろん、近づいているのは僕自身なのだが……

後ろを通り過ぎる女性の甲高い笑い声が夕暮れの路地を震わせて、やたらと耳に響いてきた。

彼らとの距離が縮まるにつれて心臓の鼓動が高鳴り、その振動と音は全身の隅々まで伝わり、僅かに身体の震えを誘発させる。

昨日に比べても明らかに緊張している。ポケットに入れた両手の平に汗が滲んでいるのが判った。

それはきつと、彼らがケンイチの事を知っているのだと既に判っているから。そして聡史の事も知っている……いや、殺人そのものに関与しているかもしれない。

そして僕は、充分に脅えている。これから何が起きるかまったく想像が出来ない恐怖が、僕を支配してゆく。

さりげなく歩く僕に彼らは目を止めなかった。

あと三十メートル。着替えた私服とほの暗い闇が、昨日会っている僕を彼らから隠しているのだろう。

それとも、彼らはいちいち人の顔など覚えていないのかも知れないが。

その時、ジーンズの尻のポケットの中で、携帯の着信バイブが振動した。

……なんだ、こんな時に。

僕は直ぐ横に在った雑居ビルの入り口に身体を隠すように入り込むと、携帯を取り出して開いた。

……『公衆』

公衆電話からだ。誰だ？

「もしもし」

「ああ、里見くん？ よかった連絡ついて」

榛菜の母親の声だった。彼女は言葉を続けた。

「榛菜が……」

「えっ？」

「下校途中の歩道に車が突っ込んで怪我を……右脚を……」

「右脚？」

途端に僕の身体が震えた。さっきまでの震えとは全く別のものだ。目の前の景色が急激に遠のいて息が止まりそうだった。いや、過呼吸だったかもしれない。

彼女にはもう右脚しかない……その右脚を？

僕は駅に向かって走っていた。

目の前にいたドラッグ密売の二人組みはもう眼中には無かった。山手線に飛び乗って上野まで行くと、彼女達が運び込まれたという病院まで再び走った。

夕闇に行き交う通行人を強引に掻き分ける。

こんなに走ったのは何時振りだろう。体育の授業でも本気で走った事などここ数年無い。

僕はその時、いったいどんな表情で走っていたのだろう。周囲の視線が、何事かと僕に注がれているのだけがはっきりと認識できた。きつと、焦燥感と不安を徐に露出して酷い顔だったに違いない。

亜貴ともう一人のクラスメイトと一緒に大通りを渡ろうと信号待ちをしていた榛菜は、暴走して歩道に乗り上げて来た乗用車になぎ倒された。学年の違うもう一人の娘を含め、合わせて四人がいつべんに車に撥ねられたと言うのだ。

僕が院内に入ると、急患用の救護室周辺は騒然としていた。榛菜と同じ高校の制服がうろついているのが直ぐに目についた。

膝や肘のあちこちにバンソウコウや包帯を巻いて涙を拭う者、そしてしきりに何かを話している娘たちの姿。

事故当時はちょうど下校時間だった為、その周囲にいて負傷した娘は榛菜たち以外にもいたようだ。

辺りを見回すが、そこにいるのはみな怪我の軽い連中だった。

「すいません、怪我の重い人は？」

肩で息をつきながら、近くの看護師を捕まえて訊く。

「二階の処置室へ運ばれましたよ」

僕は直ぐに階段を駆け上がった。

二階は一階ほどの慌しさは無く、寧ろ不気味に静まる廊下に、カチャカチャという金属が触れ合う音と、医師や看護師の声がこちらから零れるように響いてきた。

榛菜の母親が通路に立っているのを見つけて駆け寄る。

「榛菜は？」

「右脚の複雑骨折ですって」

「複雑……？」

それを聞いた瞬間、暗たんとした思いが一瞬頭を駆け巡り、狭窄きょうさく感のある廊下が歪んで見えた。

「これからオペよ」

「これから？」

「頭を打って容態が少し不安定だったから様子を見てたの」

榛菜は頭にも怪我を負って、その処置を優先したらしい。ちょうどそれが終わって、緊急オペに入る所だった。

処置室からオペ室へ運ばれる榛菜が、ストレッチャーに寄せられて出てきた。キャスターを引きずる音が廊下に響き渡る。

頭部からの出血が髪の毛に付着して、顔はエタノールで拭いてもらったようだが、まだ所々に紅い物が残っていた。

母親はオペ室の前まで彼女を追いかけて見送った。

僕は今朝見た榛菜の悲しい顔だけが脳裏に蘇えり、その場に立ち尽くしたまま彼女が最後に掴んだ自分の左腕をそっと触っていた。

『苦労は買ってでもしろ』小さい頃に、誰かに言われた記憶がある。

学校の先生かそれとも父親か、誰に聞いたのか忘れてしまったが……でも、どうして……何故榛菜にこれ以上の苦悩を与えるのか。

そんな必要があるのか。

うつくつした思いだけが、僕の全てを呑み込んだ。

彼女の笑顔を、僕は再び見る事が出来るだろうか。

◆第69話◆

「これから右脚の骨折部位の修復手術に入ります」

執刀する医師が簡単な説明をする為に、僕たちの前に現れた。

僕は榛菜の母親より先に口を開いた。

「先生……アイツには、榛菜にはもう右脚しかんだ。必ず元通りにしてください。残りの脚を奪わないでください」

僕は今朝の行動を悔やんでいた。榛菜に追いつけない速さで彼女の前から立ち去った自分を後悔していた。

榛菜の脚が不自由だと判っていないながら、健常者の早足にはついて来れない事を知りながら、僕は彼女を振り払う為に禁じ手を使った。酷い事をしてしまったと悔いても、自分が許せなかった。

「俺、今朝彼女に酷い事を……」

「里見くん」

榛菜の母親は僕の腕を掴んだ。

「同じ部位を二カ所以上骨折している場合、複雑骨折と言うんです。彼女の場合ひざ下の二箇所、腓骨ひづこと脛骨けいこつの両方が折れてます。」

目の前の医師は、冷静な口調で言った。

「ひ骨とけい骨？」

「ひざ下は、細い腓骨と太い脛骨の二本の骨で形成されています。普通折れ易いのは細い腓骨の方です。両方折れた場合は複雑骨折と診断されます。しかし必ず元にもどりますよ」

医師は僕を真剣に見つめると「大丈夫。ちゃんと歩けるようになるから」

僕は一時的に込み上げる安堵の涙を流していた。それは、隣にいた母親も一緒だったに違いない。

執刀医は簡単な術式等の説明の後に、準備室へ向かった。榛菜の母親は、看護師に書類を見せられた後、彼女に促されてナースステーションに入って行った。

僕は蛍光灯の明かりが映り込むリノリウムの床に、独り立ち尽くしていた。

一瞬の静寂の中で、僕は何を思えばいいのかさえ判らない。そこへ亜貴を乗せたストレッチャーが運ばれて来た。

彼女の意識はしっかりしていて、僕に気付いたらしい。亜貴は右腕をギブスで固定されていた。

彼女は怪我していない左手で僕の手を掴むと

「ハルは？ ハルは何処？」

「今治療中だ」

「ごめんね……ハルを庇う暇がなかったよ……」

彼女の瞳から涙が溢れて、次々に頬を斜めに伝った。

「大丈夫だよ、榛菜も無事だから安心して」

僕は両手で亜貴の左手を包み込むように掴んだ。榛菜の右脚の事は言わなかった。

しかし、彼女は

「ハルの脚がおかしな方向に曲がってたのが見えたの。でもあたしには何も出来なくて……救急車で救護の人の話し声が聞こえたんだよ。ハルの右脚が折れてるって」

僕の手の中で、亜貴の手に力が入った。

「どうしよう……ハルの右脚も無くなったらどうしよう」

彼女は興奮して身体を起こそうとしたので、看護師がそれを制した。

「大丈夫。ハルの右脚は無くならない。ちゃんと治るって、さつき医者が説明してくれた」

そう言って亜貴を励ます僕の目にも、再び涙が込み上げていた。まるで僕自身に言い聞かせている言葉のようだ。

それでも僕は、亜貴の頭をそっと撫でてあげた。頬と目の上に擦り傷があって痛々しかった。

僕の病んだ魂を抱きしめてくれた彼女を、僕が今癒さなければいけないと思った。

「大丈夫だから。亜貴も自分の怪我を早く治して」

ゆっくり僕の手を離した亜貴は、病室へ向う為、静かにエレベーターに運ばれて行った。彼女の両親は今やっと着いた様子で、娘を追いかけるようにエレベーターへ乗り込むのが見えた。

車に直接撥ね飛ばされたのは、榛菜を含めて四人だが、他にも信号待ちしていた人は数人いて、かすり傷などの軽い怪我を負った娘は五人いた。

車に撥ねられたもう一人のクラスメイトは一番怪我が軽く、頭部と全身の打撲だけで済んだらしい。しかし彼女らとは学年が違うもう一人、一年生の娘は、病院に運ばれてから亡くなったそうだった。

病院へ来たそれぞれの親たちは、自分たちの娘に起きた突然過ぎる出来事にみな驚愕していた。

亡くなった娘の両親が泣き崩れる姿は、とても見ていられるものではなかった。僕のいた二階のすぐ傍にICUがあり、そこにその娘がいたからだ。

廊下に響き渡る母親の号泣が、しばらく耳から離れなかった。

「里見くん。一度家に帰ったら？」

オペ後に運ばび込まれた榛菜の病室にいた僕に、彼女の母親が声をかけた。

「いえ、大丈夫です」

「お家には連絡したの？」

「いえ……忘れてました」

僕は俯いたままポツリと言った。

「一度家に帰って、心配なら明日また来なさい。学校終わってからね。何かあったら連絡するから」

彼女は僕の肩に優しく触れながら言った。

榛菜は容態が安定するまで個室に入れられていた。麻酔が切れる頃になっても意識は戻らない。バイタルが安定しているので心配するほどではないそうだが、彼女の意識が戻るまでここにいたい気持ちもあった。

今朝、榛菜の手を振り解いた時に僅かに見えた彼女の不安と悲壮の顔。逸らした視線の片隅に映ったその小さな記憶は、僕の脳裏に焼き付いて離れない。

「俺、今朝ハルとちょっとした喧嘩になって……俺、ハルの歩けないスピードで立ち去ったんです。俺って、酷い奴です」

僕は奥歯をかみ締めながら呟いた。

「そんな事、ハルは気にしないの知ってるでしょ」

そう言って僕の肩に両手を添えた母親は話し続けた。

「ハルは脚を失った時、一時的に笑顔を失ったわ」

「ハルが？」

「当然よね。ある日突然片脚が無くなったんですもの。大人だって耐えられない」

僕はその時初めて榛菜が脚を無くして入院した当時の話を聞いた。彼女に笑顔を分け与えてくれた工藤エリという少女が、既にこの世にいない事も。

人は簡単に死んでしまう……彼女が言っていたのはきっと、エリの事だったのかもしれない。

「今は、アナタがハルにとって特別な人なのよ。一生傍にいてくれるって言わないわ。でも、今一緒に居るのは何かの巡り逢わせ、やっぱり素敵な縁なのよ」

その縁は、些細な喧嘩などで切れるものではない。彼女はそう言いたかったのだと思った。

僕は、穏やかな呼吸で静かに横たわる榛菜を見つめた。

その時病室のドアが開いて一人の男性が入って来た。僕が反射的に椅子から立ち上がって頭を下げると、彼も会釈を返してきた。それが榛菜の父親だと言う事は直ぐに判った。

恰幅かつぶくの良い誠実そうな人だった。

「キミが里見君？」

「あ、はい」

僕は父親に声を返すと

「じゃあ俺、また明日来てみます」

母親に向かってそう言った。

「ああ、気にしなくていいよ」

父親は僕にそう言ったが

「ちようど一端帰りなさいって、今言ってたところだったのよ」

母親は僕を部屋の戸口へ促し、笑顔で送り出してくれた。

やはり父親というのは息が詰まりそうで、彼はああ言ってくれたが、僕は早々に病室を出てしまった。

院内は消灯時間も過ぎているので、常夜灯だけがほの暗く廊下を照らしていた。微かな光に照らされた床には、僕の黒い陰だけがゆらゆらと漂う。それはまるで、何処に掴まればいいのか判らなくて浮遊する魂のようだった。

少し離れた大部屋に亜貴とその友達はある。

僕が静かに部屋を覗くと、ベッドは六つ置いて在り、静まり返った夜気の中に複数の微かな吐息だけが響いていた。

廊下を振り返った僕は、ほの暗い闇の先に在る榛菜の病室辺りを、しばらくの間見つめていた。

◆第70話◆

ベッドに入っても、その晩は寝つけなかった。

疲れているはずなのに、不安が僕の頭を支配して眠気を追い出してしまふ。

医者は元通りに治ると言っていた。骨折ぐらいで歩けなくはないだろう。最近の医療技術は目まぐるしく進歩しているはずだ。

しかしそう自分に言い聞かせる反面、もしかして、という最悪の事態ばかりが頭を過る。

何処かの神経が断絶していたら……何処かの腱が切れて元に戻らなかったら……目を瞑る度にそんな事ばかりが浮かんでは消え、また浮かぶ。

それは、時に恐怖に変わって僕の中で小さな渦を創り出す。

医者は解っているのだろうか。僕の望む『元通り』というのは、寸分狂いなく元通りだ。普通の健常者なら、後遺症が残ってその足を少しぐらい引きずっても日常生活にさほど支障は無いだろう。

しかし、榛菜は既に片脚が無い。残りの右脚を少しでも引きずってしまふようなら、歩く事が非常に困難になる……

僕はそれがたまらなく怖いのだ。

歩けなくなった彼女を好きでい続ける事ができるのだろうか。今まで通り傍にいてやれるか自信が無くて、弱い自分を知っている僕は、怖かった。

そしてやっぱり、彼女の手を振り解いた時の榛菜の切ない顔が何度もフラッシュバックして、僕の心を鷲掴みにした。

僕は、彼女にとって何時まで特別な人でい続けられるだろうか。気がつくとかーテンの外は白み始めていたが、何時の間にか眠りに落ちたようだった。

携帯電話の着信音で目が覚めた。

ぼんやりとした視界に映るものは全てが朧で、僕は頭が朦朧もうろうとしたまま無造作に電話に手を伸ばした。

ほとんど無意識の行動でそれを耳元へ持ってゆく。

「もしもし」

自分でも驚くほどに掠れた声だった。

「あ、里見くん？」

「はい」

「ごめん、まだ寝てた？」

「はあ……いえ、今起きました」

「榛菜、気がついたわよ。術後の状態も今のところ良好だって」
榛菜の母親は早口にそう言って笑った。

僕は深い溜息と共に「よかったあ」

「これから行きます」

一気に眠気は覚めていた。

「えっ？　だってあなた学校……」

僕は電話を切ってベッドから飛び起きると急いで着替え、鞆を持って階下に駆け下りた。

「何よ、朝っぱらから。騒がしい」

母親が父親の食べた食器を洗いながら振り返った。

僕は冷蔵庫からウィダーインゼリーを一つ取り出して、一気に口へ流し込むと

「俺、もう行くから」

そう言って、ヘルメットを抱えて家を飛び出た。

バイクの方が早いだろう。

朝の渋滞車両の間をすり抜けて、前へ前へと出る。

駐車場の隅にバイクを置いて正面玄関を滑り込んで、混み合ったロビーをすり抜けると、病院の階段を駆け上がった。気のせいかな、

院内の白色が、昨日とは全く別世界のように明るい。

三階の外科病棟に着いてから、一度息をついて気持ちを落ち着けた。

病室のドアをノックすると「どうぞ」と母親の声がした。

僕が静かにドアを開けると、二人の笑顔が出迎えてくれた。

「ほらやっぱり来た」

榛菜は母親に向かってそう言った。

「ずいぶん早くない？」

「きつとバイクで来たのよ」

わけが判らずポカンとする僕に榛菜は

「朝に教えたら、絶対ハルくん学校ザぼって来るから、連絡は午後にしてって言ったのよ」

「だって、ねえ」

母親の方は苦笑するばかりだ。

僕は大きなギブスに包まれた榛菜の右脚に視線を落とした。

それに気付いた母親は

「一週間でギブスは取るから、リハビリ頑張ってくれて、先生が」

「そうですか」

僕は惜しげもなく安堵の笑みを浮かべた。

「何か飲み物でも買って来るわね」

母親はそう言って立ち上がると、病室を出て行った。僕たちに気を利かせたのかもしれない。

「学校、行くんでしょ」

榛菜が僕を見上げた。

「えっ……うん。どうしようか」

「行きなよ。そのつもりで制服着てきたんでしょ」

僕は慌てて着替えた為、普段の習慣でつい制服に袖を通してきてしまった。

「駅で……」

「駅？」

「昨日の朝は、ごめんな」

「何だ、そんなこと」

「ハルが付いて来れないスピードで立ち去るのは、反則だよな」

「別に気にしないよ。きり無いじゃん」

榛菜は静かな笑顔で僕を見つめると

「大丈夫だよ、何時も普通でいて。普通に怒って、普通に喧嘩して、普通に……一緒に笑って。あたしがハルくんを追いつくから」

そうだ、榛菜は特別扱いを好まない。だから、喧嘩した時はあれでいいのか。あれがごく普通の、自然な行動だから。

「そうだな」

僕はちよっぴりすり傷のある彼女の頬に触れた。

側頭部の怪我を治療する為に、彼女の長い髪は無造作に切られてしまった。

「ハルくんに置いていかれないように、リハビリ頑張らなくちゃ」

榛菜は僕の手に触れて微笑んだ。穏やかで、静かな笑みだった。

「コーヒーでよかった？」

榛菜の母親が病室に戻って来た。

「あら、ラブシーン見逃したかしら」

「朝っぱらから変なこと言わないでよ。お母さんったら」

榛菜は僅かに首を起こして母親を睨んだ。

僕は手渡された缶コーヒーを一気に飲み干すと

「じゃあ俺、学校行ってきます」

「行ってらっしゃい」

二人の女性からそう言われて、ちよっとテレながら部屋を後にした。

ついでだから、亜貴の病室に顔を出して行こうと思った。どうせ一時間目の授業には間に合わない。

腕の怪我が一番酷い亜貴だったが、やはり全身打撲でまだベッドに寝たきりだった。

「あっ、里見くん」

病室の入り口で片手を上げる僕に、傾斜したベッドから彼女が微笑んだ。

向かい側にいたクラスメイトもこちらを振り返ったので、反射的に小さく会釈をすると、彼女も慌てて頭を下げていた。

亜貴は、ベッドサイドに近づく僕を見上げて

「ハルの様子見に来たの？」

「ああ」

「どうだった？」

彼女も、榛菜の意識が戻った事は母親から知らされているらしかった。

「意外と元気だったよ」

「そうだろうね。じゃ無かったら、ここに来ないもんね」

「そんな事ないけど」

亜貴は僕から視線を逸らすと、天井を見上げて

「本当によかった」

そう言って、安堵の息をついた。

「リハビリが大変そうだけどね」

「それは大丈夫だよ」

亜貴は自信に満ちた笑顔でそう言う

「だって、里見くんが付いてるじゃん」

テレ笑いを浮かべる僕を見て

「あたしも付いてるけど」亜貴がそう付け加えた。

亜貴の目は、少しだけ腫れていた。

もしかして、彼女も昨晩はあまり眠れなかったのかもしれない。

もちろんそれは、身体が痛んだせいかも知れないが……

「ていうかさ、里見くん学校サボり？」

「いや、これから」

彼女の声でそれを思い出した僕は、病室の時計をみて

「あっヤバ、もう行かなくちゃ」

◆第70話◆（後書き）

◆次回最終話です◆

◆最終話◆

本格的な秋の虚空は天高く映え渡り、頭上に広がるイワシ雲が白々と陽の光に輝いていた。

放課後の校舎は文化祭の準備で慌しかった。

バンドをやる連中のエレキの音や、ジャズバンドを結成した吹奏楽部のサックスの音色が心地よい喧騒となって廊下に響き渡る。イベントを行うクラスでは、その装飾の準備に賑わっていた。

そんな中を潜り抜けるようにして、僕は即行で駅へ向かう。

「あれ、陽彦もう帰るの？」

唯一が一階の廊下で声を掛けてきた。

「ほら、アイツあれだから」

そこに一緒にいた信雄が唯に言った。

「ああそうか」彼女は思い出したように

「頑張れ」と手を振ってくれた。

一部の友達は榛菜の事を知っている。彼女の左脚が無い事、そしてこの前の事故で右脚を負傷し、今のリハビリが今後を左右するほど重要だと言う事を。

そんな榛菜を見守る僕を、彼らが見守ってくれているような気がする。

人を思いやる気持ちは連鎖するのだと思った。

昨日、屋上でひとり遠くを見つめる瑞穂の姿を見かけた。僕にはまるで、会話を交わさぬまま別れた親友、橘恭子を想っているような、そんな姿に見えた。

ボタンを掛け違わなければ、恭子も誰かの思いやりに触れられただろうか……いや、きっと今は誰かの思いやりに触れているだろう。

いまの僕には、そう願う事しか出来ない。

毎日通る駅前の銀杏並木も何時の間にか色を変え始めて、確かな季節感を醸し出していた。

榛菜は大部屋に移り、一足先に退院した亜貴は学校帰りに毎日彼女を見舞いに来る。事故の事を知った飯塚も、度々榛菜の病室を訪れていた。

秋夫も一度だけ榛菜を見舞いに来たっけ。

気になるなら何度でも来ればいいのに、彼は僕の携帯にメールで自分の姉の容態を聞いてくる。

まあ、それがアイツらしいと言えばそうかもしれないが。

僕は、バイトの入リ時間を一時間遅くして、さらにヒカリのシフトと交代してもらった為、今は週に三日イタ飯屋を休んでいる。

榛菜たちに突っ込んだ車の運転手はその場で逮捕されたが、どうしてハンドル操作を誤ったのかは未だはっきりとは判らないらしい。ノイローゼ状態で、錯乱していたと言う話も聞いた。後に危険運転致死罪で再逮捕されたらしいが、精神鑑定なども行われるそうで、判決が出るには少々時間がかかりそうだ。

「じゃあね」

「うん。またね」

亜貴が元氣良く手を振ると、榛菜もそれに応えて手を振り返す。

彼女は何時も僕と入れ替わるように病院を後にする。

この前病院の前で初めて亜貴の彼氏を見かけたけど……それは関知しないでおこう。

「寒くないか？」

「うん」

僕は、夕方に彼女の車椅子を押して院内を散歩するのがほとんど日課だ。いかにも都心の病院らしく、ここには散歩できるような広い庭は無い。

榛菜は精力的にリハビリに励んでいるが、膝の靭帯も損傷してい

た為まだ自由に歩き回るには時間がかかるそうだ。

それでも、ギブスを外した彼女が日に日に歩けるようになっていく姿には、確かな希望を感じている。

しかし僕は、こうして彼女の車椅子を押して歩くのがちょっぴり楽しい。

何が、と言うのは判らない。

ただ、周囲から注がれる僅かな視線は、僕に快哉かいさいとも取れる錯覚を起こさせるのだ。

これは、ある種の独占欲を満たす行為なのかもしれない。

車椅子を押す者と押される者。その関係が何処か特別に感じるのは僕だけなのだろうか。

だから僕は、池袋で飯塚の車椅子を押す榛菜の姿に特別な関係を感じて、嫉妬してしまったのだと思う。

彼女は彼女で、普段は自分で車椅子を自由に走らせているが、僕が押す時は両手をフリーにして任せっきりだ。

もしかして、密かに独占される喜びに浸っているのかもしれない。

「そう言えばさ」

榛菜が後ろにいる僕を見上げた。ショートカットにした黒髪がサラリと揺れる。

「何？」

「池袋を探索する時間、無くなっちゃったね」

「ああ……あれは、もういいよ」

……もういい。彼らに振り回されるのは終わりにしよう。それをいくら追及しようとも、聡史は帰ってこないし、ケンイチと再び笑顔を交わす事も無いのだから。

そして今は、目の前に支えなければいけない人がいるから。

「そう」

榛菜はそう言って頷くと再び僕を見上げて

「ねえ、あたしたちって、付き合ってるのかな」

「はあ？　な、なんだよ急に」

「だって、そう言う言葉ハルくんから聞いた記憶ないし」
「そんなの……そんなの、今更言わなくなったって判るだろ」
「判んない」

榛菜は悪戯っぽく笑った。

「た、誕生日」

「えっ？」

「次の誕生日に言ってやるよ」

「ええ？ 半年も先じゃん。しかもハルくん忘れそう」

それでも彼女は楽しみがひとつ増えたような、そんな笑みを浮かべて窓の外を眺めた。

「ねえ、売店でなんか買おう。もう直ぐ閉まっちゃうよ」

「またあ」

僕は榛菜の車椅子に寄りかかって笑うと

「入院中に太んなよ」

「失礼な。ちゃんとカロリー使ってますう」

僕は肩をすくめると、病棟を繋ぐ通路からロビーを抜けて売店へ向かった。

外来時間の終了した待合ロビーの人影はまばらで、散歩途中の入院患者が長椅子に腰掛けて休んでいたりする。

西の窓から見えた夕映えは、高層ビルの黒い陰に遮られながら静かに紺青へと色を変えて、宵の明星が微かに輝いていた。

「あ、一番星だ」

「金星だろ」

「そうなの？」

「宵の明星は金星さ」

「へえ、ハルくん変なこと知ってるね」

「別に、変じゃないだろ」

「そうか、あれって金星だったんだ」

榛菜は楽しそうに笑って「明日、亜貴が来たら教えてやる」

最近僕はふと思う。

小さい頃に絵本やテレビで目にした、^{かしのき}櫛木で出来たピノキオ。

それは、まだ粗雑な出来だった榛菜の左脚を初めて見た時に、思わず形容してしまった言葉。

確かピノキオには、常に彼を見守り続ける森の妖精か天女がいたはずだ。彼女がそうしたように、僕が榛菜を見守っていくのもいい。ずっと彼女の傍にいて、この笑顔を見たい。

そこには偽善や哀れみなんてひと破片^{かけら}も存在しない。

もちろん僕には、榛菜の左脚を生身に変えてあげる事はできないけれど。

「なあ。ハルたちのボランティアって、俺にもできるかな」
「えっ？　どうしたの、急に」

END……

『あとがきにかえて』

『あとがきにかえて』

未熟な文章表現にも関わらず、最後まで読んでくださった方々には大変感謝いたします。

二人の付き合いはこの後も続きます。そして苦悩も……

それが何処まで続いて、二人が幸せになるかどうかは皆さんの想像にお任せいたします。

死なない限り人生にはゴールが無いので、ストーリー中のハッピーエンド、バッドエンド共に、どちらにしても結局彼らにとっては通過点に過ぎないと私は思っています。

だから、この先に人生が続いているという終わり方が、私は好きです。

もちろん、そういう終わり方に釈然としない方もいると思います
が……

この作品は、障害を持つ人を哀れむ話ではありません。

また、そんな女性を選んだ主人公を不運に感じる作品でもありません。

自立心のある障害者はその頻度の中で出来る限りの事を人並みにこなせます。または、こなそうと努力します。

ただ、その中には健常者の知らない苦悩が節々に散りばめられているのも事実です。

直向な努力は、全てはありませんが本人に見返りを与えてくれる

と思います。

そんな娘を描いてみたくてこの小説を書いたような気がします（重度の障害に比べれば、榛菜のそれは軽いものですが…）

話の中には榛菜を除いたエピソードも多々ありますが、結局は、視点である陽彦は脇役だったのかもしれませんが。

t o k u j i r o u

『あとがきにかえて』（後書き）

◆最後までお付き合いいただき、ありがとうございました◆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7663b/>

ピノキオのあし

2010年10月8日12時54分発行